

金剛峯寺遺跡

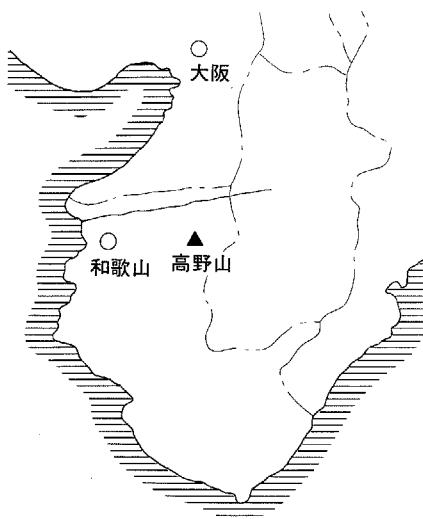
——尼僧研修道場建設に伴う発掘調査報告書——

1996年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

金剛峯寺遺跡

—尼僧研修道場建設に伴う発掘調査報告書—



1996年3月

財団法人 和歌山県文化財センター



漆塗椀（第8層出土）



舞良戸（SK-17出土）

序 文

高野山は弘法大師の開祖となる真言密教の聖地として全国的に広く知られ、また、膨大な宗教遺産を保有していることにおいても有名であります。

深山嶺上には、法燈の絶えざる長い時間の流れを物語るが如く、金剛峯寺をはじめ多くの子院が林立しております。これらの建造物の中には度重なる火災に遭遇し、焼失、再建を繰返し現在に至るものや、過去に名を留める建物などがあります。

金剛峯寺遺跡の発掘調査は、開山1150年の記念法会に先立つ高野山奥之院の整備事業に端を発します。今日まで数次にわたる発掘調査が行われ、多くの貴重な遺構や遺物が発見され、多大なる成果をあげてまいりました。このことは「発掘調査により高野山の往時を偲ぶことができる。」と言っても過言ではありません。

本報告書は尼僧研修道場建設に伴うもので、昭和60年に事前に発掘調査を行う運びとなり、中世から近世に至る遺構が検出され、多数の遺物も出土しました。ここにその成果を報告書に刊行して、今後の調査の一助ともなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、今回の発掘調査並びに整理事業が滞おりなく終了できましたのは、金剛峯寺はじめ、高野山文化財保存会関係各位の御協力のたまものと存じ、ここに厚く感謝の意を表します。

平成 8 年 3 月

財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 仮 谷 志 良

例　　言

- 1 本書は、尼僧研修道場建設に伴う金剛峯寺遺跡発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は(社)和歌山県文化財研究会が金剛峯寺から委託を受け実施し、遺物整理は同研究会から業務を継承し、(財)和歌山県文化財センターが(財)高野山文化財保存会から委託を受け実施した。
- 3 発掘調査は、和歌山県文化財保護審議会埋蔵文化財部会委員の指導を受け、県文化財課技師上 田秀夫が担当し、(社)和歌山県文化財研究会技術員井石好裕・佐伯和也・黒石哲夫(現 和歌山県教育委員会文化財課)・瀬野耕平(現 海南省議会事務局)がこれを補佐した。
- 4 出土遺物の整理は(財)和歌山県文化財センターの佐伯が実施し、本書の編集及び執筆も佐伯が担当した。第4節については(財)元興寺文化財研究所 井上美知子氏に玉稿をいただいた。また、当報告書作成にあたっては、堺市立埋蔵文化財センター森村健一氏、当センターの諸氏の指導助言を得た。
- 5 発掘調査にあたっては、(財)高野山文化財保存会、高野町教育委員会の協力を得た。
- 6 本書に使用した遺構の略号は下記のとおりである。

S B－建物跡、S A－柵、S D－溝、S K－土坑、S E－井戸
- 7 本書の遺物実測図と写真図版とに付した番号は一致する。写真図版に収録した遺物は掲載遺物の一部であるため、写真収録遺物については実測図の遺物番号に○を付した。(例、⑩)また、とくに縮尺を統一していない。
- 8 本調査における調査記録(遺構実測図・遺物実測図・遺構写真・遺物写真)は(財)和歌山県文化財センターが保管し、出土遺物は(財)高野山文化財保存会が保管している。
- 9 本書に掲載した遺構実測図の割付け数値は国土地標(第VI系)を使用した。また、北方位は座標北を示している。

調査組織

(社) 和歌山県文化財研究会（昭和60年度）

調査委員

岡田英男（和歌山県文化財保護審議会委員）
鵜磨正信（〃）
巽三郎（〃）
都出比呂志（〃）
藤澤一夫（〃）
安原啓示（〃）

調査員

上田秀夫（和歌山県教育庁文化財課技師）
井石好裕（社団法人和歌山県文化財研究会技術員）
佐伯和也（〃）
黒石哲夫（〃）
瀬野耕平（〃）

事務局

常務理事 梅村善行（和歌山県教育庁文化財課課長）
事務局長 垣内茂（和歌山県文化財研究会事務局長）
次事務局長 北野全美（和歌山県教育庁文化財課主幹）
専門員 桃野真晃（〃 第2係長）
主任技術員 吉川宣夫（〃 主査）
辻林浩（〃）
松田正昭（〃）
書記 今田一里（〃 主事）

(財) 和歌山県文化財センター（平成6年度）

調査委員

岡田英男（和歌山県文化財保護審議会委員）
鵜磨正信（故人）（〃）
巽三郎（〃）
都出比呂志（〃）
藤澤一夫（〃）

事務局

事務局長 鍋島伊津夫（和歌山県文化財センター専務理事）
事務局次長 菅原正明（和歌山県教育庁文化財課主幹）
管理課長心得 西本悦子
埋蔵文化財課長 松田正昭（和歌山県教育庁文化財課主任）
主任 松下彰（〃）

(財) 和歌山県文化財センター（平成7年度）

調査委員

岡田英男（和歌山県文化財保護審議会委員）
巽三郎（〃）
都出比呂志（〃）
藤澤一夫（〃）

事務局

事務局長 中谷博昭（和歌山県文化財センター専務理事）
事務局次長 菅原正明（和歌山県教育庁文化財課主幹）
管理課長心得 西本悦子
主任 人事 松尾克人
埋蔵文化財課長 松田正昭（和歌山県教育庁文化財課主任）
主任 松下彰（〃）

目 次

序 文

調査組織

例 言

本 文 目 次

第Ⅰ章 遺跡

第 1 節	高野山	1
第 2 節	歴史的環境	2
第 3 節	既往の調査	3

第Ⅱ章 調査の成果

第 1 節	層序と検出遺構	7
第 2 節	包含層の出土遺物	9
第 3 節	検出遺構と出土遺物	33
第 4 節	出土木製品の樹種鑑定について	59

第Ⅲ章	まとめ	63
-----	-----------	----

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡の範囲	1	第10図	第 2 層出土遺物実測図	17
第 2 図	調査地周辺古絵図	2	第11図	第 3 層出土遺物実測図 1	19
第 3 図	本調査地及び既往の調査地	5 · 6	第12図	第 3 層出土遺物実測図 2	20
第 4 図	基本的層序	7	第13図	第 4 層出土遺物実測図 1	23
第 5 図	近世整地土出土遺物実測図 1	11	第14図	第 4 層出土遺物実測図 2	24
第 6 図	近世整地土出土遺物実測図 2	12	第15図	第 5 層出土遺物実測図	26
第 7 図	近世整地土出土遺物実測図 3	13	第16図	第 6 層出土遺物実測図 1	27
第 8 図	第 1 層出土遺物実測図 1	15	第17図	第 6 層出土遺物実測図 2	28
第 9 図	第 1 層出土遺物実測図 2	16	第18図	第 7 層出土遺物実測図	30
第19図	第 8 層出土遺物実測図	31	第33図	S K - 9 遺物実測図	44
第20図	S D - 1 遺物実測図	33	第34図	S K - 10 遺物実測図	44

第21図 S D - 2 遺物実測図	33	第35図 S K - 12 遺物実測図	45
第22図 S D - 3 遺物実測図	34	第36図 S E - 1・2 実測図	46
第23図 S D - 4 遺物実測図	34	第37図 下面遺構平面図	47・48
第24図 上面遺構平面図	35・36	第38図 S K - 13・14 遺物実測図	49
第25図 S D - 10 遺物実測図 1	38	第39図 S K - 15 遺物実測図	50
第26図 S D - 10 遺物実測図 2	39	第40図 S K - 16 遺物実測図	50
第27図 S K - 1 遺物実測図	40	第41図 S K - 17 実測図	51
第28図 S K - 2 遺物実測図	41	第42図 S K - 17 遺物実測図	53
第29図 S K - 3 遺物実測図	41	第43図 建物柱間模式図	54
第30図 S K - 4 遺物実測図	42	第44図 建物遺構配置図	55・56
第31図 S K - 5 遺物実測図	42	第45図 遺構及び包含層出土木器	58
第32図 S K - 8 遺物実測図	43		

写真図版目次

P L - 1	調査前全景（東から）・下面遺構全景（南から）
P L - 2	A区下面遺構検出状況（南から）・B区下面遺構検出状況（南から）
P L - 3	C区上面遺構検出状況（南から）・C区下面遺構検出状況（南から）
P L - 4	D区上面遺構検出状況（南から）・D区下面遺構検出状況（南から）
P L - 5	S E - 2 検出状況及び完掘状況・S E - 1 完掘状況 S K - 17 内舞良戸出土状況・筵検出状況 柱根及び礎板検出状況
P L - 6	遺物
P L - 7	遺物
P L - 8	遺物
P L - 9	遺物
P L - 10	遺物
P L - 11	遺物

表 目 次

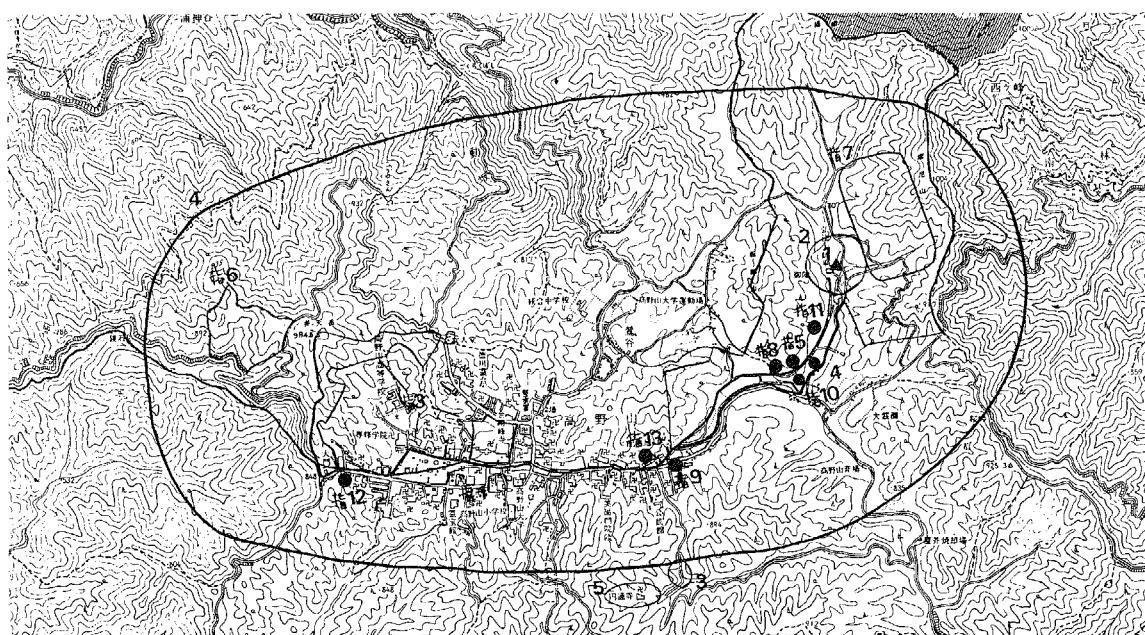
第1表 金剛峯寺遺跡既往調査一覧	4
第2表 掘立柱建物一覧表	57

第Ⅰ章 遺 跡

第1節 高野山

金剛峯寺遺跡は伊都郡高野町高野山に所在する。従って、その遺跡の範囲は、靈峰高野山山頂の平坦地に展開する寺院や町並みのすべてであり、ほぼその範囲は東西4km、南北2kmである。標高1,000m前後の山々に囲まれたこの地は夏は涼しく、冬は厳寒の地として知られる。

高野山は開山以来、千年以上の歴史の中で幾多の紆余曲折を乗り越え、日本の宗教においてリーダー的存在として今日に至っている。この史実を裏付けるが如く、この広大な遺跡の何処を発掘調査しても、此處に生きた先人達の生活の一端を、遺構・遺物などから垣間見ることができる。金剛峯寺の核を成すものとしては、西から順に大門、壇上伽藍、奥之院があげられる。その周辺には数多くの塔頭や子院が連立している。大門は「金剛峯寺根本縁起」では今の場所より西側の低い箇所に記載されている。現大門は元禄期に再建されたもので、金剛峯寺の総門とされている。壇上伽藍には中門跡、金堂、不動堂、根本大塔、西塔などが建ち並ぶ。この壇上伽藍の諸堂も度重なる火災に遭遇し、再建を繰返している。奥之院は大師入定の地としてよく知られる高野山の聖地である。一の橋から御廟に至る参道の両脇には諸藩の大名をはじめ著名人の墓石が立ち並び、その数約20万基を超えると言われている。また、かつての高野山参詣の幹線である町石道は、金堂から九度山町の慈尊院まで216町に及ぶもので、高野山には欠かせないものである。(註1)



第1図 遺跡の範囲(和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図から転載)

第2節 歴史的環境

總本山金剛峯寺は弘仁7年（816）弘法大師（空海）により開山された真言密教の聖地です。

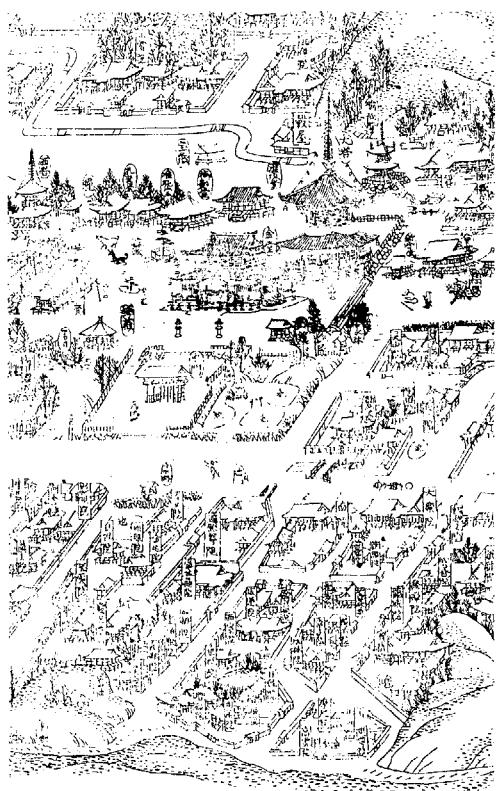
空海は宝亀4年（774）讃岐国に生まれ、延暦22年（804）天台宗開祖最澄とともに遣唐使藤原葛野麻呂に随行し、留学僧として入唐しました。その後、唐の都長安（現在の西安）の青龍寺僧惠果のもとで真言宗を学び、大同元年（806）に帰国し、京都仁和寺において嵯峨天皇の加護のもと真言宗を広めることに心血を注ぎました。

空海の高野山金剛峯寺の開創は、弘仁7年（816）嵯峨天皇から同地を賜ったことに端を発します。先に実惠・円明を高野山に遣わし伽藍建設に着手させ、次いで弘仁9年（818）自ら登山し、建設工事の総指揮にあたった。この工事は私寺金剛峯寺として行われ、金銭的には国家の助けもなく、そのほとんどは勧進に頼らねばならなかったようであり、従って、建設工事も遅々として進まなかった。またこの頃、空海は東寺別当に任じられ世事忙しく、金剛峯寺建設に専念できなかつたようである。建設工事の遅れは、このような要因が重なつてのことと考えられる。

金剛峯寺建設の進行状況は大師入定の承和2年（835）までには大塔、金堂、僧坊が完成していましたに過ぎなかつたと、「金剛峯寺建立修行縁起」が伝えている。その後、造営事業は第二世真然大徳僧正や、大師の一番弟子である東寺の長者実惠等に受け継がれ、造営料の捻出に悪戦苦闘しながら9世紀後半に伽藍完成に至つたようである。

真然・実惠が寂した後第四世無空の時、東寺より借覧していた大師の著わした「三十帖策子」の返却問題がもちあがつた。しかし、延喜16年（916）無空はこれを拒否し、この勘文を持出し、山城国の圓提寺に下山した。この時多くの寺僧もこれに賛同し高野山を去ることになる。延喜18年（918）にはこの問題も無空が寂したことにより解決に至つたが、山上にはほとんど人影が無いという荒廃時期が数十年続いたと云われている。この頃、東寺の長者と金剛峯寺座主を兼ねていた觀賢僧正により大師号を得るために朝廷に上表を行つた。これにより大師入定の年から86年の後延喜21年（921）醍醐天皇より「弘法大師」号が贈られた。

このことにより、勧進僧等による復興の機運が高まり、治安3年（1023）には藤原道長、永承3年（1048）



第2図 調査地周辺古絵図

（高野山古絵図集成から転載）

にはその子頼道が登山し、その後多くの貴紳の参詣を促した。この時の庄園寄進や布施などにより、その寺領や寺力を蓄え、堂塔の再建も行なわれた。このように政治的な力（院政・攝関期）も関与して、天下の靈場としての地位を確立し、納骨信仰や埋経も盛んに行なわれるようになり、その後、今日まで繁栄の一途を辿ることになる。

現在の塔頭子院の連立する範囲は、概ねこの時期（11世紀）に築かれたと言っても過言でない。
(註2)

第3節 既往の調査

高野山における発掘調査は過去に十数度行なわれている。県下はもちろんのこと、日本に於いて古代から近世に至る代表的な宗教遺跡である。高野山全域のあらゆる処の発掘調査を実施しても、山内のいたる処から遺構・遺物が検出あるいは出土することから、一山の総称でもある金剛峯寺の名をもって遺跡名としている。

金剛峯寺遺跡の発掘調査は弘法大師開創1150年記念法会、あるいは入定御遠忌大法会をそれぞれ昭和40年、59年に執り行うこととなり記念事業の一環として改装、新築工事、または整備事業に端を発するものである。次に各調査毎にその内容を簡単に記述する。

A. 【奥之院御廟周辺の整備事業に伴う発掘調査】

開創1150年法会のための整備事業で、灯籠堂取り壊し時に一石五輪塔、納骨器、中国製磁器類などが出土した。次いでこの東側石垣下でも整地作業中に金銅製仏像、経筒片などの出土をみる。また、御廟周辺瑞垣新設工事に伴い銅製・鉄製経筒、陶製外容器なども出土している。この様に調査というよりもその前段階のもので、調査の必要性を問うものとなる。

B. 【第二灯籠堂建設に伴う発掘調査】

納骨信仰の広がりを奥之院周辺の杉の古木下に確認し、蔵骨器と共に出土した一石五輪塔と納骨信仰との関係を出土位置などの詳細な記録から解明している。出土遺物には「応永十三年」(1406)銘の五輪塔の地輪部、中国製白磁四耳壺・青磁水注・褐釉四耳壺・褐釉壺、灰釉四耳壺、綠釉陶器片などが出土し、特に袋物が目立つ。

C. 【教化研修道場建設に伴う発掘調査】

「屋敷地取作法」を伴う江戸時代の建物遺構を検出している。この屋敷地取作法は建物の四隅と中央にそれぞれ5枚の陶器皿を折敷に配し埋置するものである。他にこの時期の建物遺構を4棟、素掘井戸、排水溝、池などを検出している。次いで、この面から70cm下で厚さ10cmの大永元年の焼土層を確認し、礎石建物遺構3棟を検出している。明時代の輸入陶磁器が出土している。

D. 【東塔再建に伴う発掘調査】

壇上伽藍の東に位置する東塔跡を、礎石と基壇の二方面から検討している。また、土壇上において検出した10個のピットの性格を「東塔再建時の足場遺構」としているのも興味深い。

E. 【大門前道路拡幅工事に伴う発掘調査】

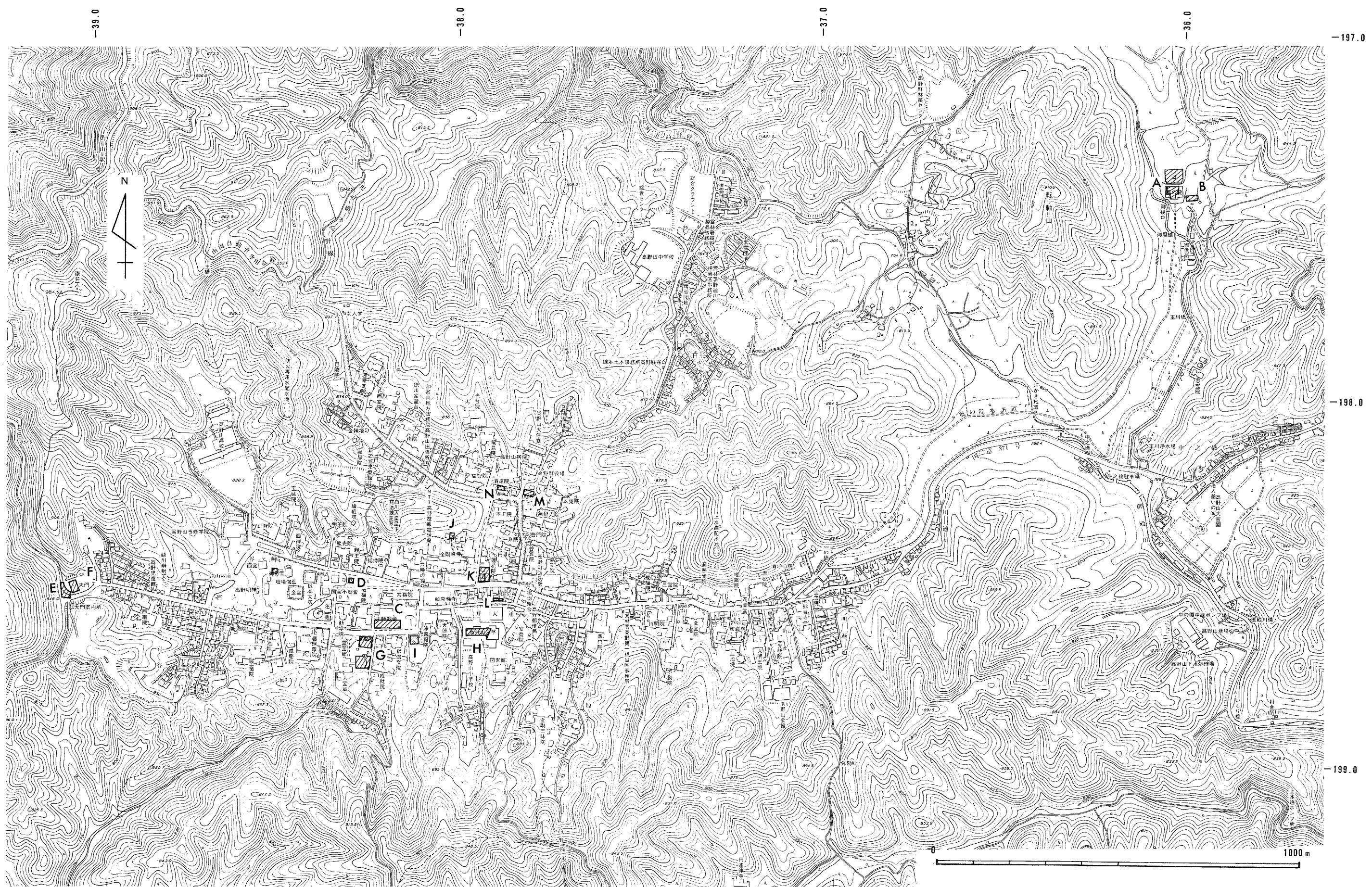
現存する大門正面の道路を拡幅する際の発掘調査で、5箇所のトレンチを設定した試掘調査である。調査結果3層の焼土層を確認し、第2の焼土層は出土遺物から16世紀、第3の焼土層は15～16世紀のもので大門焼失時の天正五年に合致するものであると考えられている。岩盤(地山)の状況や整地土の方向性から、この地における当初大門の位置と規模を推測している。

F. 【大門解体修理に伴う発掘調査】

素屋根建設に伴う発掘調査として、大門の正面と背面の調査を行い、次いで基壇部分の調査を行なっている。正面側の調査では4次の遺構面を確認し、検出遺構は溝、土坑、柱穴等がある。背面側は3次の遺構面を確認する。遺構は万治元年(1658)の「高野山全山絵図」に描かれている大門に隣接する江戸時代初期の坊跡の区画石垣、側溝、溜め柵、井戸等を検出している。出土遺物は中国製磁器、備前焼、常滑焼、信楽焼、美濃・瀬戸施釉陶器、肥前系の陶磁器などがある。

	調査年度	調査の原因・種類	面積(m ²)	調査主体	文 献	発 行	発行年月日
A	1962 ～1964	奥之院御廟所周辺の整備		和歌山県教育委員会 (財)高野山文化財保存会	高野山奥之院の地質	和歌山県教育委員会 (財)高野山文化財保存会	1975.12.15
B	1977	第二灯籠堂建設のため		(財)元興寺文化財研究所	高野山発掘調査報告書	(財)元興寺文化財研究所	1982.3.21
C	1980	教化研修道場建設のため		"	"	"	"
D	1980	東塔再建のため		"	"	"	"
E	1981	大門前道路拡幅のため	トレンチ調査	"	"	"	"
F	1981 1983	大門解体修理のため	約1,610	(社)和歌山県文化財研究会	重要文化財金剛峯寺大門修理工事報告書	(財)高野山文化財保存会	1986.12
G	1982 1983	豪宝館新収蔵庫および駐車場建設のため	3,000	発掘(社)和歌山県文化財研究会 整理(財)和歌山県文化財センター	金剛峯寺遺跡「豪宝館新収蔵庫および駐車場建設に伴う発掘調査報告書」	(財)和歌山県文化財センター	1990.3.30
H	1984	高野山大学校舎改築のため	約1,840	発掘(社)和歌山県文化財研究会	金剛峯寺「尼僧研修道場建設に伴う発掘調査報告書」	(財)和歌山県文化財センター	1995.3.30
I	1985	尼僧研修道場建設のため	480	発掘(社)和歌山県文化財研究会 整理(財)和歌山県文化財センター	金剛峯寺「尼僧研修道場建設に伴う発掘調査報告書」	(財)和歌山県文化財センター	1990.2
J	1988	真然堂修理およびのため肩廻鑿備	トレンチ調査	総本山金剛峯寺 (財)高野山文化財保存会	和歌山県指定文化財「金剛峯寺真然堂修理工事報告書」金剛峯寺真然堂	総本山金剛峯寺 (財)高野山文化財保存会	1990.9
K	1989	南都銀行高野山支店新築のため	約470	(財)和歌山県文化財センター	金剛峯寺遺跡「南都銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査」	(財)和歌山県文化財センター	1991.3
L	1990	紀陽銀行高野山支店新築のため	170	(財)和歌山県文化財センター	金剛峯寺遺跡「紀陽銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査」	(財)和歌山県文化財センター	1992.9
M	1992	防災施設貯水槽新設のため	120	(財)和歌山県文化財センター	金剛峯寺遺跡「紀陽銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査概報」	(財)和歌山県文化財センター	1993.12
N	1992	警察庁舎等建設のため	160	(財)和歌山県文化財センター	「金剛峯寺遺跡「紀陽銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査」」	(財)和歌山県文化財センター	1993.12

第1表 金剛峯寺遺跡既往調査一覧



第3図 本調査地および既往の調査地

基壇部分の調査はサブトレンチを入れ版築の状況を確認している。梁間中軸線上にトレンチを入れ、地鎮、鎮壇遺構を検出している。地鎮遺構は7枚の土師器皿が埋置され、うち1枚には五穀の一つと思われる炭化植物が遺存していた。皿の下には五色の自然石が置かれ、それぞれに梵字一字が書かれている。さらに中央の白色の石の下には賢瓶が埋められ、その中に「五宝」「五香」「五薬」「五穀」に相当する遺物が納められていた。鎮壇遺構は土坑に輪宝と蕨が納められていた。地鎮・鎮壇は現大門の中軸線と合致することから、元禄の再建時のものとみられている。

G. 【靈宝館新収蔵庫及び駐車場建設に伴う発掘調査】

金剛峯寺遺跡として最も広範囲な発掘調査である。新収蔵庫の調査対象地区の地形は6段の江戸時代の子院敷地である。最も遺構面の多い箇所で表土層を含め、12層の整地層を確認している。ここでは4面の遺構面を検出し、その時期幅は概ね15世紀中頃から19世紀までである。近世の検出遺構は、掘建柱建物跡、井戸、埋桶、土坑などがある。また、中世の遺構は礎石建物跡、埋甕、地鎮遺構、池状遺構、溝などを検出している。駐車場用地対象地区は「大楽院」に伴う遺構とされている。ここでは4面の遺構面を検出している。その時期幅は17世紀前半から19世紀中頃とされる。第1～第3面までの焼土層を時期決定の基準としている。検出遺構は礎石建物、柵、井戸、埋桶、土坑などが報告されている。

J. 【真然堂保存修理工事に伴う発掘調査】

真然堂基壇の発掘調査である。4時期の基壇の変遷を確認している。一辺0.8m、深さ0.3mの木炭を詰めた方形の墓坑を検出している。その中から猿投窓と推定できる縁袖四足壺が出土している。骨壺の中からは火葬骨、木炭上からは鉄板を検出し、判読不可能ではあるが真然僧上の墓誌と断定できる。^(註3)また、変遷の第2期にあたる12世紀前半に覚鑓が真然墓を多宝塔に整備していることが知られている。調査終了後、元の位置にこの壺を埋置した。

K. 【南都銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査】

2面の遺構面を検出している。時期は17世紀初頭から明治時代に収まる。出土遺物は県下では珍しい16世紀末から17世紀初頭にかけての中国製磁器が出土している。

L. 【紀陽銀行高野山支店新築工事に伴う発掘調査】

2面の遺構面を確認し、遺構の時期を3時期に分け、これをさらに細かく出土遺物から5時期に分類している。この地区に隣接する過去の調査地の結果をもとに、小田原通りの町屋への転換期を推測している。

M. 【高野山文化財防災施設貯水槽新築工事に伴う発掘調査】

主に江戸時代の水利施設と考えられる遺構を検出している。

N. 【警察庁舎等建設に伴う発掘調査】

約160m²の狭小な範囲ではあるが、鎌倉時代の建物遺構と苑池の一部を検出している。^(註4)

第II章 調査の成果

第1節 層序と検出遺構

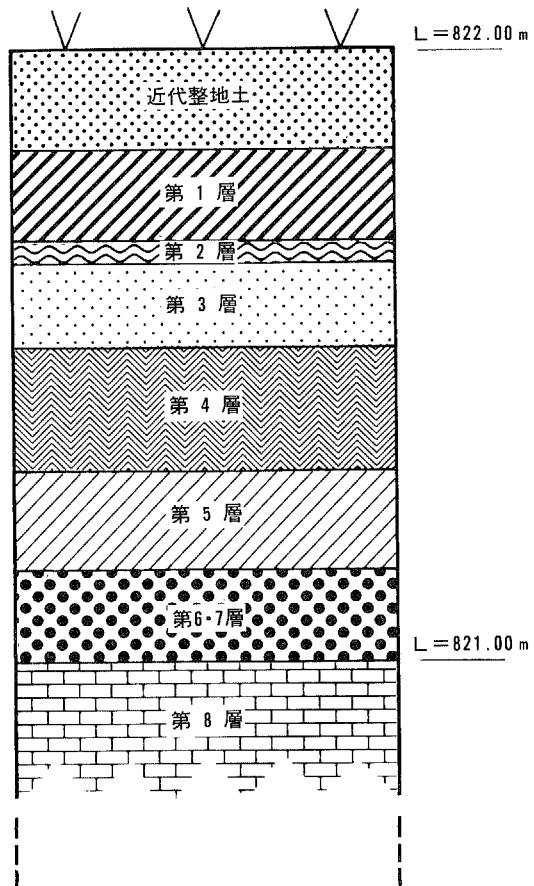
調査地の土の体積状況は整地土である。整地土は第8層まで確認した。近代の整地土(表土)は重機により除去し、第1層から第8層までを人力により調査確認した。遺構検出面は整地の状況により場所によっては異なるが、基本的には第3層除去後(上面遺構としているもので、第1層上面～第4層上面の間で検出している。)と第7層除去後(下面遺構としているもので、第5層～第8層上面あるいは、地山上で検出している。)の2面を確認した。

上面検出遺構のほとんどは土坑、溝などであり、上述した如くこれらの中には第2層、3層上から検出したものもあった。

下面の検出遺構は土坑、井戸、掘立柱建物、谷状遺構などであった。ここで問題なのは、掘立柱建物の何棟は検出すべき面より下面で検出している。本来は上面で検出できたものもあると考えられる。柱穴からは瓦器細片のみの出土であり、決定的な時期判断には至らない。

高野山の発掘においては通常焼土層により遺構の時期が決定できるが、今回の調査では近代整地土と第1層の間で、厚さ2～4cm程度の焼土層を調査区の一部で確認したのみである。この焼土層はおそらく文化6年(1809)、あるいは天保14年(1843)の大火時のものと考えられる。

第1層は厚さ約10cmで濃茶色の砂質土であった。この上層の焼土が天保14年(1843)のものまたは万延元年(1860)のものとしても、出土遺物からもう少し時期が下ると考えられる。或いは上層からの遺物の混入かもしれない。第3層は黄茶褐色砂質土に1～3cm大の岩盤を碎いたものが入り、明らかに整地土と思われるものである。第8層は地盤が軟弱なため、トレンチを入れ確認した。全体に炭が入る黒灰色の粘土で、その下には大木を置き、先に記した谷状の地形を埋立てていると考えられる。時期的には11世紀末から12世紀初頭の遺物が主であるが15世紀代の土器を混入している。



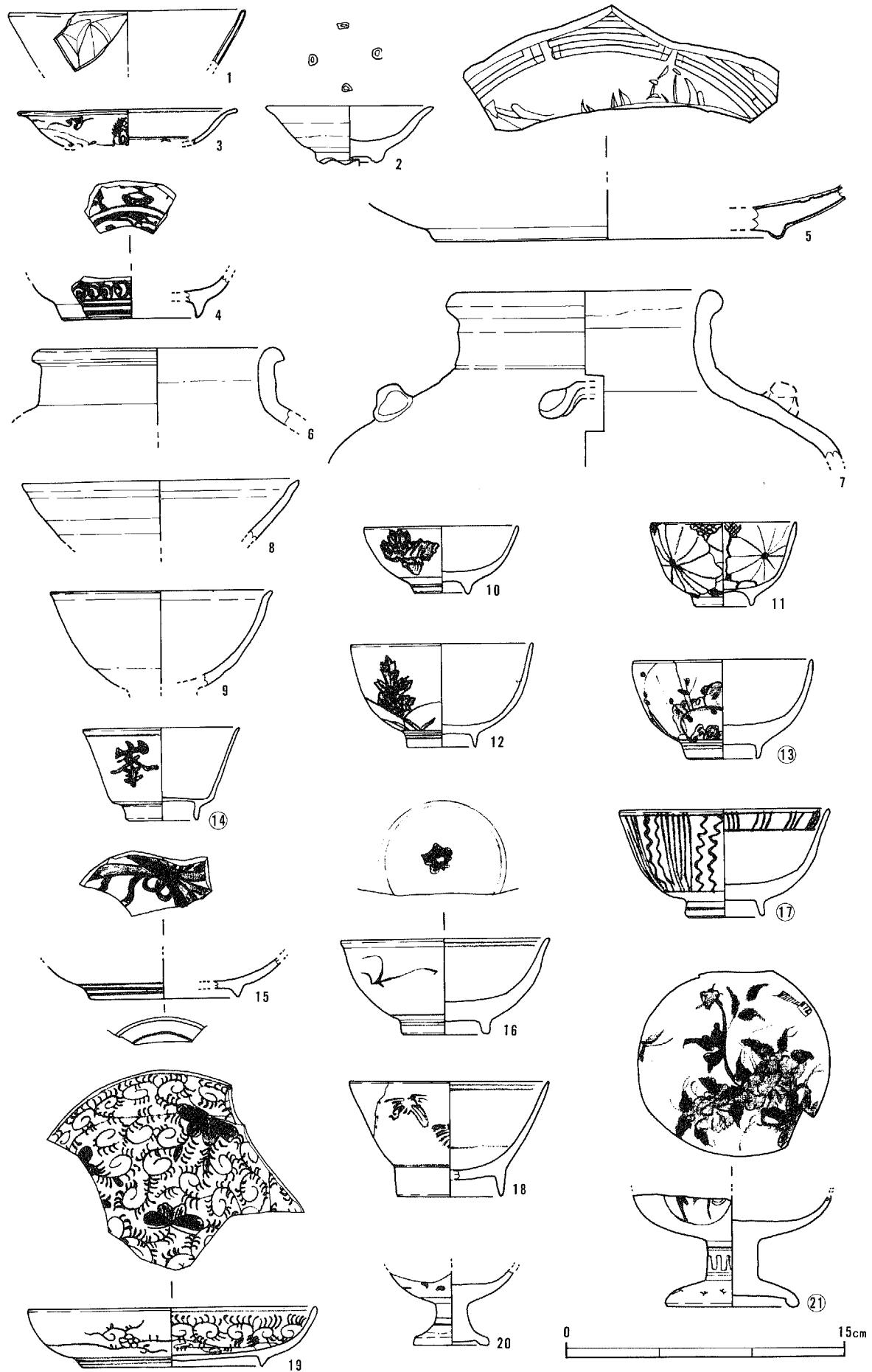
第4図 基本的層序

第2節 包含層の出土遺物

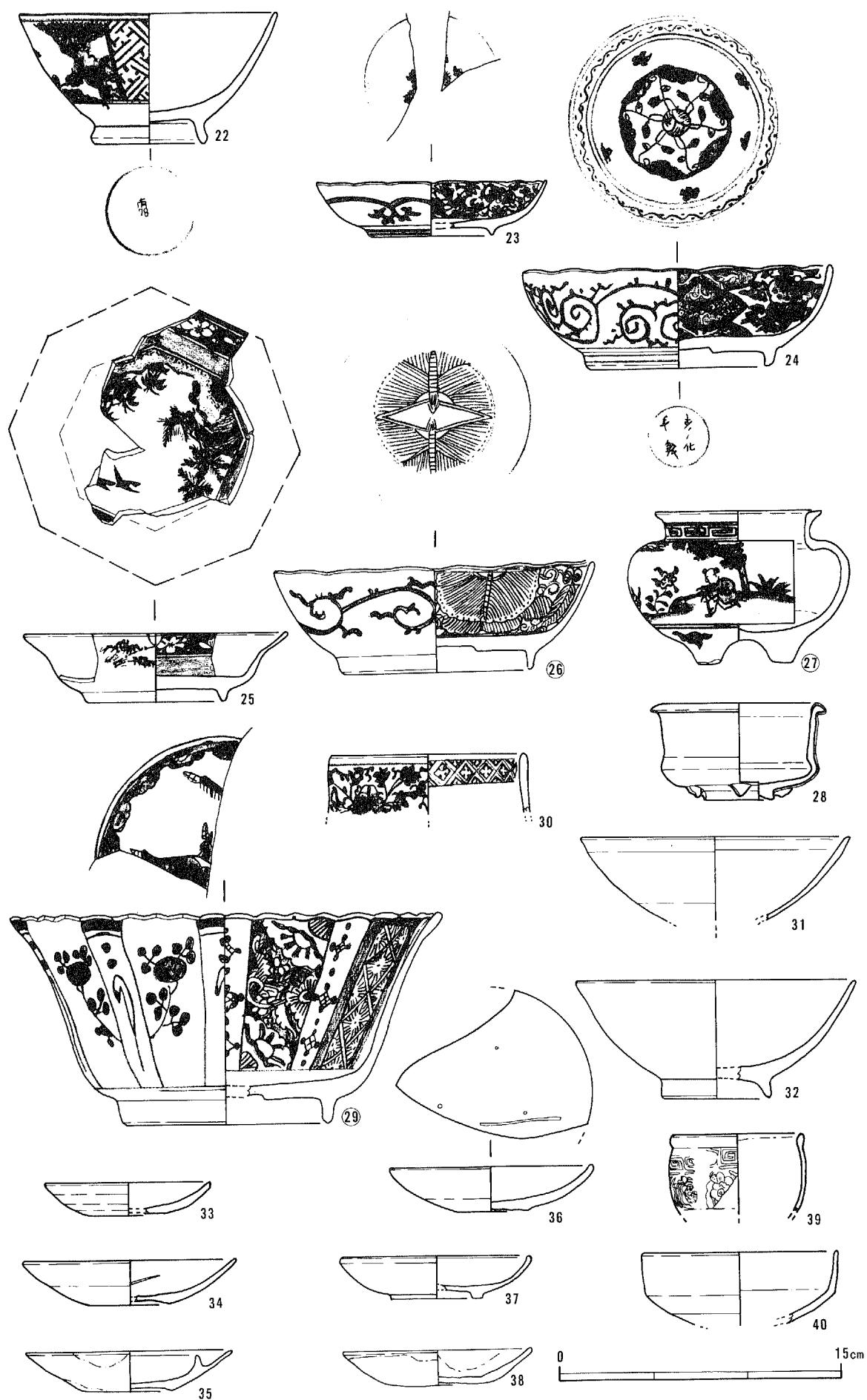
近世整地土出土の遺物（1～52）（第5・6・7図）

1は龍泉窯系の碗である。体部外面には片切彫の粗雑な蓮弁文が認められる。灰色の胎土に薄緑色の釉が均一にかかる。2は白磁皿である。乳白色の釉が体部下半部までかかり、その下は露胎としている。高台には4個の抉りをいれている。また、見込には重ね焼の痕跡が残る。3・4は染付皿である。3は外面体部に牡丹唐草文を描き、4は渦状唐草文を描く。5は青磁盤である。釉は濃草色を呈し、口縁部欠損のためはっきりとした器形は不明であるが、端部で上方に摘み上げるタイプと考えられる。6は白磁の四耳壺である。白濁色の釉を厚くかける。7は黒釉四耳壺である。釉を口縁内面までかけた後、口縁上端部の釉を拭き取り、口縁内面から肩部にかけて釉を雜に刷毛塗する。8は灰釉平椀である。体部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部外面はやや強いナデのため凹みが巡る。口縁端部は尖りぎみである。砂粒を含み粗い黃白色の胎土に黃灰色の釉がかかる。9は瀬戸天目茶碗で体部下部から口縁部に掛けて緩やかな丸みをもち、釉色は黒茶色で薄くかかる。10～27・29・30は近世あるいは近代の染付である。産地不明のごく新しいものもあり、不勉強を恥じるばかりでご容赦願いたい。10～13・16・17は肥前窯の碗である。10は小振りで、体部は内弯ぎみに立ち上がり、外面には葉状のコンニャク印判を2箇所に押す。11は内外面に菊散らし文が描かれている。12は外面に草花文を描き、器肉は全体に薄く、豈付はシャープに尖がる。13も外面に草花文を描き、器肉は全体的に厚く、いわゆる「くらわんか茶碗」と呼ばれる代表的な雑器である。16も外面に草花文を描き、見込は釉を輪状に搔き取る。口縁部はやや強いナデのため外反する。見込には略された五弁花を描く。17は波佐見窯と思われ、豈付に砂が付着する。外面にはよろけ櫻文が描かれている。高台はやや外開きである。14は湯呑茶碗である。全体に器肉が薄く、体部下部から口縁に斜め直線的に伸びる。高台も直線的に垂直に下に伸びる。外面には「峯」の字が認められ、金剛峯寺の注文品と考えられるセットの1つであろう。15は皿である。吳須の発色は薄い青色を呈する。18は広東碗である。外面には線で飛鳥文を描き、体部は直線的に斜め外方に伸び、口縁端部は尖がる。19は口縁の内弯する皿である。内外面には密に唐草文が描かれ、その内に数匹の蝶が配されている。吳須の発色は濃青色である。20・21は仏飯器である。20の胎土は灰濁色を呈し、脚部は生焼けである。21は内外面に草花文を描き、吳須の発色は薄水色である。胎土は白色を呈する。22は碗である。体部は緩やかに外方に開き、高台は「ハ」の字に大きく開く。吳須は濃青色に発色し、文様は不明である。外底には「有78」と印版されている。有田ブランドであろう。23・24・26は輪花皿である。23の外面には濃でつぶした唐草文が巡っている。内面には草花文が側面全面に描かれる。胎土は白肌色を呈し、焼き継ぎを行なっている。豈付の露胎部はシャープに尖がる。24は口縁内弯ぎみで、高台は蛇ノ目凹形高

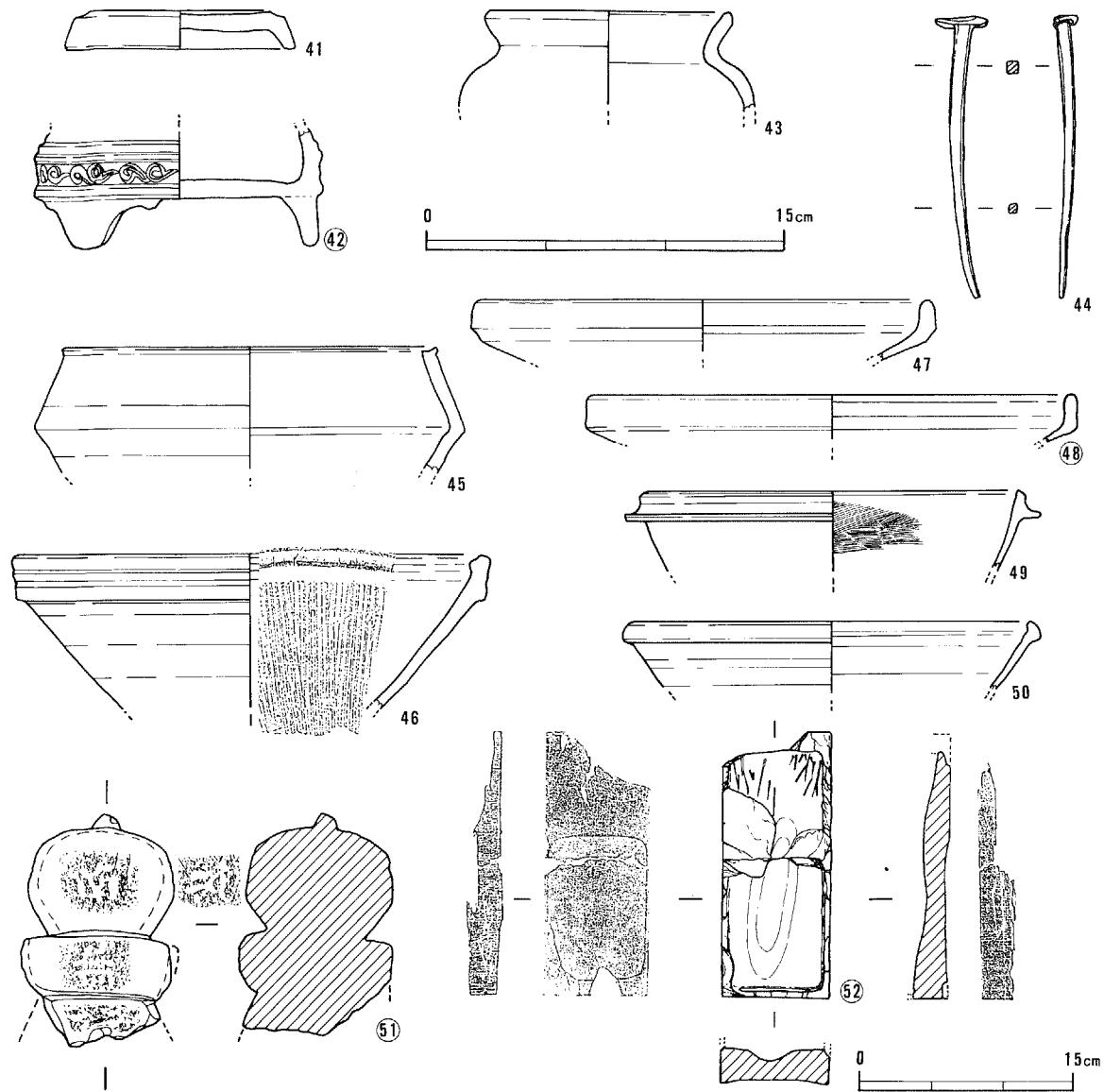
台である。外面にはタコ唐草が巡る。見込部と内面体部の堺として、二重圈線が巡る。26も外面に唐草文が巡り、24と同様のタイプのものである。体部内面と見込に素書の文様を描く。高台は外側に垂直に付されている。25は八角皿である。内外面には草花文が描かれ、呉須の発色は濃青色である。胎土は灰白色を呈する。内面見込から体部の立上りは直線的である。27は四足香炉である。外面頸部には雷文が巡り、体部には樹下で遊ぶ唐子が描かれている。呉須の発色は藍色を呈し、足の畳付の釉は拭き取られている。29は伊万里の輪花鉢である。外面は細筆により等分に画され、その内に花紋を描く。内面も同様に細筆で画され、草花文と菱文が描かれる。体部は緩やかに外方に立上る。焼き継ぎが施される。30は取手付水差しの口縁部であろうか。外面には草花文、内面端部には菱文が巡る。28・31は肥前系の青磁である。28は香炉で、草緑色の釉がかかる。底部畠付は高台であるが、その周囲には用を足さない4足が付されている。内面の施釉は口縁やや下までかかる。31は青磁碗である。緑濁色の釉がかかる。体部は下方から斜め上方にやや内弯しながら立ち上がる。32は肥前系灰釉碗である。内外面薄飴色の釉がかかる。33～37は信楽系灰釉灯明皿である。33は水挽の段が顯著で、釉色は薄灰色で、底部糸切である。34の体部は緩やかに外方に伸びる。釉は透明度の高い白灰色である。35は内面に反りの付くもので、青味がかった灰色の釉が口縁から体部下半にかかる。36は見込に胎土目が認められる。口縁部はやや内弯する。37は高台の付くもので、体部下部から外底を露胎にする。38は柿釉の皿である。39・40は褐釉である。39は湯呑茶碗で体部外面に雷文と人物を型押している。40は碗である。底部は不明である。半透明の褐色の釉が見込から口縁部外面までかかる。41は焼塩壺の蓋である。塩壺の蓋はここ高野山や根来寺でも若干ではあるが出土例がある。しかし、身の出土は皆無と言っても過言ではない。43は産地不明の褐釉の壺である。44は角釘で頭は長方形を呈する。42は瓦質の火舎である。体部下半に雲文を巡らす。三足は丁寧に貼り付けられている。45は備前焼の火消壺である。体部中程で「く」の字に屈曲するもので、口縁端部は受け口状を呈する。46は堀摺鉢である。口縁端部やや下から粗い摺目が施される。47・48は焙烙である。47の体部は垂直に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられる。48も同様で47より大振りで浅めの様相を呈する。49は土師質羽釜である。口縁部から鍔にかけてナデによる凹線状の段ができ、内面は1単位2.5cmの櫛目で調整されている。胎土には若干の砂粒がみられる。焼成は硬質である。50は東播系の捏鉢で、口縁部の拡張は明瞭でなく、玉縁状に肥厚させている。51は緑泥片岩の五輪塔である。地輪、水輪、火輪の殆どが欠損する。片面には「南無………」、反面の空輪には虚空を意味する梵字が刻まれている。緑泥片岩の石塔は、高野山あるいは伊都郡では割合にみられるが、根来寺坊院跡においては稀で殆どは砂岩ある。52は泥岩製の硯である。陸部は使用頻度が著しく、中央が楕円形に凹む。この硯の全面には刃先のようなもので願文が刻まれる。これらの殆どは刻みが浅く判読困難である。判読可能なものには「真隨坊求之」、「高野山」、「大坂」などがある。



第5図 近世整地土出土遺物実測図1



第6図 近世整地土出土遺物実測図2



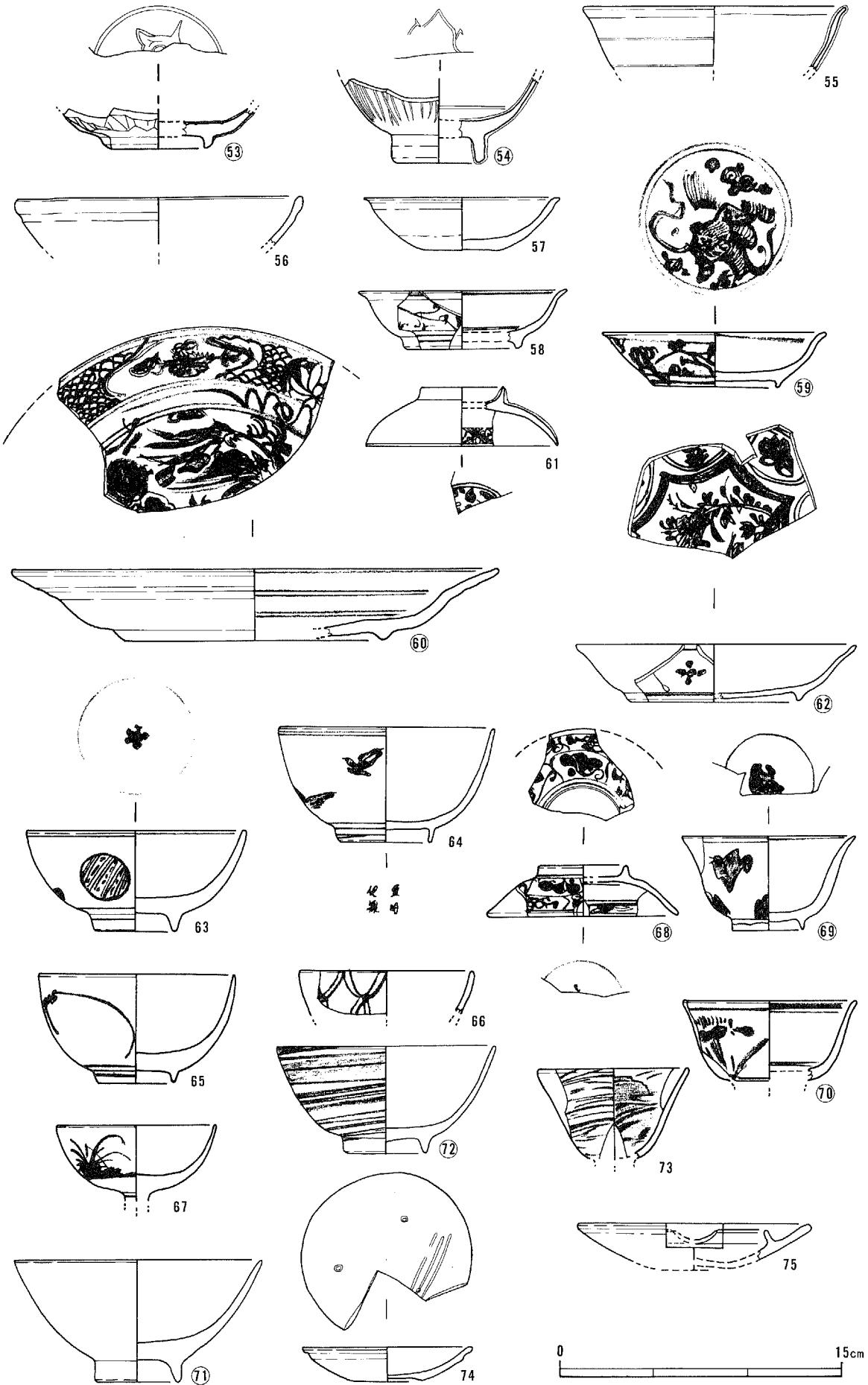
第7図 近世整地土出土遺物実測図3

第1層出土の遺物 (53~99) (第8・9図)

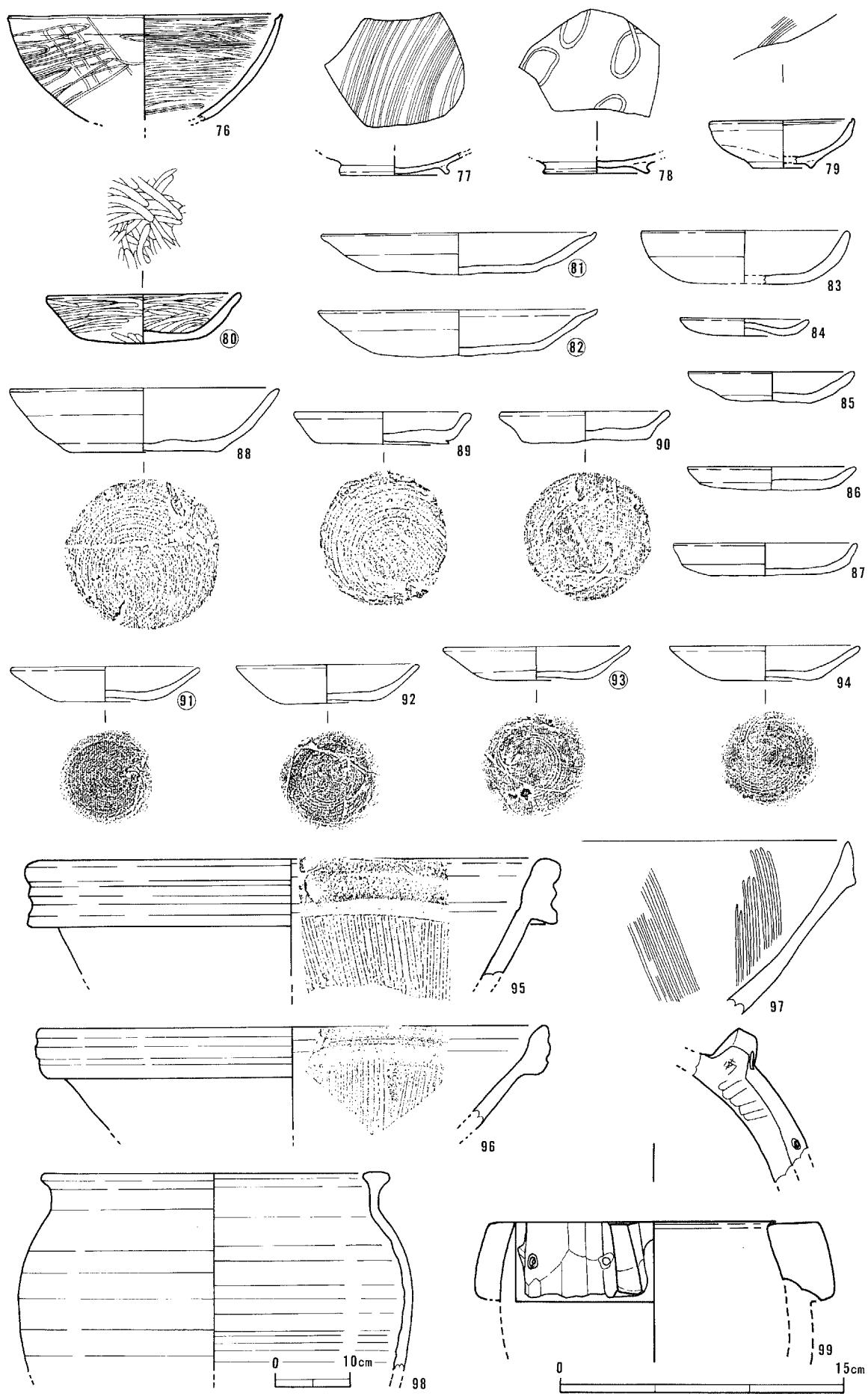
53~55は青磁である。53は龍泉窯系の印花文碗である。薄緑色の釉がかかり、外底から畳付を露胎とする。54は蓮弁文碗である。胎土は黄白色を呈しサクい。黄緑色の釉がかかり、外底は無釉である。55は口縁外反する碗である。胎土は灰色を呈し、緑青の釉が薄く均一にかかる。56・57は白磁である。56は口縁玉縁を呈する碗で、灰白色の胎土に黄白色の釉が薄くかかり、細かい貫入が器面全体にはいる。57は皿である。胎土は白色である。体部中程から底部は無釉である。58・
59は染付の端反皿である。59の見込には玉取獅子文を描く。60は漳州窯系五彩盤である。灰白色の胎土に乳白色の厚い釉が、器面全面にかかる。畳付には多量の砂が付着する。接合用の黒漆が断面に認められる。61は景德鎮窯系の青磁染付碗の蓋である。62も景德鎮窯系名山手の染付皿である。外底から高台内面にはカンナ痕が認められる。畳付には少量の砂が付着する。63~67は肥

(註5)

前系の染付である。63・65・66はくらわんか茶碗である。64は染付茶碗で、外面は薄く濃で絵付される。67は仏飯器である。外面に草花文を配し、五等分の絵付けが施されるものと思われる。68～70は瀬戸の染付である。いずれも小さな気泡が入る。68は碗の蓋で、69・70は碗である。同タイプのものと思われ、双方ともに口縁部がやや端反る。69の高台付け根の削りは鋭く釉が厚くかかる。外面には飛鳥文を描く。70は大胆な花文を濃でつぶす。71・72は肥前系の碗である。71は灰釉で内外全面に細かい貫入がはいる。畳付の釉は拭き取っている。72は刷毛目唐津である。畠付の釉を拭き取り、見込は搔き取られ蛇の目状になる。胎土は薄茶色を呈する。73の産地は不明である。灰色の胎土に白濁の釉が薄くかかる。器面全体に微細な貫入がはいる。74・75は伊賀・信楽系の灯明皿である。74は内面から外面口縁端部まで施釉され、見込には3本の細い搔き目が施され、重ね焼の跡も認められる。75も内面から口縁端部にかけて施釉され、返りをもつ。釉色は鼠色を呈し、細かい貫入がはいる。76～80は瓦器である。76～78は椀で、76は外面を分割にミカ正在进行。破片の為分割の単位は不明である。内面のミガキは密で銀黒色を呈する。口縁端部やや下に1条の沈線を巡らす。見込にはジグザグのミガキを施す。77の暗文は連結の楕円で、高台は低く「ハ」の字に開く。78はジグザグの暗文を施し、高台は「ハ」の字状に低く、底部外面の中央に箕の子状の圧痕が付く。79は小椀である。胎土は灰白色で軟質である。口縁端部内面よりやや下に籠状工具による幅1mm程度の沈線が巡り、体部外面中央に重ね焼の痕跡を残す。また、外面中位やや上に粘土紐巻き上げ痕が認められる。80は皿で、全体的に器肉が厚い。外面口縁下は強いナデにより凹線ぎみである。内外面に2～3mm幅のミガキが大胆に施され、暗文はミミズ状を呈する。81～94は土師器皿である。81・82の見込は横方向のナデ、内外面の体部は回転ナデが施される。内面のナデは最後に見込から口縁端部にかけて抜かれている。外面底部は不定方向のナデにより調整されている。83は底部から内弯ぎみに立ち上がり、器肉が厚い。胎土には微量のクサリ礫を含む。84の胎土は良く水簸されている。外面底部をヘソ皿ぎみに凹ます。内面体部に籠状工具による擦痕が遺る。85の体部と底部はきついナデにより区別する。86の体部は底部から斜めに直線的に伸び、色調は白肌色を呈する。87の体部も直線的に斜めに立ち上がり、口縁端部はやや肥厚する。色調は濃肌色を呈する。88～94は底部回転糸切り調整の土師器皿である。88はきつい横ナデのため凹凸が著しい。胎土には1mm内外の砂粒を含む。88・90は同タイプで、器肉が厚い。89の底部は切離しが雑である。91～94は柿釉の皿である。釉はいずれも内面から外面口縁端部やや下までかかる。色調は91・92は飴色、93・94は柿色を呈する。95は堺摺鉢である。色調は赤茶色を呈する。96・97は備前焼摺鉢である。96は近世のものである。97は中世で、楕円は1単位9本である。98は近世の丹波焼甕である。焦茶色の釉が全体に薄くかかる。99は石鍋である。おそらく四方に断面長方形の把手が付くと思われる。把手のきわに1孔を穿ち、頭部には「南」と細く浅く刻まれている。宗教上の儀式あるいは作法に使用されたものであろうか。



第8図 第1層出土遺物実測図1



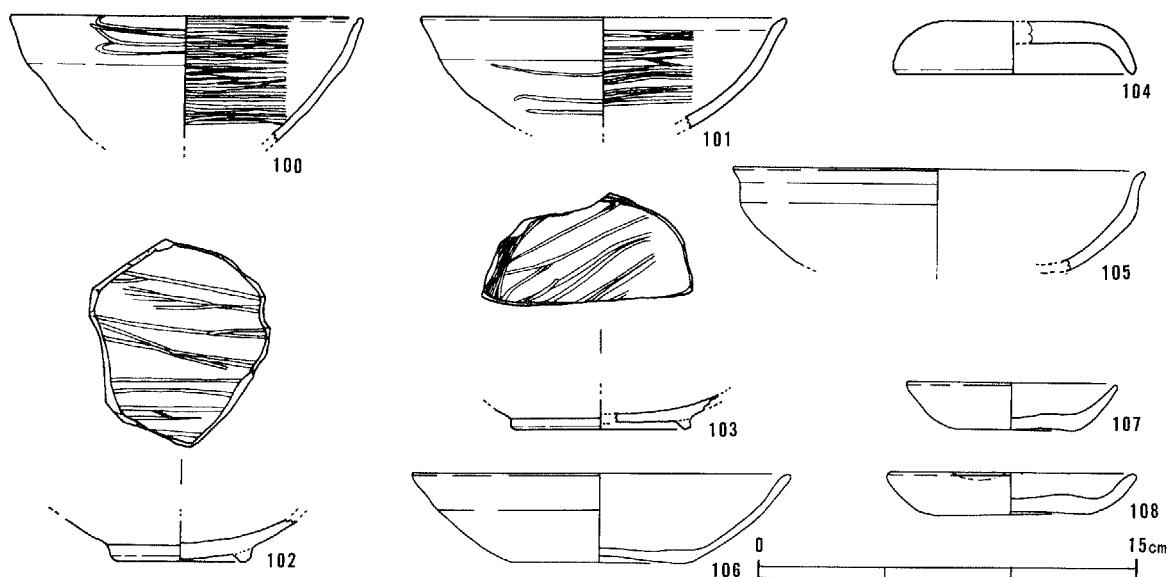
第9図 第1層出土遺物実測図2

第2層出土の遺物 (100~108) (第10図)

100~103は瓦器椀である。内面口縁部やや下に幅1mm未満の浅い沈線が巡る。内面のミガキは割合密にミガかれ、外面は指押さえで盛り上がった部分のみを簡素にミガいている。101の口縁はやや外反ぎみで、端部は丸くおさめられている。ミガキは内面が密で、外面は幅1mm程度の簡素なものである。102・103は底部破片で、双方とも摩耗している。102の高台は低く、畳付は丸くおさめられる。見込の暗文は雑でおそらくジグザグ状を呈する。103の高台も低く、やや「ハ」の字状に開く。暗文は102と同様ジグザグである。104~108は土師器皿である。104は器壁が厚く、口縁端部を尖がりぎみにする。焼塩壺の蓋とも考えられる。105は口縁部のきついナデにより端部は受け口状になる。胎土は良く水簸される。106~108は糸切である。いずれも器面の摩耗が著しい。106・107の胎土は非常に良く水簸される。108の口縁部には煤が付着する。

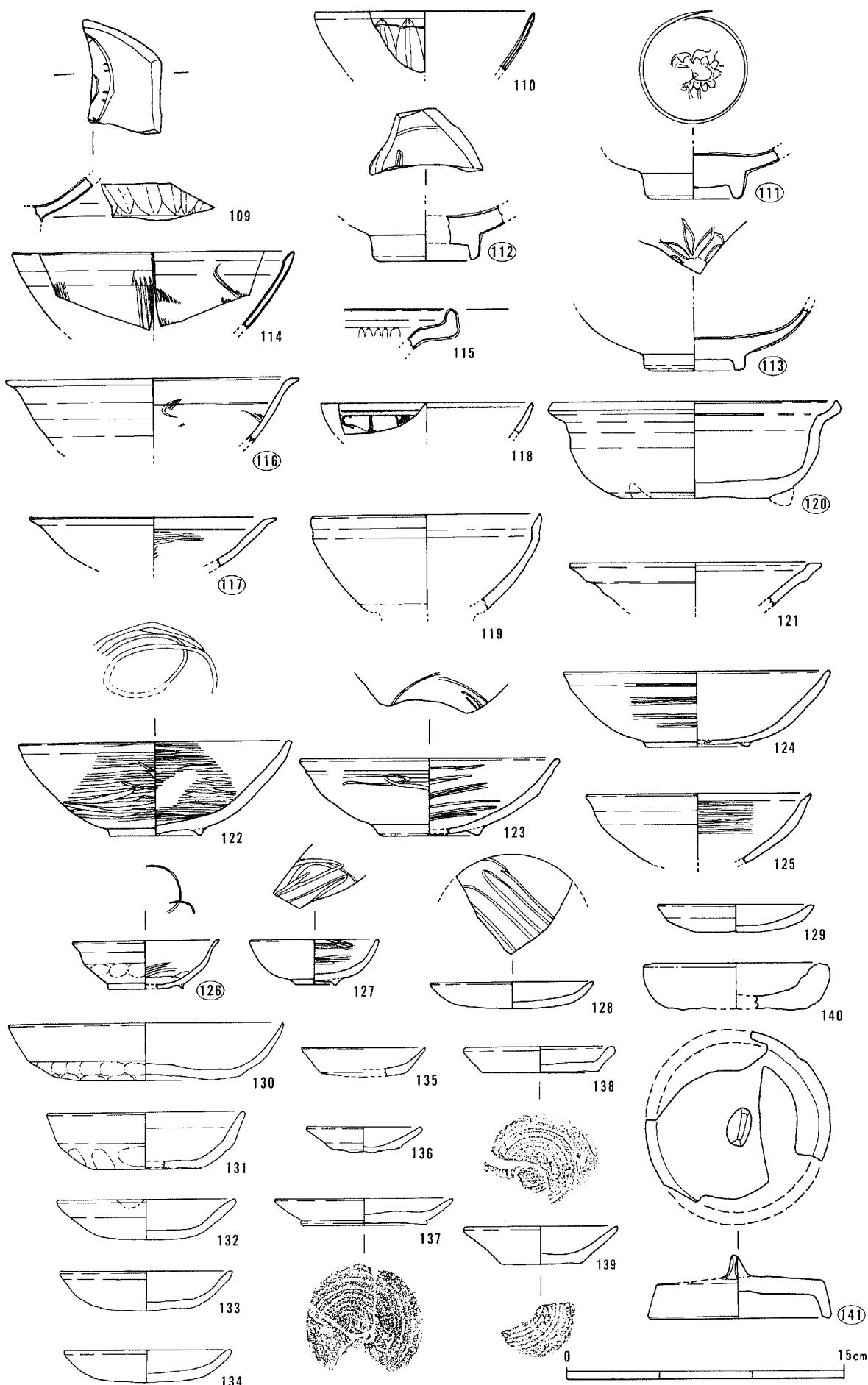
第3層出土の遺物 (109~158) (第11・12図)

109~115は中国製青磁である。109は蓮弁文碗の体部である。丸鑿による幅広の蓮弁を外面体部に巡らす。釉の発色は暗緑色である。110も蓮弁文碗である。器壁はシャープで、口縁端部は尖がる。草緑色の釉がかかる。111は暗緑色の釉がかかる。見込には丸鑿による圈線が1条巡り、その中に花文を印刻する。外底部は釉を輪状に搔き取り、その部分は明茶色に発色する。112は底部の細片で、高台下端は内側に尖がる。外底は露胎にする。113も畳付から外底にかけて露胎としている。見込には草花文を印刻する。胎土は青灰色を呈する。114は同安窯系の碗である。口縁部は尖がりぎみに丸い。釉の発色は暗緑色を呈する。115は盤の細片で草緑色の釉が厚くかかる。116・117は白磁碗である。116の口縁部は受け口状を呈し、端部は尖がる。117は外反し、端部は116と同様である。細片のため図化が困難でもう少し立つと思われる。118は内弯する染付皿である。絵柄は不明である。119は中国製天目茶碗である。茶と黒に斑に発色した釉が外面下部までかかる。内面

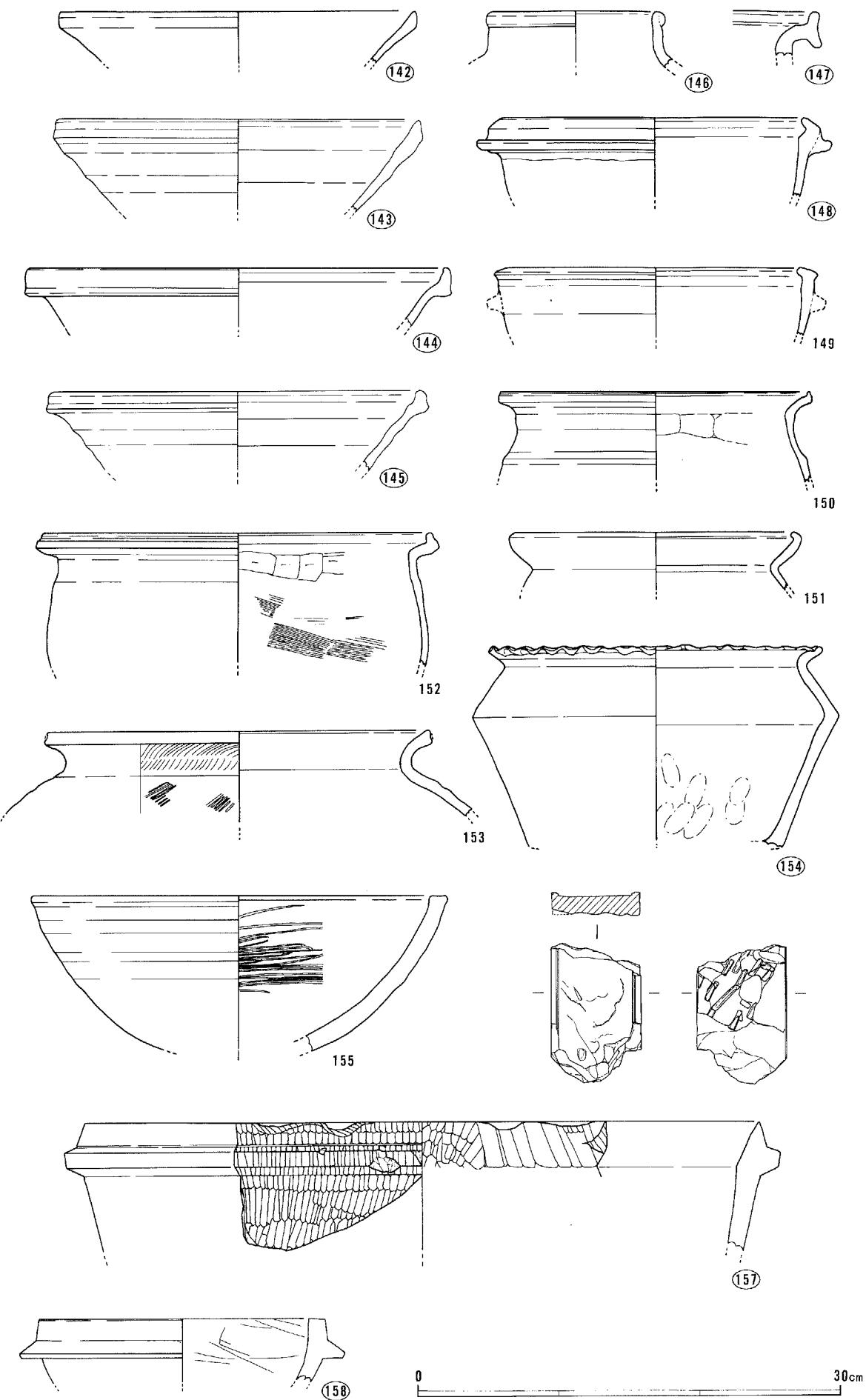


第10図 第2層出土遺物実測図

口縁部直下は強いナデにより凹みが著しく、そのまま斜め上に挽き上げられる胎土は灰色を呈する。120・121は美濃・瀬戸窯の灰釉陶器である。120は折縁深皿である。口縁部は斜め上方に拡張される。釉はツケ掛けで、見込には指頭による釉禿げが認められる。釉の発色は半透明の緑色で、口縁から底部にかけて無釉の箇所がある。なお、底部は糸切りである。121はおろし皿の細片である。胎土は軟質で褐色を呈する。122～129は瓦器である。122～125は椀で、全て口縁周1/4未満の破片である。122のミガキは内外面幅2mm程度で密である。暗文はループ状を呈する。口縁端部は強くミガかれ平坦である。高台は断面三角形の低いものである。123・124の外面は規則性の無い指頭痕で調整され、凸面をミガいて器面を平滑にしている。123の高台は断面三角形を呈し、口縁端部を丸くする。124の高台は低い台形を呈し、口縁端部は尖がりぎみに丸くおさめる。125は摩耗が著しい。胎土は良く水簸されている。126・127は小椀である。126の口縁部直下は強いナデのため外反する。高台断面は三角形を呈する。口縁部の内外面の摩耗が特に著しい。127は内弯する。高台は形骸化し、ミガキは内面は粗く、外面には認められない。128・129は皿である。128は火中し、燻しがとぶ。ジグザグの暗文がわずかに遺る。130～136は底部未調整の土師器皿である。130の外面体部から底にかけては小さい指頭痕が段に巡っている。131の体部中位には粘土紐接合痕が認められる。132・133は同タイプで、体部は斜め上方に直線的に伸び、底部には丁寧なナデが施される。134は明茶色を呈し、微砂粒を多く含む。135・136は外面底部に箕子の痕がつく。137・138は底部糸切りの皿である。139は山茶碗の小皿である。胎土に0.5～1mm大の還元粒子が少量はいる。140はとりでである。高熱のため内面に小さい孔が無数にあく。141は瓦質の蓋である。上面はツマミを付す前に範状工具で削り平滑にしている。内面は不定方向のナデを施す。経筒の蓋であろうか。142～145は東播系の捏鉢である。いずれも片口の部分は欠損する。142は口縁直下に重ね焼痕が遺る。143は横ナデがきつく器面の凹凸が著しい。144は口縁端部の拡張が顕著である。145は144よりやや口縁端部の拡張が進んでいない段階である。146は備前焼の壺である。口縁部は玉縁状を呈し、頸部にはゴマ状の灰がかかる。147は常滑焼の甕である。断面は「N」字状を呈し、口縁部縁帯に暗緑色の灰がかかる。148～150は土師質羽釜である。148の内面口縁直下はきついナデのため「く」の字状を呈し、鍔は受け口状に短い。149は明茶色を呈し、微砂粒を多量に含む。150の頸部は「く」の字状を呈し、鍔は形骸化する。151・152は土師質の鍋である。151は内外面の磨滅が著しい。152は口縁部から頸部にかけて「S」字状を呈し、口縁端部は上方に拡張される。体部内面は範削り後刷毛で調整される。153は瓦質の甕である。口縁下から胴部にかけてタタキが施される。摩滅が著しい。154は瓦質の花盆である。口縁部を波状にする。内面頸部から外面をミガく。155は瓦質の鉢である。口縁端部を平坦に造る。156は粘板岩製の硯である。157・158は石鍋である。157は大型で口縁端部は尖がり、内面に雑な鑿痕が認められる。158の鍔は断面正台形を呈する。



第11図 第3層出土遺物実測図1



第12図 第3層出土遺物実測図2

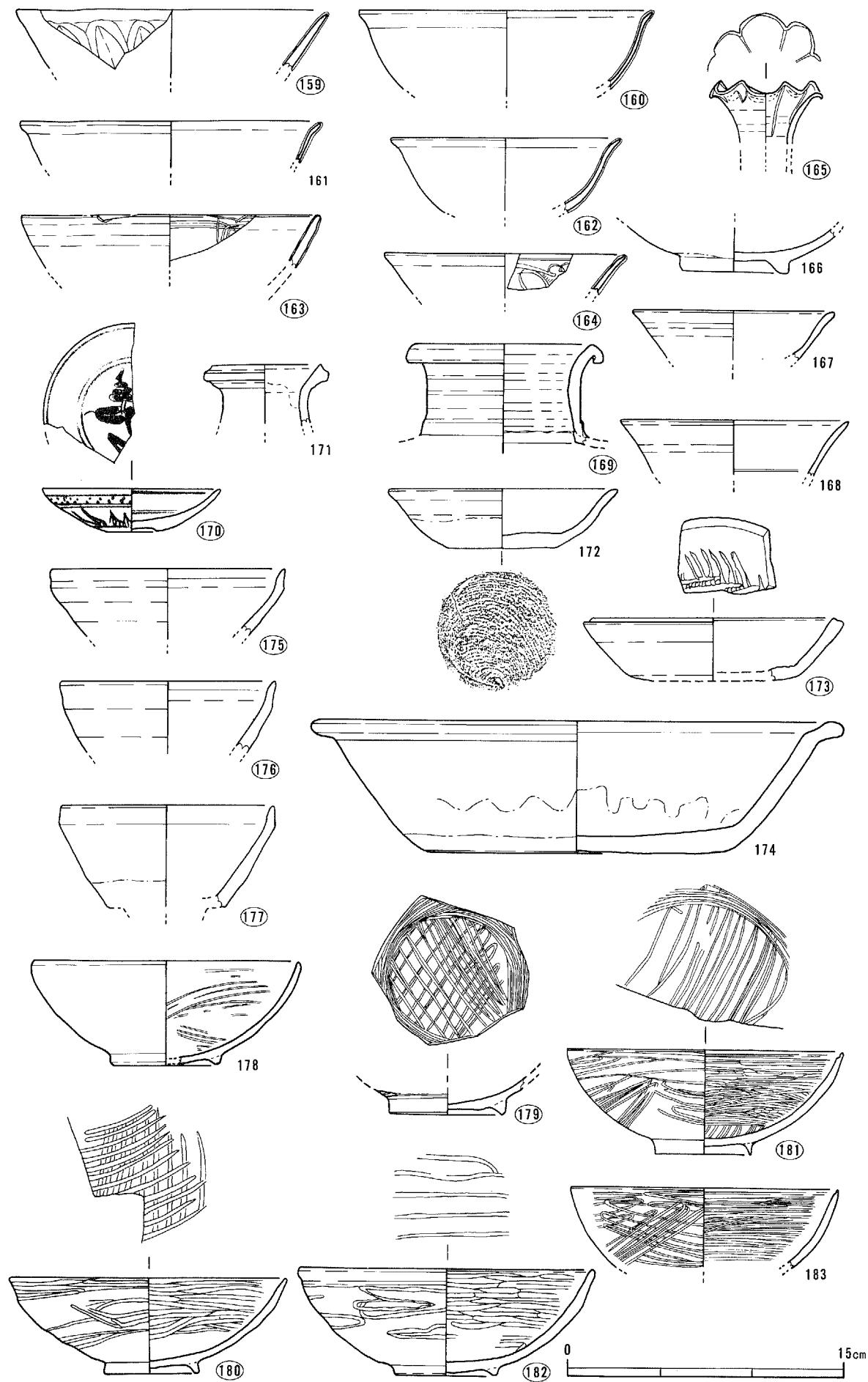
第4層出土の遺物（159～213）（第13・14図）

159～164は中国製青磁である。159は蓮弁文の碗である。体部外面には片切彫の鎬蓮弁を施す。胎土は精良で灰白色を呈し、草緑色の釉がかかる。160の口縁部は外反する。草緑色の半透明の釉が薄くかかり、鎬削りが透けてみえる。161も160と同様のものである。口縁部下に3条の浅い沈線が認められる。162も口縁が外反するもので、胎土は灰白色で精良である。淡緑色を呈する半透明の釉が均一にかかる。163は輪花碗である。内面は鎬による劃花文を施す。164の口縁部はやや外反し、内面には鎬と櫛による劃花文が見られる。165は青白磁の百合口の花瓶である。花びらは8枚と思われる。外面口縁部折返しには釉が溜る。166～169は中国製の白磁である。精良な白濁色の胎土をもつ166は、黄白色の釉が体部下半までかかり高台は露胎となる。167・168は口禿げの皿である。167の胎土は白色を呈し、釉は乳白色で内外面に0.5mm程度の釉ののらない箇所が点々と認められる。168の胎土は灰白色を呈し、釉は透明感のある灰色味を帯びる。169は四耳壺である。口縁部は丸く折り曲げられ、端部に釉が厚くかかる。胎土は精良で灰白色を呈する。釉は灰白色に発色する。170は碁笥底の皿である。外面体部に蕉葉文が見られ、脣付の釉は輪状に拭き取られる。171・173・174は美濃・瀬戸窯の灰釉陶器である。171は瓶子の口頸部である。口縁端部から内面にかけて釉が厚くかかる。172は緑釉小皿である。濃緑色の釉が内面から外面体部中程までかかり、特に口縁部内外面に厚くかかる。173はおろし皿で、薄い釉が内面から外面体部中程までかかる。胎土は黄白色で軟質である。174の折縁深皿は口縁部内外面の釉が剥離している。内外体部下部には釉垂れが顕著である。黄緑色の釉がかかり、胎土は173と同様である。175～177は天目茶碗である。全て中国製と考えられる。175は褐色の釉がかかり、胎土は灰白色を呈し非常に堅緻である。口縁は直立し、端で尖がる。176の胎土は灰白色を呈し堅緻ではあるが、175・177程ではない。口縁部内外面は褐色、それ以外は黒色の発色を呈する。177は暗褐色の釉がかかる。175と同様、胎土は灰色味を帶び堅緻である。露胎部は化粧掛けを行う。178～186は瓦器碗である。178は摩耗が著しい。体部は内弯ぎみに立ち上がる。胎土は黄白色を呈する。179は縦と横方向にジグザグの暗文を施し、斜格子状にしている。内面には幅1mm程度の密なミガキを施す。180の暗文も179と同様で、外面には重ね焼の変色が認められる。181の口縁端部には1条の細い沈線が巡り、内面のミガキは非常に密で銀黒色である。外面のミガキは簡素であるが一応4分割にしている。182の外面口縁部にナデによる疑凹線が2条認められ、高台は断面台形を呈する。暗文は荒い平行線状のものを施す。185の内面は幅0.5mmの細いミガキが施され、口縁端部にはシャープな沈線が巡る。暗文は連結輪状で、断面台形の高台は「ハ」の字を開く。185の胎土は灰白色を呈し、良く水簸されている。口縁短部内面に沈線が巡る。186の外面口縁部の凸部分には鎬状工具による擦痕が見られる。暗文はジグザグである。187・188は瓦器小皿である。187の口縁端部は外反する。188の底部は指押えにより調整している。189～203は土師器皿である。189・190は底部をヘソ皿状に凹ま

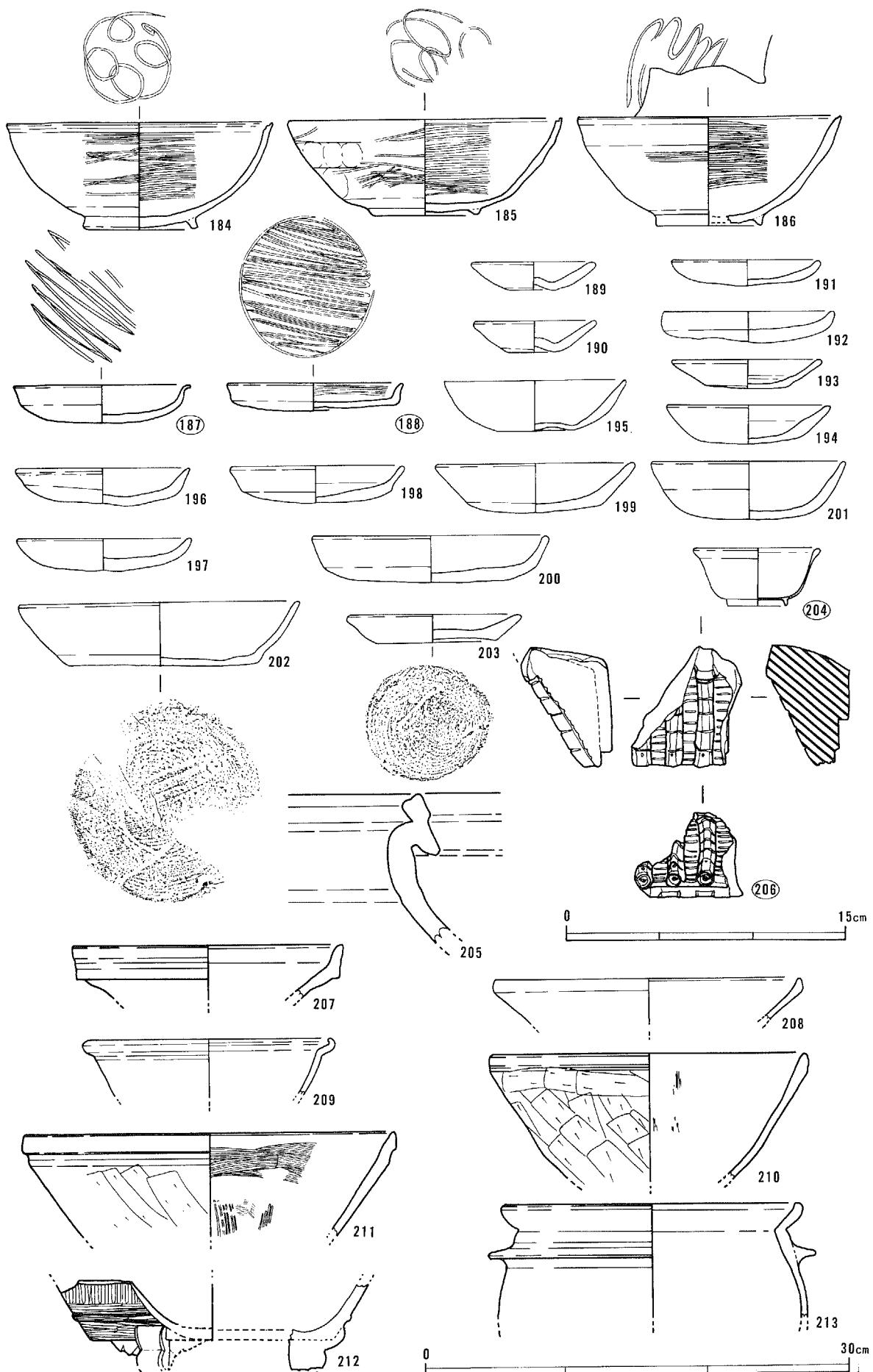
している。191・192は皿にしているが焼塩壺の蓋とも考えられる。193の見込は強いナデにより窪む。194は小振りであるが肉厚である。195は白色系で、底が凹む。196・197は同タイプのもので、特に196は良く水簸される。口縁端部内外面全体に煤が付着する。198の口縁部は強いナデのため端部が肥厚する。199の体部は底部から斜め外方に直線的に伸びる。200の口縁端部は丸くおさめる。201は灰白色を呈し、体部は内弯ぎみに立ち上がる。器面の調整は丁寧なナデによる。202・203は糸切りである。202の底には箕子痕が遺る。204は銅製の六器である。205は常滑焼甕の口縁部である。206は須恵質の建造物置物の屋根部分である。塔の一部であろうか。207は備前焼口縁部である。208は東播系捏鉢、209は土師質鍋である。黄肌色を呈し砂粒を多く含む。210・211は瓦質摺鉢である。210の外面は幅広の削りが施され、内面は摩耗が著しい。211の外面にも幅広の削りが施され、口縁直下にきついナデが巡る。内面は横方向にナデられ、その後で櫛目を施す。212の火鉢は獸足を三足付す。体部と底部を界する凸帯が1条巡る。213は土師質羽釜である。頸部は「く」の字状を呈し、鍔下から体部に煤が付着する。

第5層出土の遺物（214～235）（第15図）

214～218は白磁である。この内214～216は玉縁状口縁の碗である。214の釉は緑味を帶びた半透明の白色を呈し、胎土は灰白色を呈する。215の釉は白黄色を呈する。216の高台にはカンナ痕が明瞭に認められる。217は口縁部の外反する碗である。釉色は青味を帶びた白色を呈する。胎土は白色で堅緻である。218は皿である。釉色は青味を帶びる。見込の釉は輪状に搔き取られ、体部下半を露胎とする。219は梅瓶の底部である。220～225は瓦器である。220～222は椀である。220の内面は密にミガキ、暗文はジグザグである。外面は口縁端部から体部中位にかけて、分割にミガキかれている。また、外面には粘土紐接合痕が認められる。221は連結輪状暗文を施す。高台は断面三角形の安定感のあるものを付す。223・224は皿で、223の内面には3～4mmの幅広のミガキが施され、外面口縁直下に凹線状のきついナデが巡る。224も幅広のミガキを内外面に施す。色調は銀黒色で、胎土は堅緻である。小椀225は器壁が厚く、断面三角形の高台は「ハ」の字状を呈する。灰白色的胎土は良く水簸されている。口縁端部内面と畳付は摩耗する。226～231は土師器皿である。226～228は未調整、229～231は糸切り調整を施す。231の底には箕子痕が付く。色調は濃肌色を呈する。228・229は同タイプで、底部は雑なナデで調整し、体部外面をきつくナデすることにより底部と画している。色調は黄肌色を呈しする。229の口縁部1／5に煤が付着している。230の口縁部にも5ヵ所の煤付着部が認められ、クサリ礫を多量に含む。231は灰肌色を呈し、胎土は良く水簸されている。232は瓦質の甕である。器面は殆ど摩滅している。胎土は白濁色を呈し、軟質である。233は瓦質火鉢で、火中している。234・235は土師質羽釜である。双方ともに胎土には砂粒を多量に含む。234の口縁端部は内折する。235は明茶色を呈する。



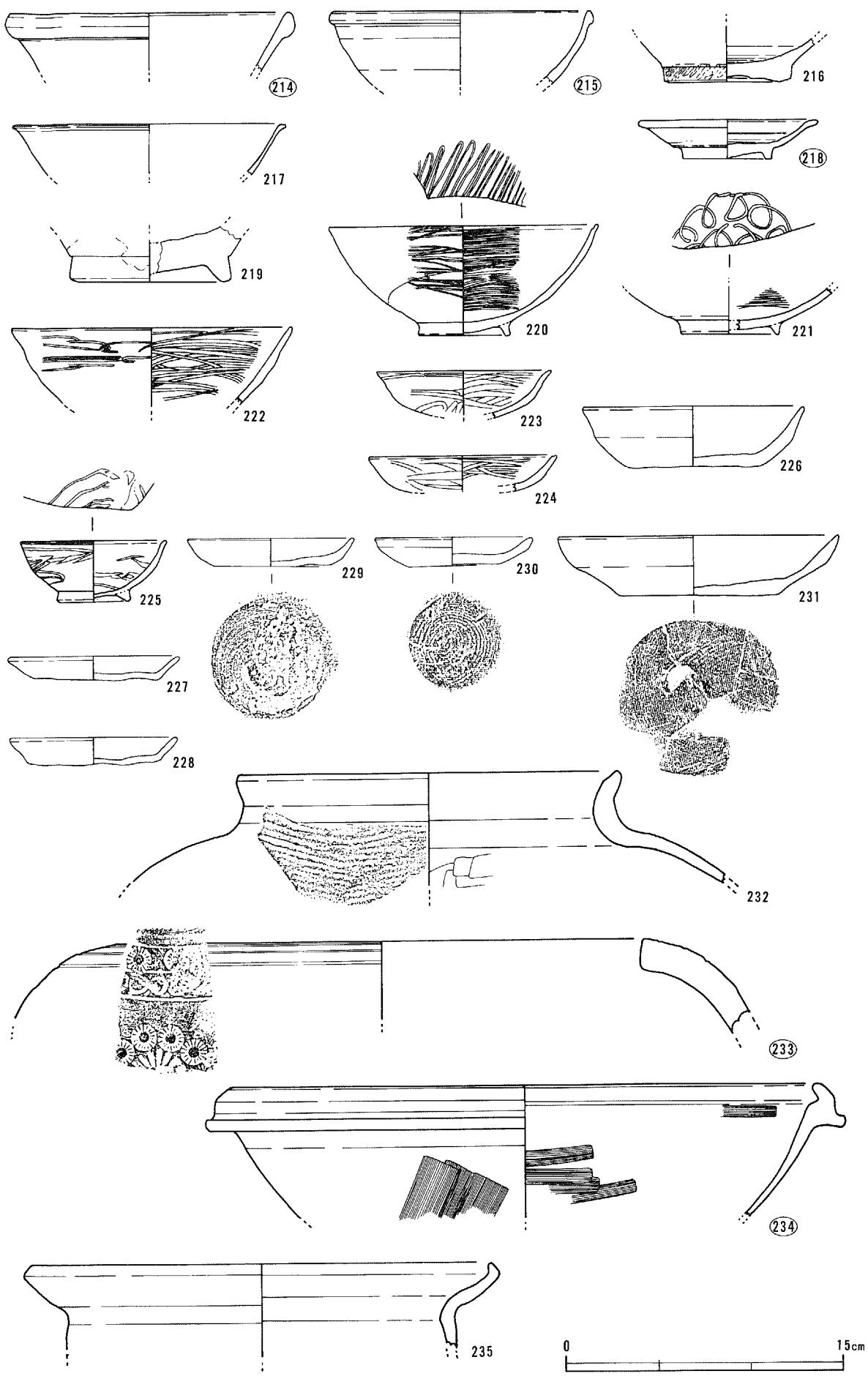
第13図 第4層出土遺物実測図1



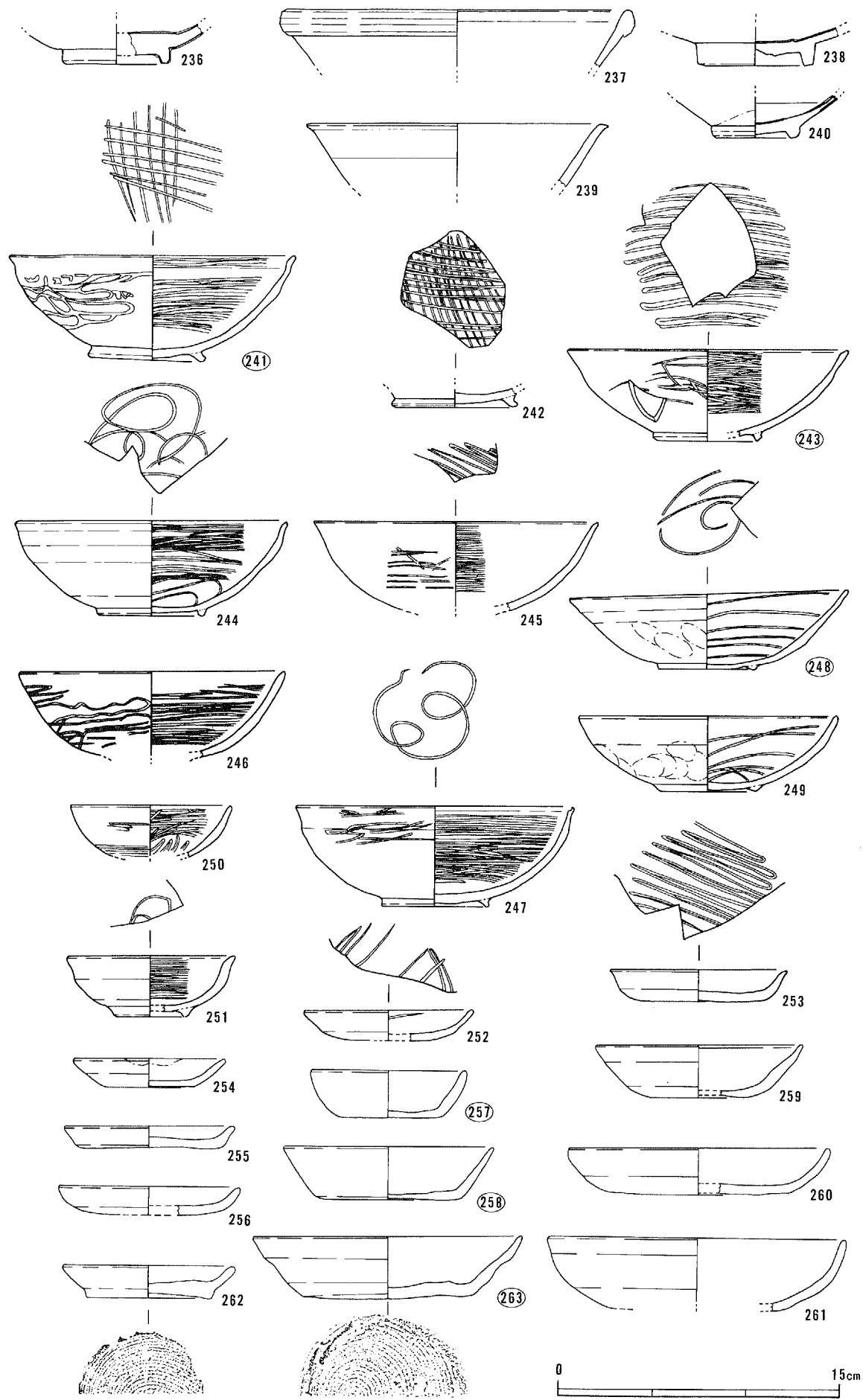
第14図 第4層出土遺物実測図2

第6層出土の遺物（236～276）（第16・17図）

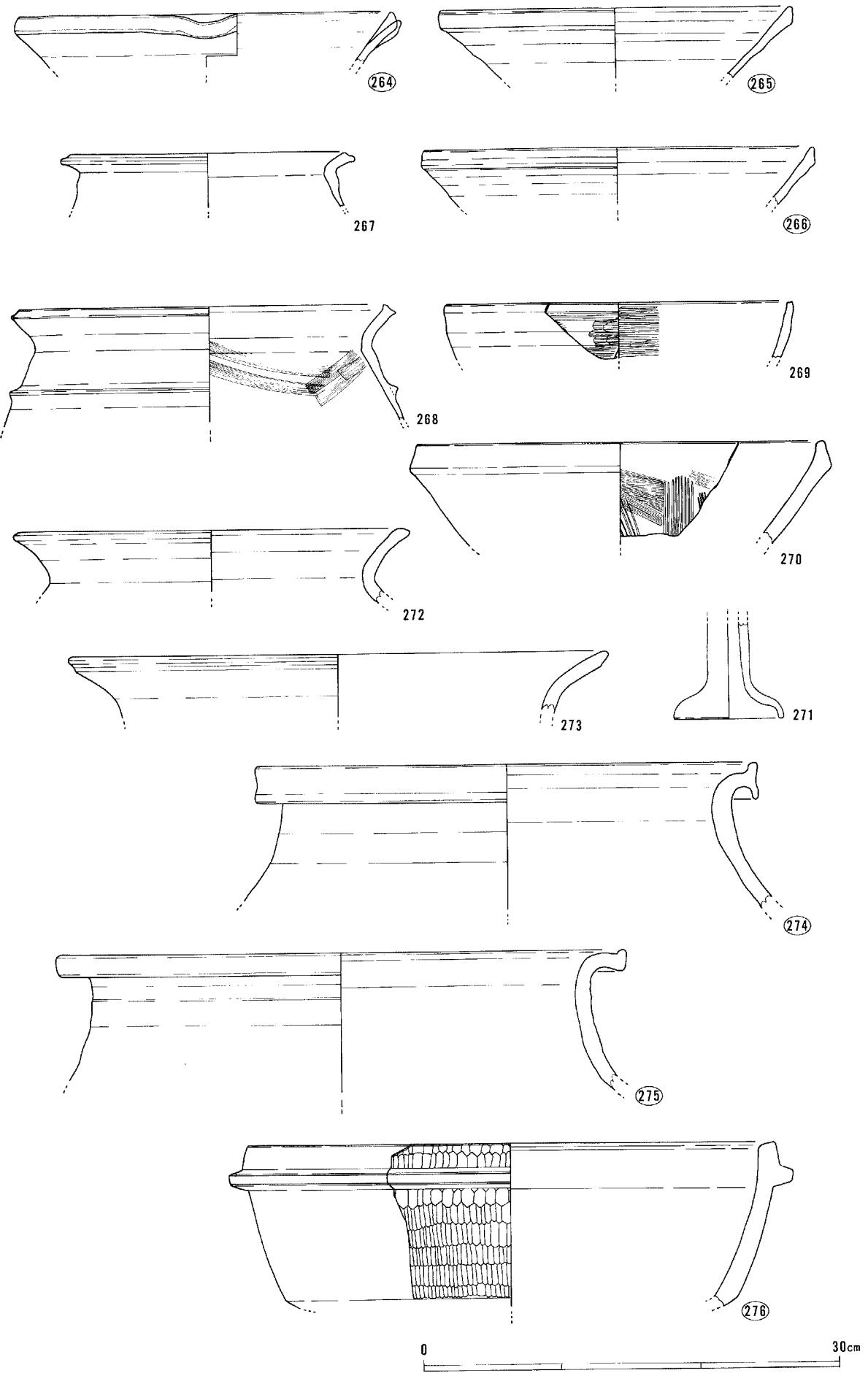
236は青磁碗である。外底を露胎にする。237～240は白磁碗である。237の口縁は玉縁状を呈する。238の胎土は黄白色で、焼成は軟質である。240は見込の釉を輪状に搔き取る。釉色は緑味を帯びる。239は217と同タイプで、青味を帯びた半透明の釉がかかる。241～249は椀で、241の内面は密にミガかれ、口縁部直下はミガいた後、凹線状の窪みを1条巡らす。外面は凸部を潰すようにミガキ、高台は「ハ」の字状に開く。242の暗文は細かい斜格子である。胎土は白色で良く水簸され、焼成は軟質である。243は口縁端部に沈線を有する。内面は口縁端部から体部下半にかけて、幅1mm未満のミガキを丁寧に施す。暗文はジグザグである。244の胎土は白色で、内外面摩耗が著しい。連結輪状暗文を施す。245も口縁端部に細い沈線を巡らす。内面のミガキは密でジグザグの暗文を施す。246の胎土は灰白色で、焼成は軟である。図には著わされていないが口縁端部に浅い沈線が巡る。247は銀黒色を呈する。シャープな沈線が口縁端部に明瞭に施される。外面口縁部やや下は強くナデられる。暗文は雑な連結輪状である。高台の断面は三角形を呈する。248・249は同様のもので、口縁端部は丸くおさめられる。外面体部は雑な粗い指押さえで調整される。248の外底は形骸化した高台より出張る。249の高台は押し潰したような三角形を呈する。250・251は小椀である。250の器面は黒灰色を呈し、胎土は灰白色である。内面口縁端部は摩耗する。251の口縁部はきついナデのため外反する。高台断面は台形を呈し、畳付は摩耗する。252・253は瓦器小皿である。252は底部から斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くする。見込には間隔の広い平行線の暗文を施す。253の口縁端部はきついナデにより外反する。暗文はジグザグである。254～263は土師器皿である。254は白肌色を呈し、胎土には細かい還元粒子が目立つ。255は強い横ナデで体部と底部を明瞭にする。外底は弱い指押さえとナデで調整されている。256は内弯し、浅い。257・258の色調は白濁色を呈し、双方とも大きさの割に深い。258の底には箕子痕が見られる。259は楕円形で、灰白色を呈し、内面にはミガキが見られる。瓦器が火中したものであろうか。260・261は調整が雑なため器面がテコボコである。262・263は底部糸切りである。262は切離しが厚い。263は明茶色を呈する。形態的には231と同様である。264～266は東播系の捏鉢である。264は口縁部と体部の堺に重ね焼きの痕跡が遺る。265・266は同時期のもので、体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部は上方に拡張する。267・268は土師質羽釜である。267は茶褐色を呈し、胎土に多量の砂粒を含む。268の鍔は形骸化し、内面には丁寧な刷毛目調整が施される。269は瓦質の片口鉢と考えられる。口縁端部を平坦にし、内外面を密にミガく。270は瓦質摺鉢である。外面の摩滅が著しい。271は瓦質の仏器と考えられる。272・273は東海系の須恵質甕である。273の内面には薄い自然釉がかかる。274・275は常滑焼の甕である。274は所謂「N」字状口縁であり、275は受け口状口縁のものである。276は断面台形の鍔を張出す石鍋である。鑿の幅は5～6mm程度で、縦方向に丁寧に彫られる。



第15図 第5層出土遺物実測図



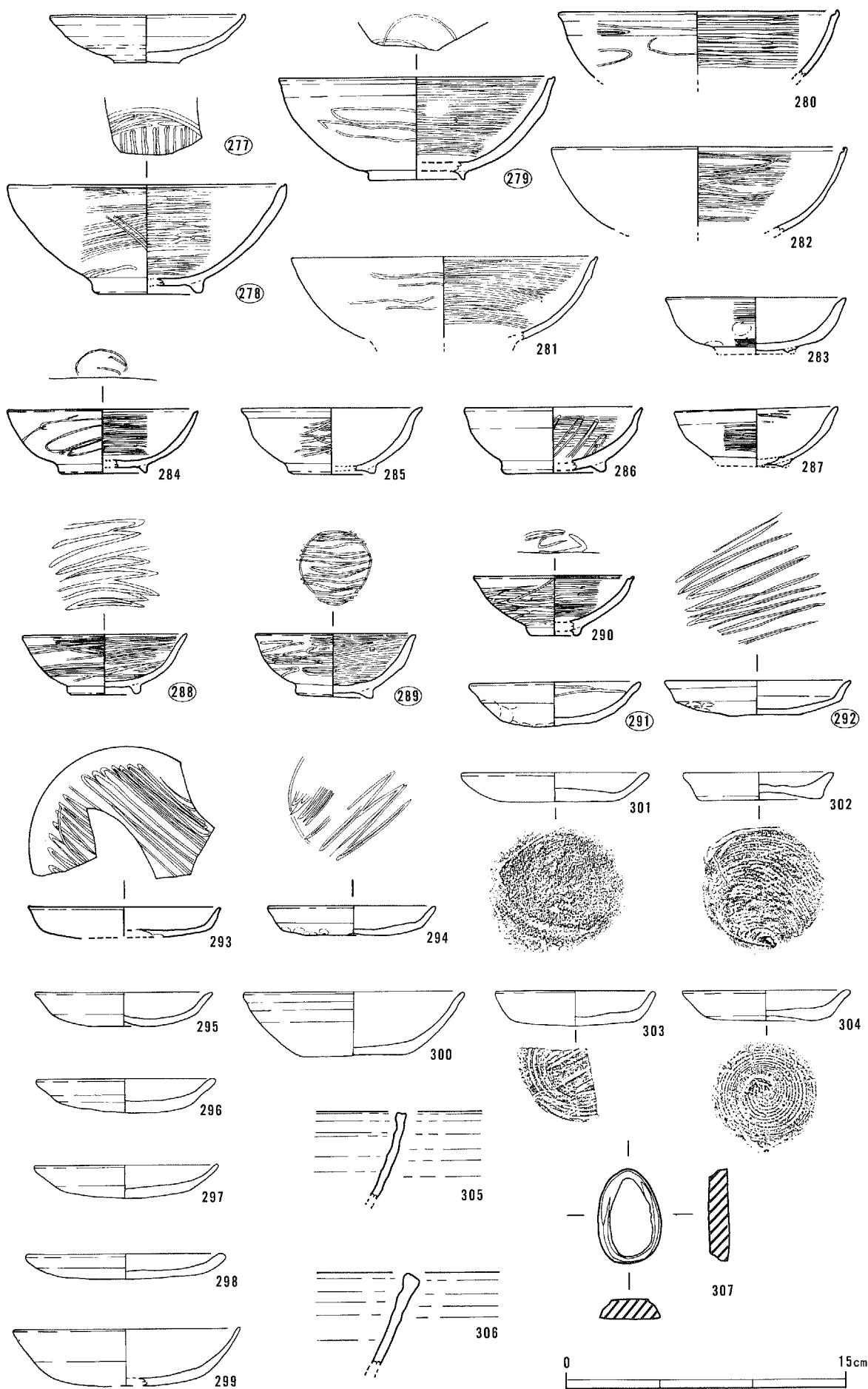
第16図 第6層出土遺物実測図1



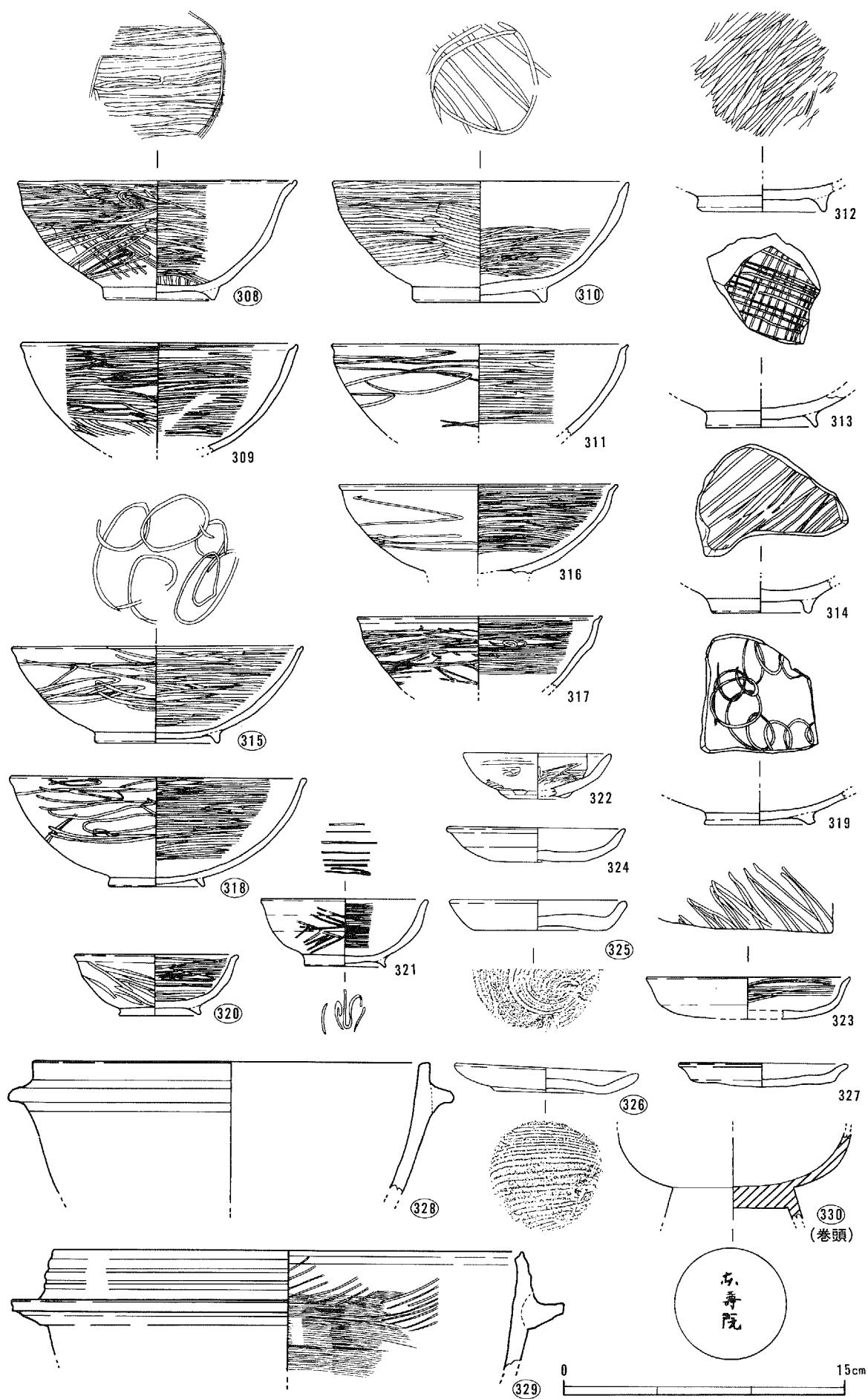
第17図 第6層出土遺物実測図2

第7層出土の遺物 (277~307)(第18図)

277は白磁の皿である。内面から外面体部中程にかけて灰色の釉がかかる。底部は削り出しの高台を有する。278~282は瓦器碗である。これらの瓦器碗すべては口縁端部に沈線が認められる。278は黒灰色の色調を呈し、胎土は灰白色の良く水簸されたものである。破片である為確かにないが、外面は分割にミガかれ、暗文はジグザグである。高台は断面台形の安定したものと付す。279は連結輪状暗文内面を密にミガく。280~282の胎土は白濁色を呈し、279と酷似する。283~290は瓦器小碗である。この層においては瓦器の出土量からみて、小碗の出土量が目だつ傾向を示す。これらの小碗に共通して認められる特徴は、疊付部と口縁内外面が異常に摩耗しているということである。この現象は小碗を実見するかぎり、意図的なものと考えられる。291~294は瓦器小皿である。291はやや橢円形を呈し、口縁部外面はやや強いナデにより外反する。外面中位から下は荒い指押えにより調整される。292~294はいずれもジグザグ状の暗文を施し、291と同様に口縁部外面に強いナデを巡らし外反させる。胎土は良く水簸された灰白色を呈する。外面の調整は鉄分付着のため不明である。295~299底部未調整の土師器皿である。295は内外面薄肌色で、焼成は良である。器形は先述した瓦器皿292~294と酷似する。296・297は同タイプのものである。色調は黄白色で、底部から体部の堺を強いナデで界し、口縁端部を肥厚させ丸くおさめている。双方とも外面底部に粘土紐接合痕が橢円形に遺る。焼成は良好で胎土も良く水簸されている。298は白肌色を呈する。胎土に1~3mm程度の還元粒子を多量に含む。器面全体が指押えとナデにより調整され、調整箇所に規則性が無く、口縁部は凹凸である。なお、口縁端部から底部にかけて粘土紐接合痕が認められる。299は白濁色を呈する。胎土には1~3mm程度の砂粒を少量含む。見込と外底には丁寧なナデが施され、外面体部中程を2段のナデによりやや凹ます。口縁端部をシャープに丸くおさめる。300~304は底部糸切り調整の土師器皿である。300の明茶色を呈する。内外面摩耗が著しい。体部は斜め上方に直線的に挽き上げられている。胎土には微砂粒を多量に含む。301も器面全体が摩耗し、微砂粒を多量に含む。色調は白肌色を呈する。内面は底部と体部の堺を強い横ナデにより凹ます。302の色調は茶色を呈する。胎土は石英の微砂粒とクサリ礫がはいる。体部外面には非常に強い横ナデが施される。口縁部内外面には2箇所の煤付着部が認められる。303の色調は肌色を呈し、胎土は良く水簸され、焼成は良好で堅緻である。内面体部に強い横ナデを施し、体部は内弯ぎみに立ち上がる。底部には粗い糸切り痕と箕子痕を遺す。304の体部は緩やかに斜め上方に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。305・306は東播系の須恵器である。305は碗で、口縁部外面には重ね焼痕が遺り、口縁外面は灰黒色、外面体部と内面は灰白色を呈する。306は片口の捏鉢で、口縁端部の拡張は無く、平坦である。早期のものである。307は滑石製の石製品である。表面は平らに削られ、裏は稚拙な削り出しによる段を施している。何かの合わせ蓋であろうか。



第18図 第7層出土遺物実測図



第19図 第8層出土遺物実測図

第8層出土の遺物（308～327）（第19図）

308～319は瓦器椀である。308の内外面は銀黒色を呈する。体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部でやや外反する。外面のミガキは4分割されている。口縁端部内面には沈線が巡り、体部内面のミガキは密に施される。見込は刷毛状工具で軽く調整された後、平行線暗文を施す。高台は断面三角形を呈し、底部外側に丁寧に貼付られている。309の内外面も丁寧なミガキにより調整され、口縁には浅い沈線を施す。310は破片であるが、外面は4分割のミガキが推定でき、体部2／3を密にミガいている。内面口縁端部から体部中位まで摩滅している。また、沈線も口縁端部やや下に浅く巡り、暗文も簡素な平行線状を呈す。高台は断面台形の肉厚のものを付している。胎土は精良であるがザラついた感がある。311も口縁端部に沈線を巡らし、内面は密にミガく。外面は体部上位を粗くミガく。外面口縁を強くナデやや外反させる。312は火中している。高台は断面台形で「ハ」の字状を呈する。見込を密に短くミガく。313の高台は断面三角形の「ハ」の字状を呈する。見込には格子状の暗文を施す。314も火中し、暗文は平行線状を呈する。高台は断面三角形で直立する。315の体部は内弯ぎみに立ち上がる。口縁端部に明瞭な沈線を施す。内面には幅0.5～1mmの細いミガキが密に施され、見込には不定方向の刷毛状工具痕が遺り、その上から連結輪状暗文を施す。外面のミガキは粗く、分割を意識している。316の胎土は白濁色を呈し、焼成は軟質である。内面のミガキは密である。外面は315同様にミガキは粗いが、分割を意識する。外面口縁部は強いナデによりやや外反し、内面口縁端部やや下に幅2mm程度の浅い沈線を有する。暗文は連結輪状である。317は口縁端部に浅い沈線を有する。内面のミガキは細く密に施され外面体部上位で強い指押えにより屈曲する。口縁はやや外反する。318の色調は黒灰色を呈する。内面は口縁端部から体部下端まで細く密にミガかれている。外面は簡素なジグザグ状のミガキを分割してミガっている。口縁端部は丸みを帯び、高台は口径に比べて小さいものを付している。319の胎土は灰白色を呈し、精良である。見込は刷毛状工具調整の後、連結輪状の暗文を施す。高台は断面三角形の肉厚のものを直立に付す。320～322は瓦器小椀である。320の体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁でやや外反する。内面体部のミガキは乱雑であるが、密にミガかれる。見込は不定方向に凹凸を押し潰すようにミガく。外面は指押えにより、体部中位にできた凸部を磨いて調整している。321の見込は一定方向の刷毛調整をした後、ジグザグ状暗文を施している。胎土は灰白色を呈し、良く水簸される。322は体部中程で若干屈曲する。口縁内面と豊付は摩耗する。323は瓦器皿である。体部内面は密にミガかれる。ジグザグ状の暗文を施す。324・327は底部未調整の土師器皿である。見込と体部の堺は明瞭でない。口縁端部は外反する。325は回転糸切りの土師器皿、326は静止糸切りであろうか。328・329は瓦質羽釜である。328は短い鍔を口縁直下に付す。329は口縁端に沈線状の凹みを有する。内面は粗い刷毛と細かい刷毛で調整する。330は漆塗り椀である。底部外面には「東寿院」と漆で書かれる。

第3節 検出遺構と出土遺物

上面の検出遺構（第24図）

この面は時期的に中世（室町時代前期）～近代までの遺構が確認された。ここで検出した遺構の時期幅がかなり大きいのは、近代になって大掛かりな削平を受けており、大規模な整地作業が行なわれているためである。また、高野山（金剛峯寺遺跡）は記録によると11度の火災に遭遇しているらしく、この地での調査における基準ともなる焼土及び焼面を検出し得るのが普通であるが、本調査地に限りそれは皆無であった。本来はこの焼面を追って、整地土を除去しながらの調査が望ましいのであるが、結果的には遺構の重複が著しいものとなった。

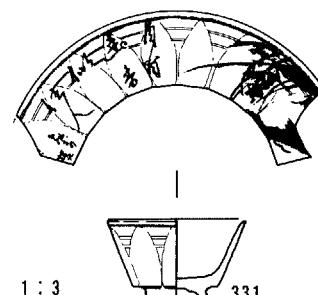
検出遺構には素掘り溝、暗渠排水溝、土坑、柱穴等であり、一子院の建物施設としては纏まりの無いものである。SD-10は下面遺構にいれるべきで、ここでは溝としているが、結果的には下面で検出した、調査区中央を南北に延びる谷状地形の上面の凹みを覆う整地土であると考えられる。

SD-1

調査区東側を南から北に延びる溝である。この施設は直径7～10cmの竹製導水管を埋め込んだもので、約5m毎に角木を繋り抜いたジョイント部材で接合されている。掘形の幅は40cm、深さは約30cmを測る。南端で溝の屈曲箇所を検出し、導水管は検出できなかったが、西に延びていたものと思われる。

SD-1出土の遺物（331）（第20図）

331は染付のごく新しい猪口である。形状は外面側面を蓮弁文状に削り、10角にしている。釉は見込部から体部下端にかけて厚く施されている。呉須の発色は藍色を呈し、草花文を描き、漢詩が書かれている。産地は不明である。



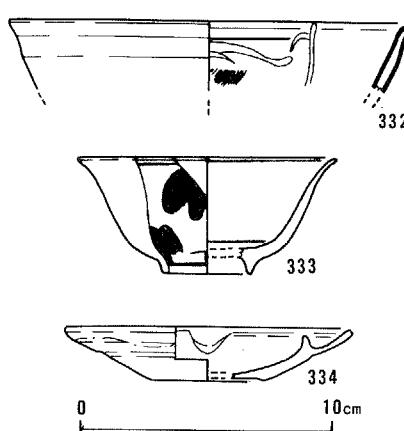
第20図 SD-1 出土の遺物実測図

SD-2

調査区北東隅で検出した南北に延びる近世の溝である。この溝はほとんど削平されている。残存の深さは5～8cmを測り、検出長6.5m、幅は1.4～0.7mを測る。

SD-2出土の遺物（332～334）（第21図）

332は青磁碗である。口縁端部がやや外反する。内面口縁端部下には丸鑿で浅く彫られた文様の一部を認める。333は瀬戸の染付碗で、69と同様である。334は伊賀・信楽系灰釉灯明皿である。内面全体に粗い貫入がはいる。



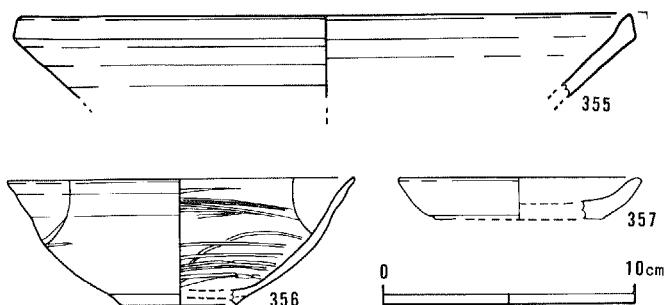
第21図 SD-2 出土の遺物実測図

S D - 3

S D - 2 と同様に削平が著しい。これも南北方向の近世の溝である。ここからの出土遺物と S D - 2との重複関係は矛盾する。検出長 5 m以上、幅は25~60cmを測る。深さは10~15cmである。

S D - 3 出土の遺物 (335~337) (第22図)

335は東播系捏鉢の破片である。色調は内外面青灰色を呈し、胎土はザラつき、黒色の還元粒子を少量含む。口縁部は上部へ拡張し、端部を尖がりぎみに丸くおさめる。336は瓦器碗である。内外面は銀灰色を呈し、焼成は良好である。外面体部は斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部



やや下に 2段のナデを施す。体部中程は指押えの痕をナデにより平滑にしている。ミガキは内外面ともに荒い。337は糸切りの土師器皿で、色調は明茶色を呈し、微砂粒を多量に含む。

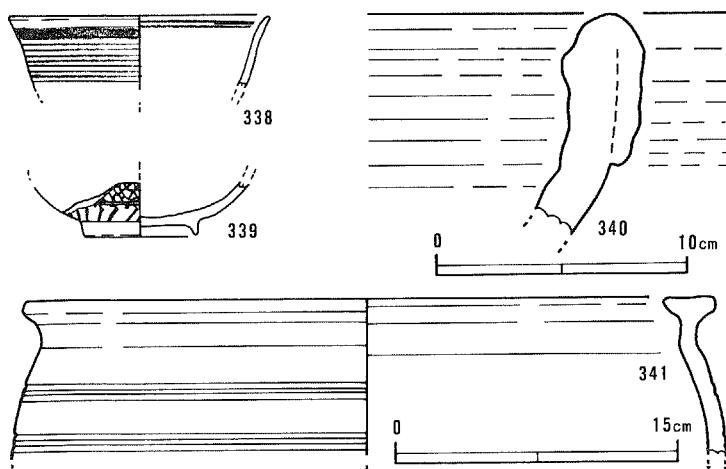
第22図 SD-3 遺物実測図

S D - 4

高野山ではよく認められる暗渠排水溝である。これと同様の施設を昭和55年の発掘調査で検出している。溝の肩に長さ1.5m内外の板を沿わせ、その上に溝の幅と同程度の長さの横木を渡すものである。総検出長17m以上、幅50~60cmを測る。深さは40~45cmを測る。また、この周囲には使用されていたと考えられる材木が散乱していた。溝の東側は S K - 2 と接し、相関関係が窺えられる。底の高低差からこの溝は東から西に流れていたものと考えられる。

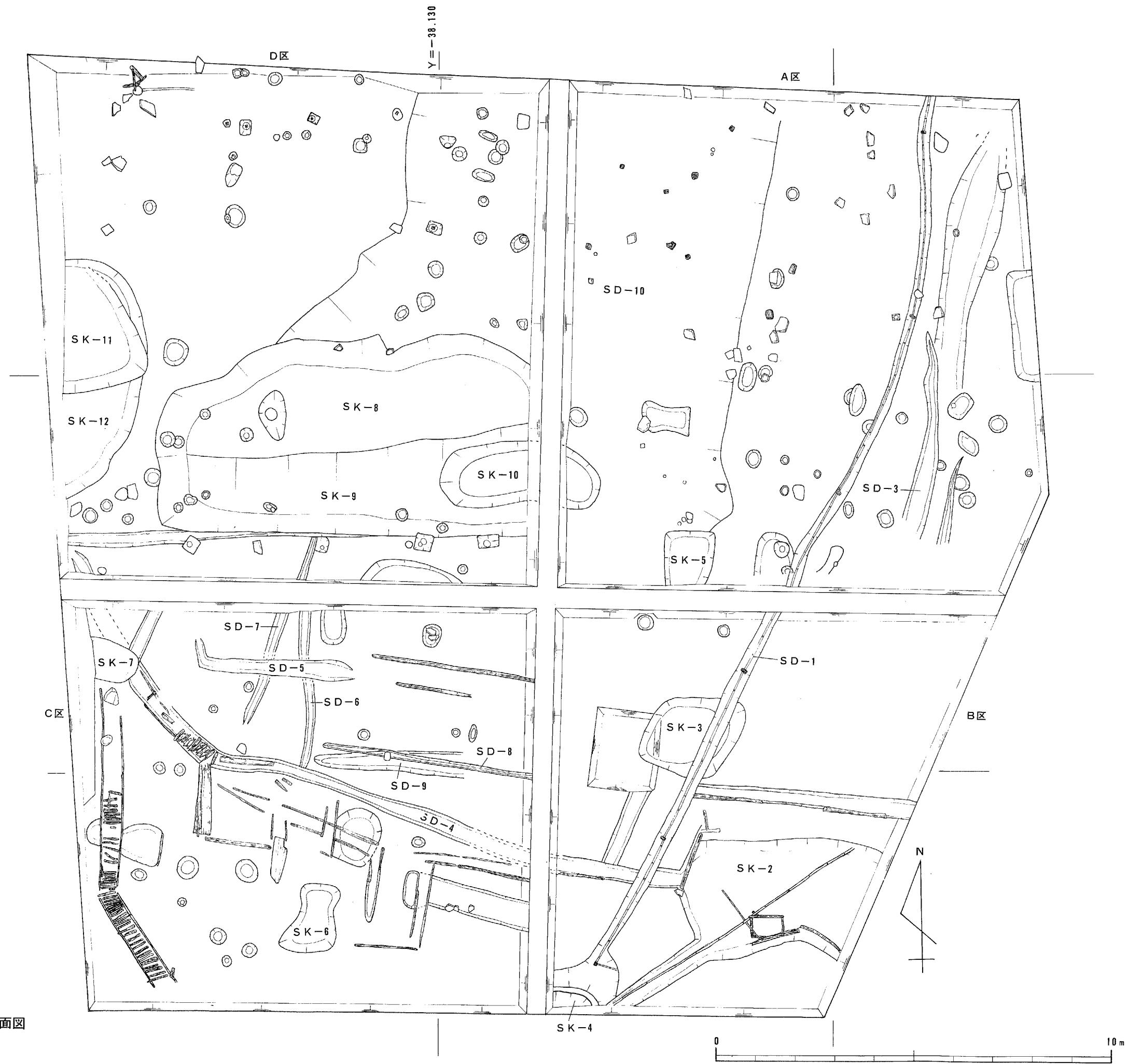
S D - 4 出土の遺物 (338~341) (第23図)

338・339は染付である。338は湯呑茶碗であろうか。体部は直立ぎみに立ち上がり、口縁でやや外反する。胎土の色調は白濁色を呈し、精良である。吳須の発色は淡青濁色を呈する。339は亀甲



文様を描くもので、豈付を無釉としている。実測図では碗であるが広東碗の蓋ではなかろうか。340は備前焼甕の口縁部破片である。色調は濃い茶色で、口縁を大きく外方に折る。口縁端部から内面にかけて粗いゴマがかかる。三石入クラスのものであろう。341は丹波の口縁部で、口縁部「T」字状を呈する甕である。茶黒色の釉がかかる。

第23図 SD-4 遺物実測図



第24図 上面遺構平面図

S D - 5

調査区中央西で検出した素掘り溝である。削平が著しく検出し得たのは約4mである。幅は20～60cmで、深さ約20cmを測る。底の高低差から東から西に流れていたと考えられる。

S D - 6

これはS D - 5に切られる。南北方向に延びる素掘りの溝である。検出長約4mを測り、幅は25～30cmである。断面は逆台形を呈する。底の高低差から南から北に流れていたものと思われる。

S D - 7

S D - 6と同規模の溝で、底の高さからこの溝も南から北に流れていたと考えられる。断面は「U」字形を呈する。検出長約5mを測る。幅は20～30cmで、深さは約15～20cmである。

S D - 8

調査区南の中央部で検出した東西方向に延びる素掘りの溝である。中央部は攪乱によって不明である。検出長15mを測り、幅は15～50cmを測る。深さは約15cmである。

S D - 9

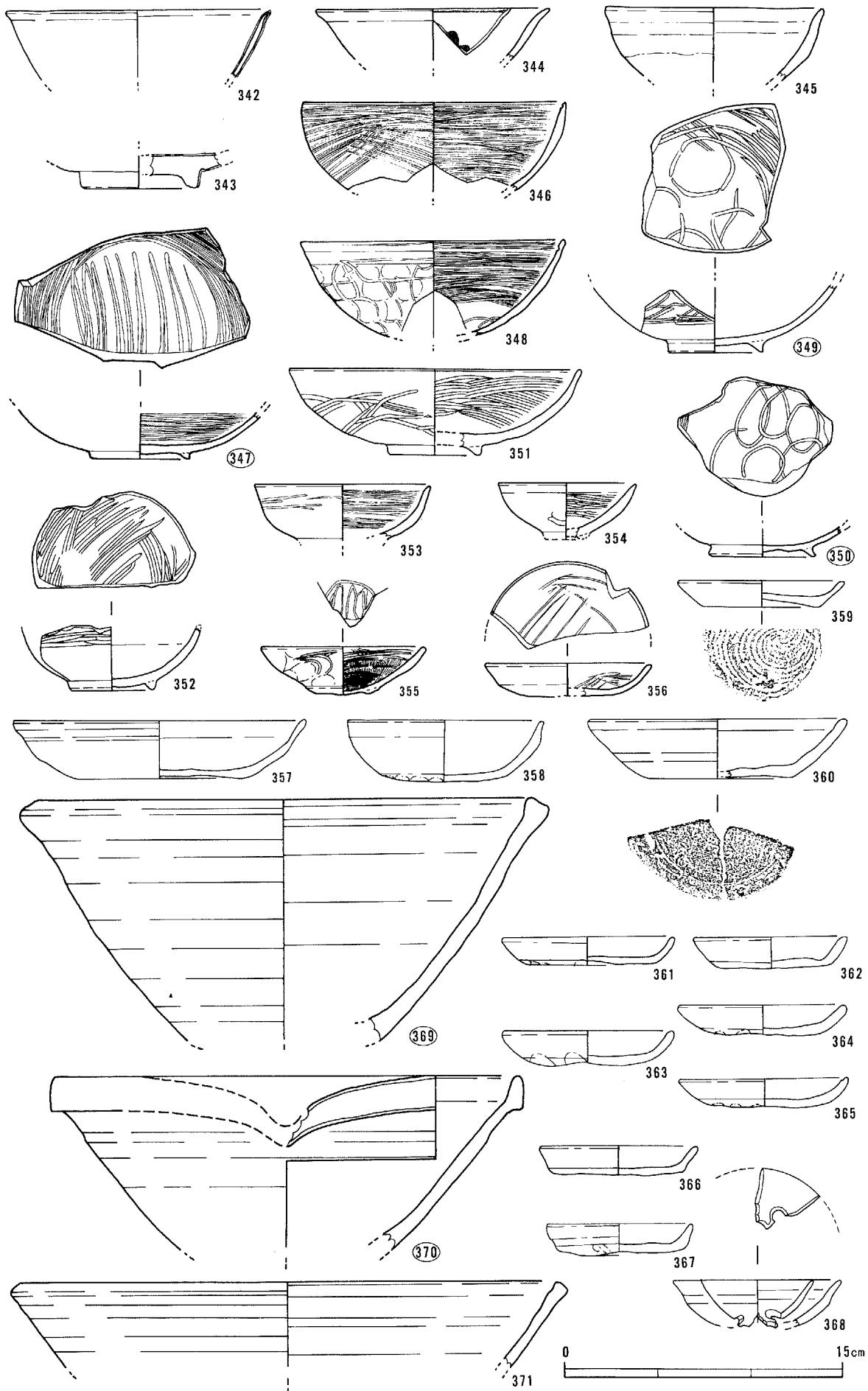
S D - 8に切られている。東西方向に延び、ほとんど削平されている。検出長は約3.8mである。幅は40～70cmで、深さは5～10cmを測る。

S D - 10

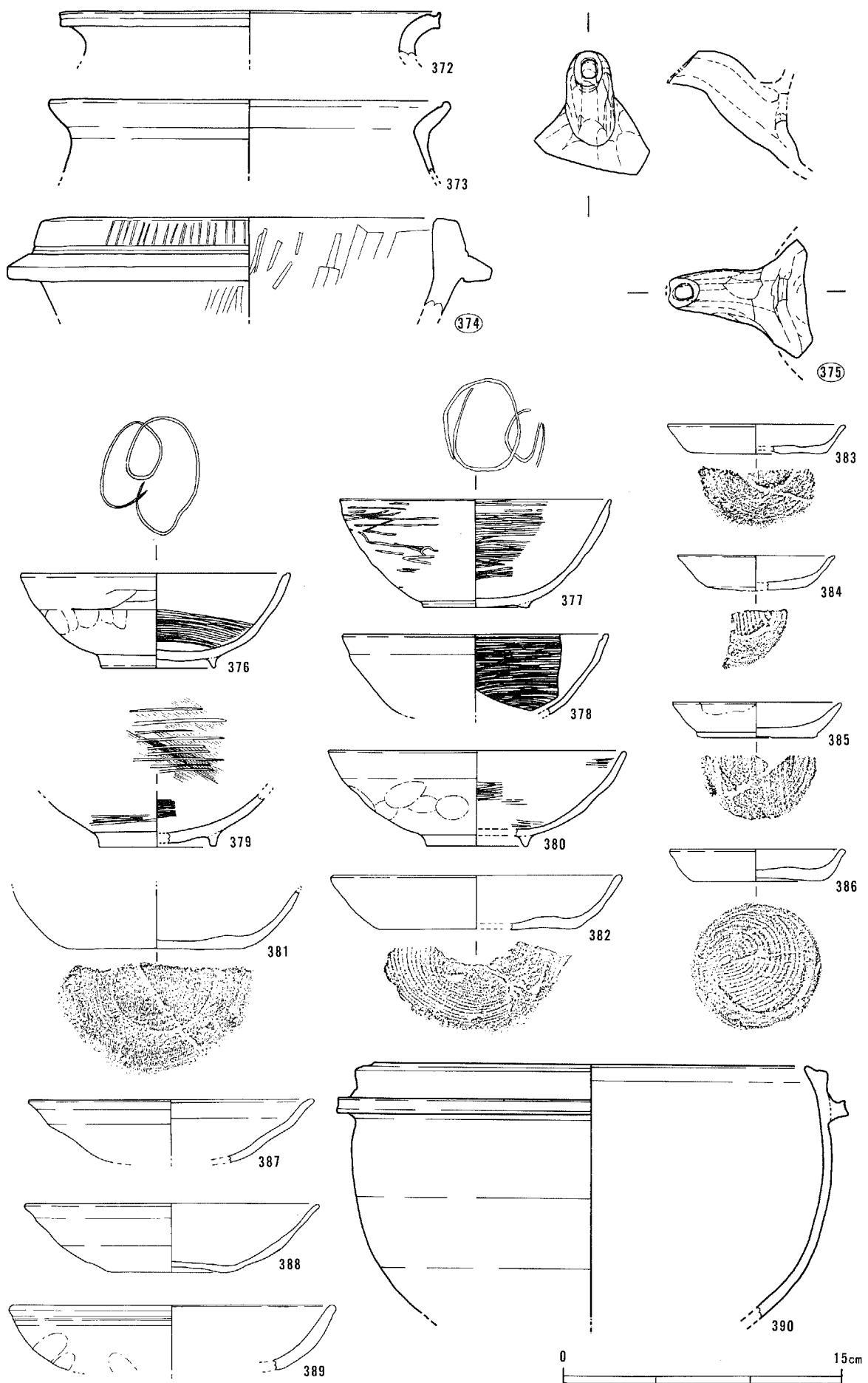
「上面の検出遺構」の項でも触れた。ここでは溝として扱っているが下面の谷状地形の上部の凹みと考えられる。すなわち谷状の落ちこみを埋めた整地土である。上面で検出した範囲は調査区北側中央部である。その幅は約9～12mを測る。埋土は灰褐色砂質土の単層で、深さは20～30cmを測る。出土遺物は近世のものは皆無であった。

S D - 10出土の遺物（342～390）（第25・26図）

342・343は青磁である。342は草緑色の釉で、外面口縁端部やや下に丸鑿による一条の沈線を有する。343は緑黄色の釉で、外底部から畳付を露胎にする。344は染付皿である。釉は青味を帶びる。345は天目茶碗である。中国製と思われる。外面体部中程まで厚い黒色の釉がかかる。胎土は灰色を呈し、焼成は堅緻である。346～351は瓦器椀である。346は口縁直下に一条の沈線を巡らし、外面体部を分割にミガキ、内面は密にミガく。347は外面下位に粘土紐痕と重ね焼痕を遺す。高台断面は低い台形を呈する。内面口縁部に沈線を有し、外面は指押えの周りを簡素にミガく。349の胎土は347と同様に高台はやや外向きの断面三角形を呈する。暗文は連結輪状である。350も連結輪状文である。三角形の高台を楕円形に貼付する。351は器壁が厚く、器高が低い。胎土は灰白色を呈し、ミガキは内外面ともに太いものを施す。見込の暗文は格子状である。352～355は瓦器小椀である。352～354口縁端部内面と高台畠付が著しく摩耗している。胎土は共通して灰白色でザラつく。355の体部内面下位から見込にかけては幅1.3cmの刷毛状工具で調整される。ミガキは螺旋



第25図 SD-10遺物実測図 1



第26図 SD-10遺物実測図 2

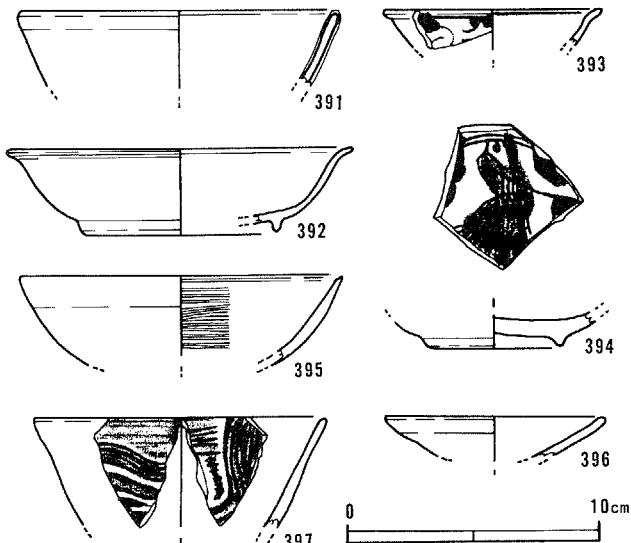
旋状の雜なものである。356は瓦器皿で、内外面摩耗している。357・358・361～368は底部未調整の土師器皿である。それぞれ器形並びに法量の異なるものを図化している。368は見込中央とその周りに円孔を穿つ。これらは灯芯孔と考えられる。369は須恵質の鉢である。東播系とは考えがたく、内面に摺目を施す。口縁内面を強くナデ、端部を内折ぎみにしている。胎土はザラつき砂粒を含む。370～371は東播系捏鉢である。371は古段階のものである。372は瓦質甕の口縁部破片である。373は土師質甕で、内外面の摩耗が著しい。374は石鍋である。鍔の先端から体部にかけて多量の煤が付着する。375は瓦質水注の注口部と考えられる。火中している。376～380は瓦器椀である。376の口縁部は肥厚し、外面を幅広の工具で削っている。高台は断面三角形を呈する。377・379の見込は刷毛状工具で調整される。379の器面断面はサンドイッチ状に変色し、安定の良い断面台形の高台を付す。378の口縁端部には沈線が巡る。380の内面は摩耗し、外面は口縁端部から高台の付け根までミガかれている。381～386は底部糸切りの土師器皿である。384は回転糸切り途中で静止糸切りに変更している。385の底部には箕子痕が認められる。387～389は底部未調整の土師器皿である。387は破片で火中している。瓦器椀であるかもしれない。388はシャープで、389は器壁が厚い。390は土師質羽釜である。鍔の先端部をきつくナデる。色調は肌色を呈し、砂粒を多量に含む。口縁内面には煤が付着する。

SK-1

調査区東端で検出した。これの大半は調査区外のため規模は不明である。形状は正方形もしくは長方形と思われる。検出し得た深さは端で約80cmを測る。時期は近世である。

SK-1 出土の遺物 (391～397) (第27図)

391～394は中国製磁器である。391は青磁碗の口縁部である。草緑色の厚い釉が内外面に均等にかかる。口縁端部を丸くおさめている。392は口縁部端反の白磁皿である。胎土は灰白色を呈する。



395は染付皿である。396は瓦器椀で口縁端部に細い沈線を有する。内外面の摩耗が著しい。397は土師器皿で、明らかに灯明皿として使用され、口縁端部の内外面全周に煤が多量に付着する。397の胎土は灰茶色を呈し、白濁釉がかかる。唐津であろうか。

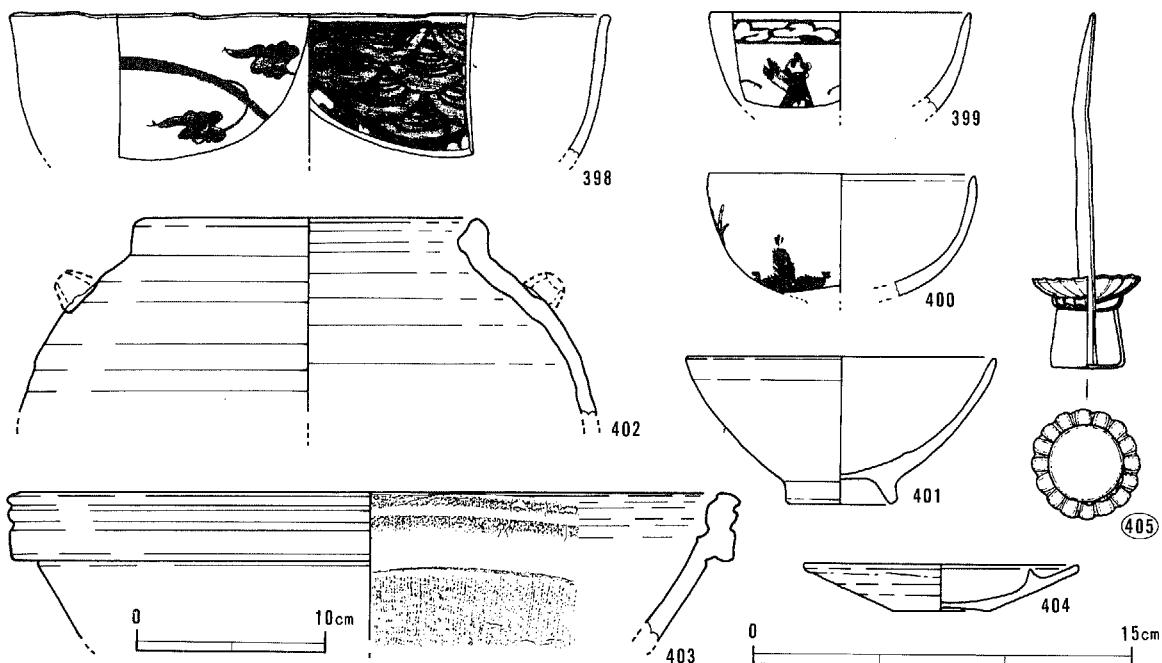
第27図 SK-1 遺物実測図

SK-2

SD-4 に関連する遺構と考えられる。これは水溜めの施設と思われる。東側は調査区外のため形状は不明である。南端に長方形の60cm×90cmの木枠状のものが設置されている。

SK-2 出土の遺物 (398~405) (第28図)

398~400は肥前系の染付である。398は輪花鉢である。内面に青海波文を細筆で描き、それを濃でつぶす。呉須は濃青色を呈する。399は碗である。胎土は灰白色を呈する。図柄は不明である。400の釉は青味を帶び、外面には松葉文を描く。胎土は白色を呈する。401は肥前系碗である。鉛色の釉がかかり、器面全面に細かい貫入がはいる。置付を露胎とし、砂が付着する。402は焼締の四耳壺である。産地は不明である。403は堺摺鉢である。胎土は赤茶色を呈する。404は伊賀・信楽系灯明皿である。見込から口縁部外面まで施釉する。405は金銅製の釘隠しである。



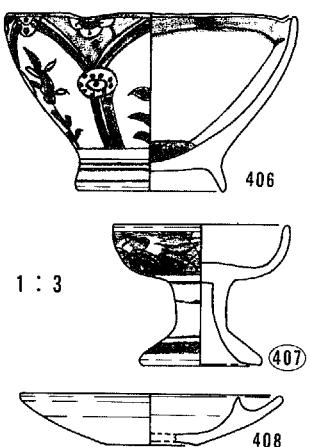
第28図 SK-2 遺物実測図

SK-3

調査区南東で検出した不定形の土坑である。SD-1 に切られ、出土遺物から近世と考えられる。規模は長径2.8m、短径2.0mを測り、深さは30~40cmである。壁の立上がりはなだらかで緩い。

SK-3 出土の遺物 (406~408) (第29図)

406は染付の輪花小鉢である。外面は濃筆で5窓を描き、その中に草花文を描く。高台は「ハ」の字状に開く。407は赤絵の仏飯器である。体部外面には青と緑で文様を描く。同じ文様を三分割すると思われる。408は404と同様の伊賀・信楽系の灯明皿である。

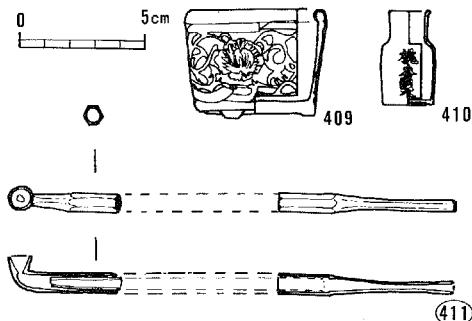


第29図 SK-3 遺物実測図

S K - 4

調査区中央南端で検出した。S D - 1 との関連性が窺われる。大半が調査区外のため、形状は不明である。S D - 1 からの水溜めであろう。深さは約55cmを測る。時期は近代と考えられる。

S K - 4 出土の遺物 (409~411) (第30図)



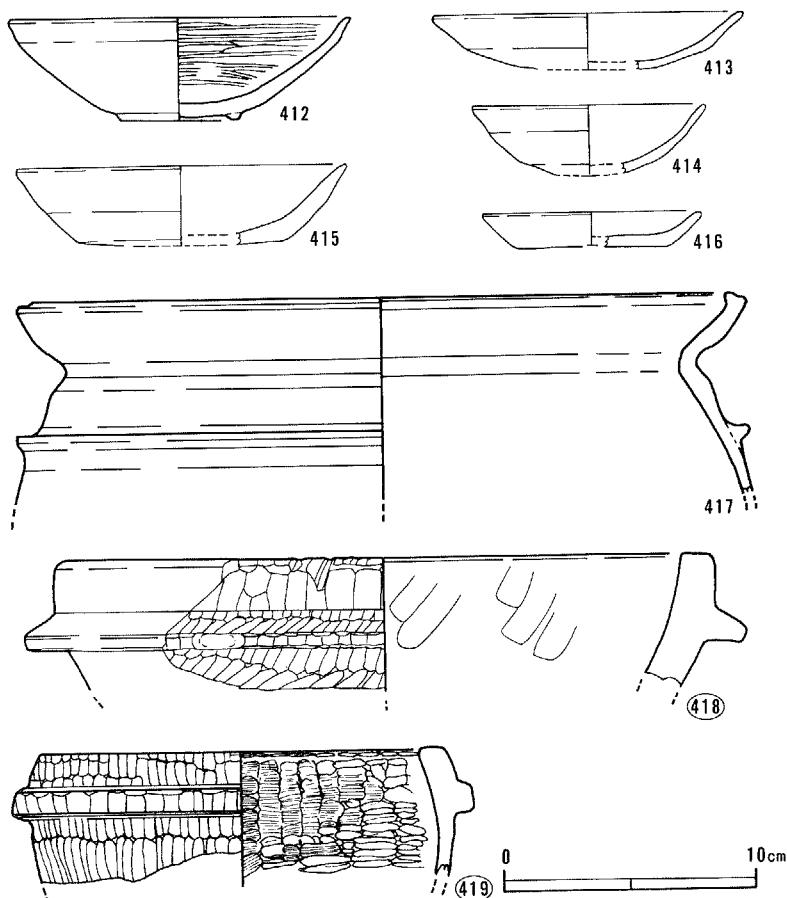
409は青磁の聞香炉である。薄緑色の釉が口縁端部内面から外面体部下端まで厚くかかる。体部は三枚の板粘土を接合し、底部の円形粘土板にこれを接合している。体部外面には牡丹文が型押しされている。外底には三足を付す。410はガラス小瓶である。外面に「桃谷製」の陽刻がある。411は銅製キセルである。吸管の断面は六角形を呈し、吸口は丸く叩かれている。

第30図 S D - 3 遺物実測図

S K - 5

形状は長方形を呈する。長辺1.4m以上、短辺1.3m、深さ35cmを測る。壁は斜めに直線的に立ち上がる。S D - 10 と重複しているが、時期差は殆ど無いものと考えられる。

S K - 5 出土の遺物 (412~419) (第31図)



412~414は終末期の瓦器碗である。412は内外面の摩耗が著しい。内面は口縁やや下から体部下端までミガかれ、外面は不明である。高台は稚拙な低い小さいものが付され、殆ど形骸化されている。413・414は火中する。415・416は糸切りの土師器皿である。415は明茶色を呈し、416は肌色を呈し、内外面は摩滅する。417は土師質羽釜である。胎土には1~2mm大の砂粒を多量に含む。鍔は形骸化する。418・419は石鍋である。双方とも鍔部から体部にかけて煤が付着する。419は小振で、口縁部は内弯し、鑿調整は丁寧である。

第31図 S D - 3 遺物実測図

S K - 6

南北に長い瓢形の土坑である。長径約1.8m、短径約0.8mを測る。深さは20~35cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は茶褐色砂質土の単一層である。

S K - 7

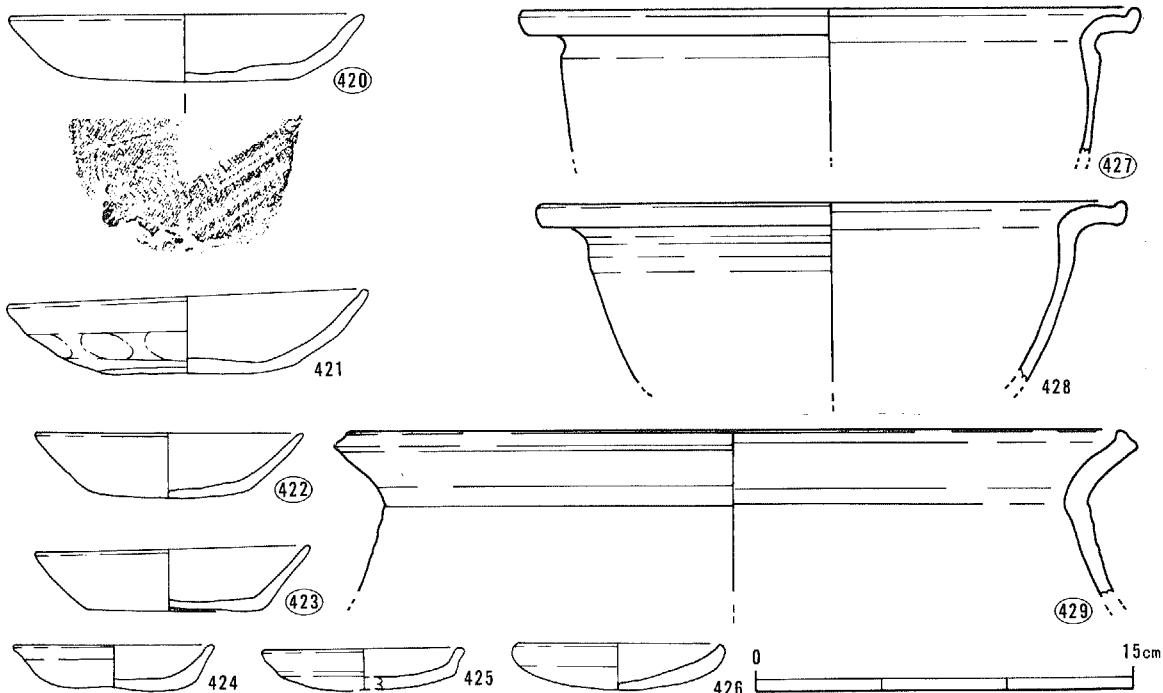
調査区中央西端で検出し、一部は調査区外のため全容は不明である。形状は橢円形を呈するとと思われる。長径1.3m以上、短径1.0mを測る。S D - 1 より新しい。

S K - 8

S D - 10 と重複する。大きな土坑である。重複関係から S D - 10 より新しいが、時期的には大差の無いものと考えられる。この遺構の南半部は落ち込み、別遺構（S K - 9）として扱った。長径約9.5m、短径約2.8mを測る。深さは25~30cmを測り、壁の立ち上がりは緩やかである。

S K - 8 出土の遺物 (420~429) (第32図)

420は回転糸切りの土師器皿である。器面全体の色調は茶褐色を呈する。胎土には1~2mm程度の黒色砂粒を含む。外面底部全体には箕子痕が認められる。土師器皿421~426は底部未調整である。421は内外白灰色を呈する。器形は橢円形を呈し、口縁部は凹凸が著しい。外面底部と体部の堀には、粘土紐接合痕がほぼ円形に認められる。422・423は同タイプのものである。色調は白い肌色を呈し、底部には薄く箕子痕が遺る。424・425は外面口縁部を強いナデにより段を付ける。426は口縁内弯ぎみの浅いものである。427・428は土師質鍋である。口縁端部は直立ぎみに上につまみ上げられる。429は417と同様のものである。内面口縁部端部やや下を強いナデで凹ます。



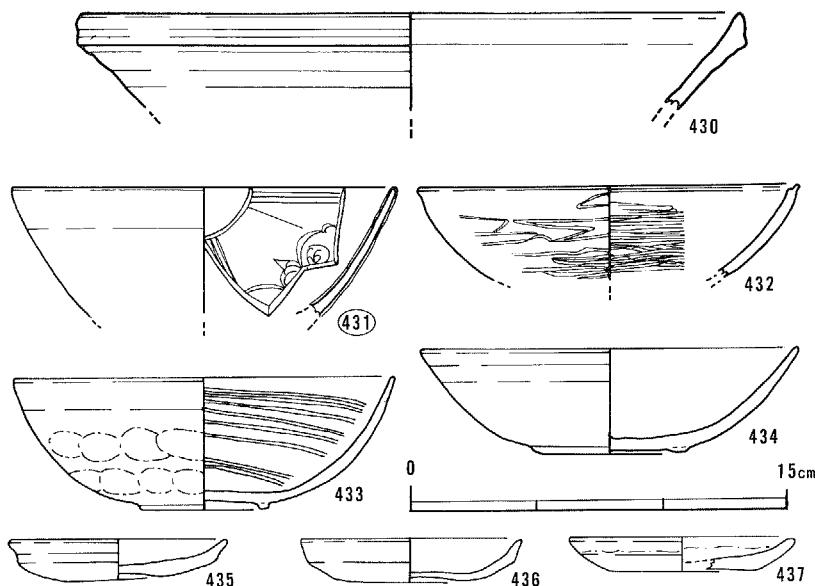
第32図 S K - 8 遺物実測図

S K - 9

S K - 8 の南側の深い部分である。この土坑の東側は S K - 3 により切られている。規模は S K - 8 と同様、深さは 35~50cm を測る。埋土は焦茶色の砂質土である。

S K - 9 出土の遺物 (430~437) (第33図)

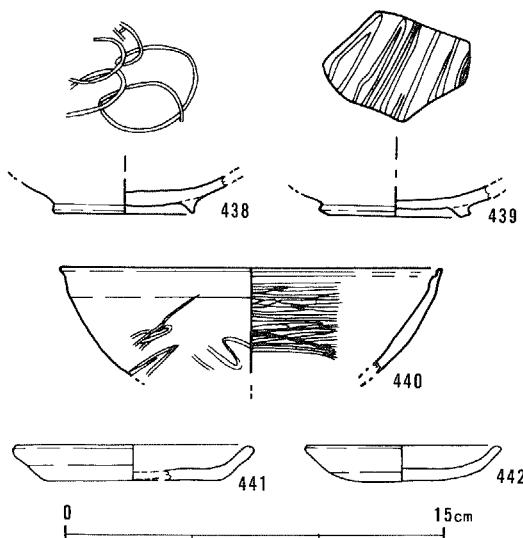
東播系捏鉢 430 は体部が直線的に斜めに伸びるもので、口縁端部の拡張が上下に認められる。胎土は灰色を呈し、黒色の微粒子を含む。431 は内面に片切彫りを施す龍泉窯系青磁碗である。432~434 は瓦器椀である。432 は口縁端部をつまみ上げシャープにしている。口縁端部には明瞭な沈線が巡る。433 の内面ミガキは粗である。色調は灰黒色を呈する。外面体部には 2 段の指押えが認め



られる。高台は断面台形の低いものを付す。胎土は精良であるが、焼成は軟質である。434 は器高の低いものである。高台も形骸化する。体部は斜め直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くする。435~437 は土師器皿で、435 は見込を蜘蛛の巣状に搔く。436 は直線的に立ち上がる。437 の端部は丸くおさめる。

第33図 S K - 9 遺物実測図

S K - 10



第34図 S K - 10 遺物実測図

中央南北セクションベルトを股ぐ位置で検出した。形状は橢円形を呈する。長径約 4.0m、短径約 1.6m を測る。深さは 40~55cm を測り、壁は斜めに直線的に立ち上がる。底は舟底状を呈する。時期は S K - 9 と大差の無いものと考えられる。

S K - 10 出土の遺物 (438~442) (第34図)

438~440 は瓦器椀である。438 は連結輪状の暗文を施す。高台は断面三角形のものを付す。439 の高台は断面台形を呈し「ハ」の字状に開く。440 の内面ミガキは密で、外面に接合痕が遺る。441 は糸切り、442 は底部未調整土師器皿である。

S K-11

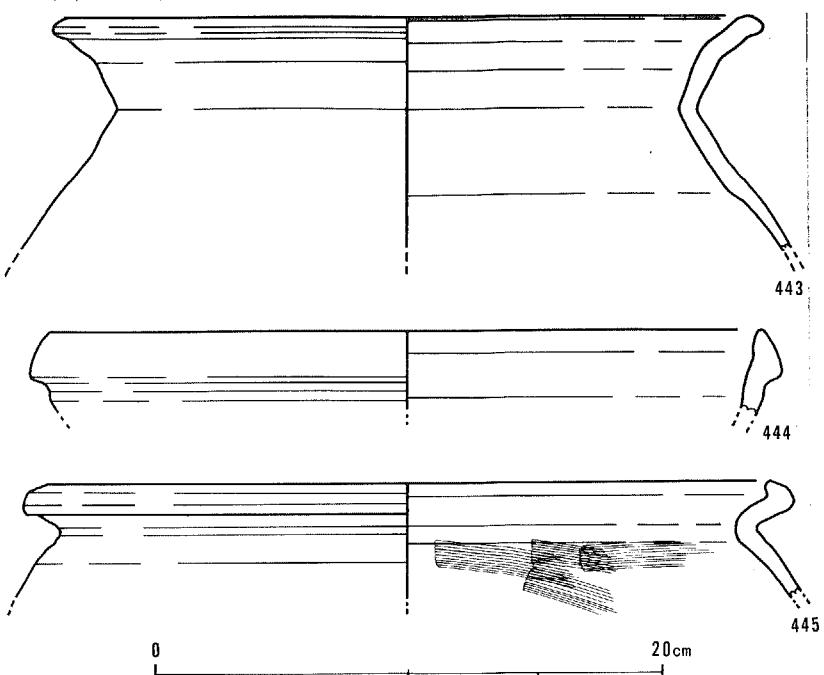
調査区西端で検出した。一部は調査区外に掛かり、その全容は不明である。近世の削平をうけ、深さは10~20cmを測る。壁は内弯しながら緩やかに立ち上がる。

S K-12

S K-11と同位置で検出し、この土坑もその全容は明らかでない。S K-11に切られる。検出長径6.0m、短径2.1mを測る。深さは20~25cmを測る。埋土は明茶褐色土である。

S K-12出土の遺物 (443~445) (第35図)

443は東海系の須恵質甕である。頸部は「く」の字状を呈し、内面は接合痕を指で丁寧にナデ消す。胎土は良く精製される。444は東播系捏鉢の口縁部破片である。実測図は少し直立する。胎土はザラつき焼成不良である。口縁やや下を強いナデで凹ます。445は土師質鍋である。内面頸部から下に刷毛調整を施す。



第35図 S K-12遺物実測図

下面の検出遺構 (第37図)

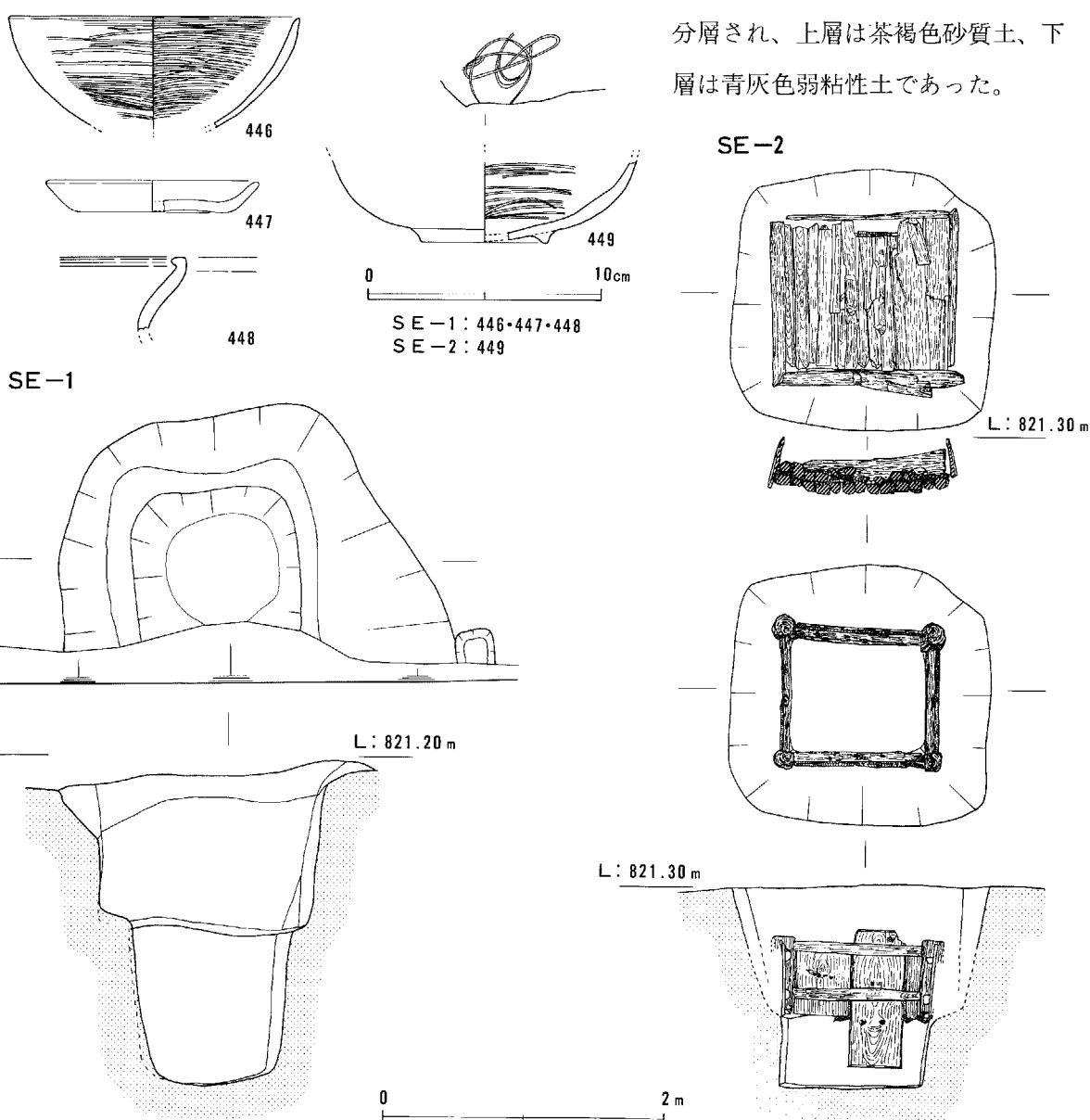
「上面の検出遺構」の項でも述べたように、整地土の削平が著しく、また、遺構の重複関係も狭小な調査範囲の中で複雑であったため、面を正確におさえられなかった。この下面で検出した遺構も時期幅が大きく、概ね平安時代後期後半~室町時代前期までの範疇にある。

検出遺構は土坑、溝、掘立柱建物跡、柵跡、井戸、谷状の自然地形等である。以下主な遺構を記す。掘立柱建物跡は明確な検出ができなかった。それは時期的な問題で、ここでは一応下面遺構として扱うが、この建物の中には近世のものもあると考えられる。次に谷状地形である。高野山上の平地は限られた広さで、開山当時しばらくは寺院建立に十分であったが、次第に子院の数が増すにつれて、小さな谷を埋立て整地しなければならなかつたという事情をありありと窺うことができる。

この項で特筆すべきはS K-17と呼称している土坑である。ここでは舞良戸と呼ばれる引き戸が出土しており、其伴遺物から平安時代末と考えられる。

SE-1 (第36図)

素掘りの井戸である。調査区中央西寄りで検出した。一部はセクションベルトに掛かり、全容は不明である。掘形の平面形は不定形を呈し、最大幅2.80mを測る。西壁は崩れ、元々の掘形は正方形もしくは長方形に掘られていたものと考えられる。また、この井戸は2段に掘り込まれ、深さ約2.20mを測る。上段の掘形は一辺1.50mの方形を呈し、深さは約1.0mを測る。下段の深さは1.20mで、一辺1.15mの正方形を呈し、底の形状は直径55cmの円形を呈する。調査中底から10cm上で湧水が認められた。これには井側は検出されず、素掘りであったのか、廃棄時に取られたのか定かでない。過去の高野山の検出例からみても素掘りの井戸は稀である。出土遺物は殆ど無く、瓦器碗、土師器皿、土師質鍋の細片で、時期は平安時代末と考えられる。埋土は基本的に2層に



第36図 SE-1・2 実測図



第37図 下面遺構平面図

S E - 2 (第36図)

調査区南西隅で検出した木製の井筒を組んだ井戸である。掘形の平面形は方形を呈し、一辺1.80mを測り、深さは1.45mであった。井筒は掘形の検出面から約30cm下で検出した。構造は四隅に一辺約15cmの角材で隅柱を立て、幅40cm、厚さ2cm程度の正目の縦板を井側として使用している。また、その外側に幅約8cm、厚さ6cmの桟木を隅木の孔に組み込んでいる。これを25cm間隔に2箇所確認した。廃棄時には南北方向に8×10cmの角材を十数本渡し、これを塞いでいる。おそらくこの上で井戸祭祀が行なわれたであろうと考えられる。

S E - 1・2 出土の遺物 (446~449) (第36図)

446は瓦器椀で、遺りが良く硬質である。内外面を口縁端部からミガキ、外面体部を平滑にする。447は底部糸切りの土師器皿で、器面全体が摩耗している。448は土師質鍋で、外面は口縁端部から煤が付着する。449の瓦器椀は内外面摩耗し、高台は断面三角形の雑な作りである。

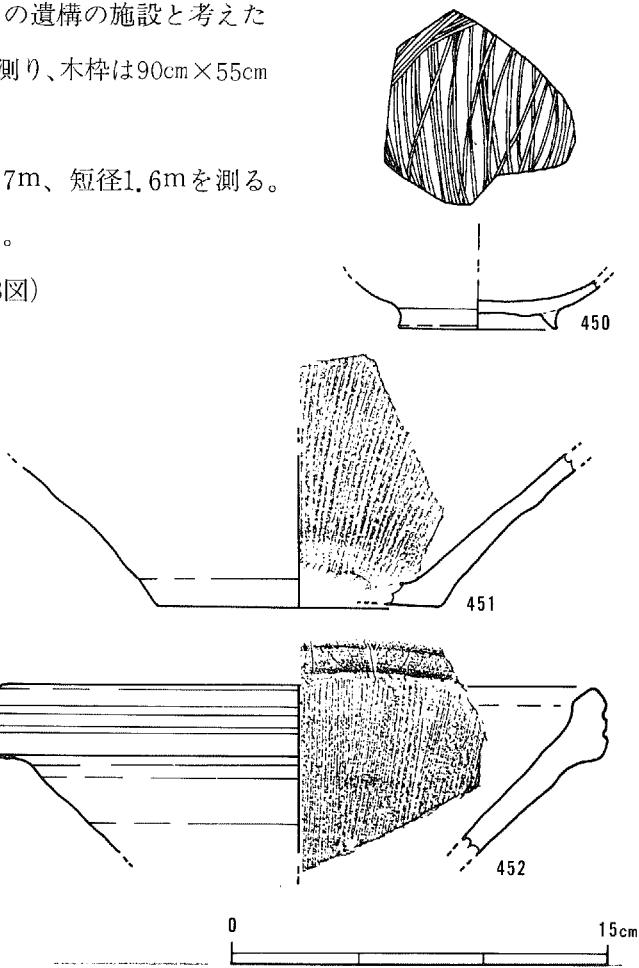
S K - 13・14

S K - 13は調査区南東で検出した。木枠を伴う不定形の土坑である。これの南側はS K - 14と重複する。上面で検出したS K - 2の底で検出した。当初はこの木枠施設はS K - 2に伴うものと考えたが、S K - 13内に納まるところからこの遺構の施設と考えた方が妥当である。規模は2.0m×1.7m以上を測り、木枠は90cm×55cmの一段組のものである。

S K - 14は橢円形を呈する。規模は長径1.7m、短径1.6mを測る。壁は西側はほぼ垂直に、東は緩く立ち上がる。

S K - 13・14出土の遺物 (450~452) (第38図)

450は瓦器椀である。色調は内外面黒色を呈する。高台は橢円形を呈し、外反ぎみの高いものを安定良く付している。胎土は良く水簸され、灰白色を呈する。暗文は細くジグザグ状である。451は焼締の摺鉢である。産地は信楽と思われる。胎土には長石、石英が認められる。櫛目の単位は底部破片のため不明である。452は備前焼の摺鉢である。櫛目は約4cm幅の13本を1単位とし、細くシャープに施す。外面は赤茶色を呈し、頸部に重ね焼痕が巡る。

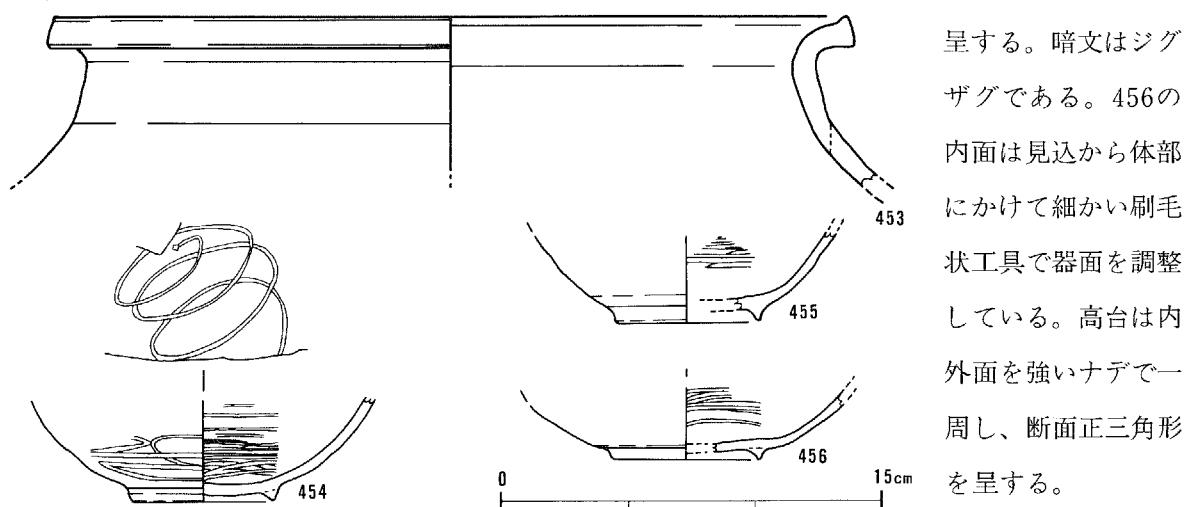


第38図 S K - 13・14遺物実測図
S K - 13 : 450, 451
S K - 14 : 452

S K-15及び出土遺物 (453~456) (第39図)

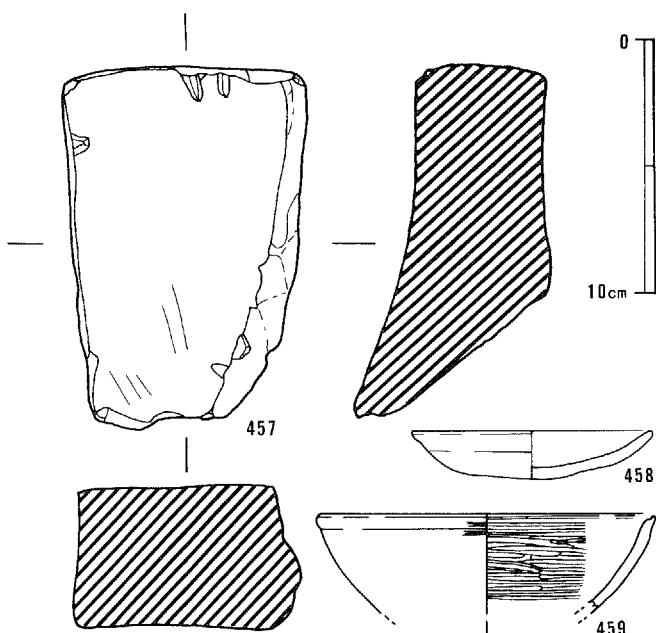
調査区西側で検出した。主軸をほぼ南北にもつ長楕円形の土坑である。南北長約2.0m、東西長1.1mを測る。深さは15~20cmの浅いものである。周壁は直線的に斜めに立ち上がり、断面は逆台形状を呈する。埋土は青灰色弱粘質土の單一層である。

453は東海系の須恵質甕である。口縁端部は受け口状を呈する。口縁縁体部は1.5cmと細い。外面頸部下端には粘土紐接合痕が認められ、頸部上端にも明瞭ではないがわずかに遺る。454~456は瓦器椀である。454の断面はサンドイッチ状を呈し、焼成はやや軟質である。暗文は長楕円の連結輪状を呈する。455の胎土は灰白色を呈し、良く水簸されている。高台は丸みを帯びた断面台形を



第39図 S K-15遺物実測図

S K-16及び出土遺物 (457~459) (第40図)



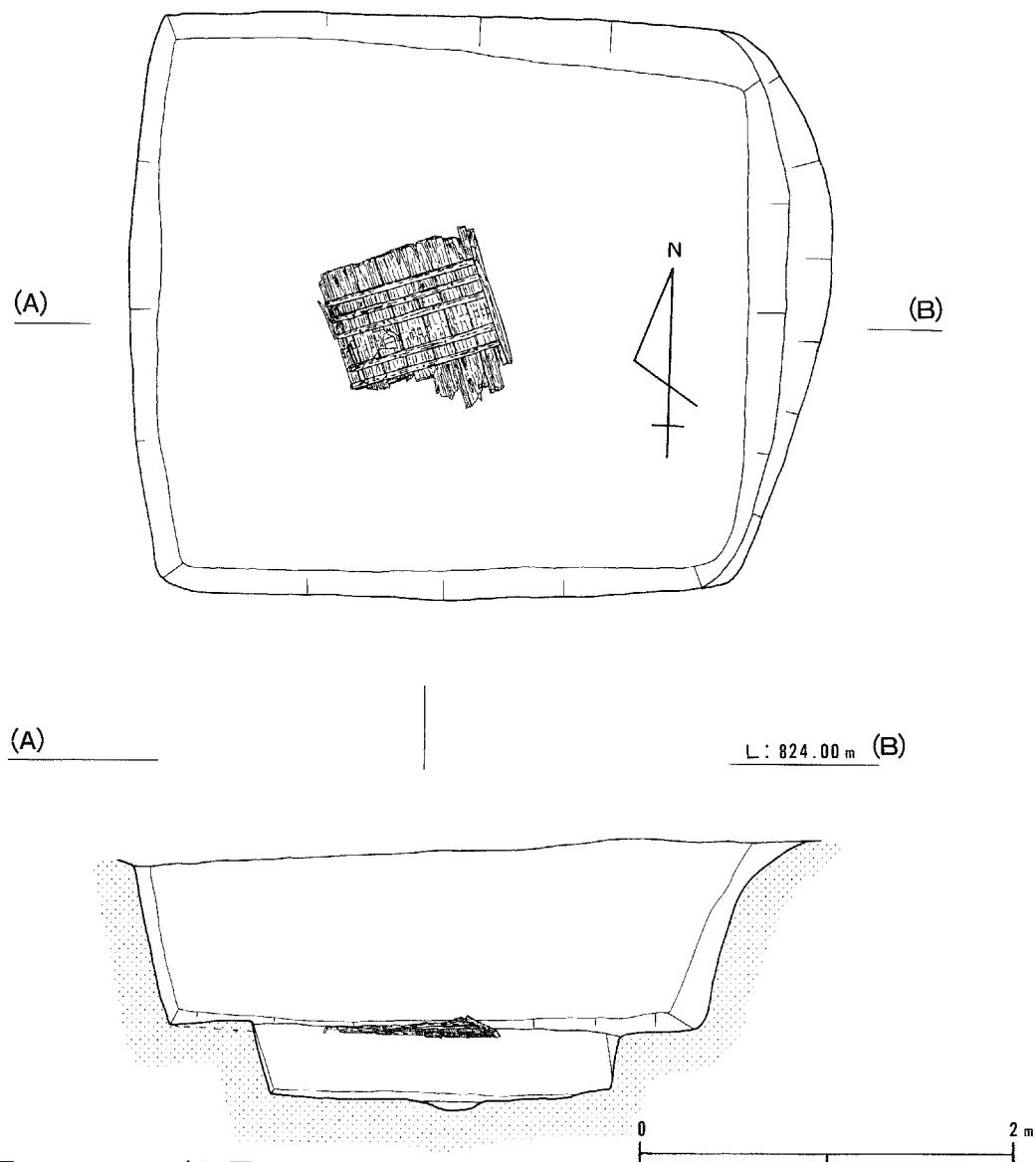
S K-15の南に隣接して検出した土坑である。南側は調査区外に掛かり、その全容は不明である。南北長1.3m以上、東西長1.0m、深さ20~28cmを測る。

457は砥石である。石材は泥岩系のものである。研砥面は一面で、この面は良く使用され、弓型に擦り減る。底面は安定性を考え、中央部を凹ます。上面、底面、側面に擦痕が認められる。458は未調整の土師器皿で、外面底部と側面には粘土紐接合痕が認められる。459は瓦器椀で、胎土は灰黒色を呈し、焼成は軟である。口縁端部には細く浅い沈線が巡る。

第40図 S K-16遺物実測図

S K-17 (第41図)

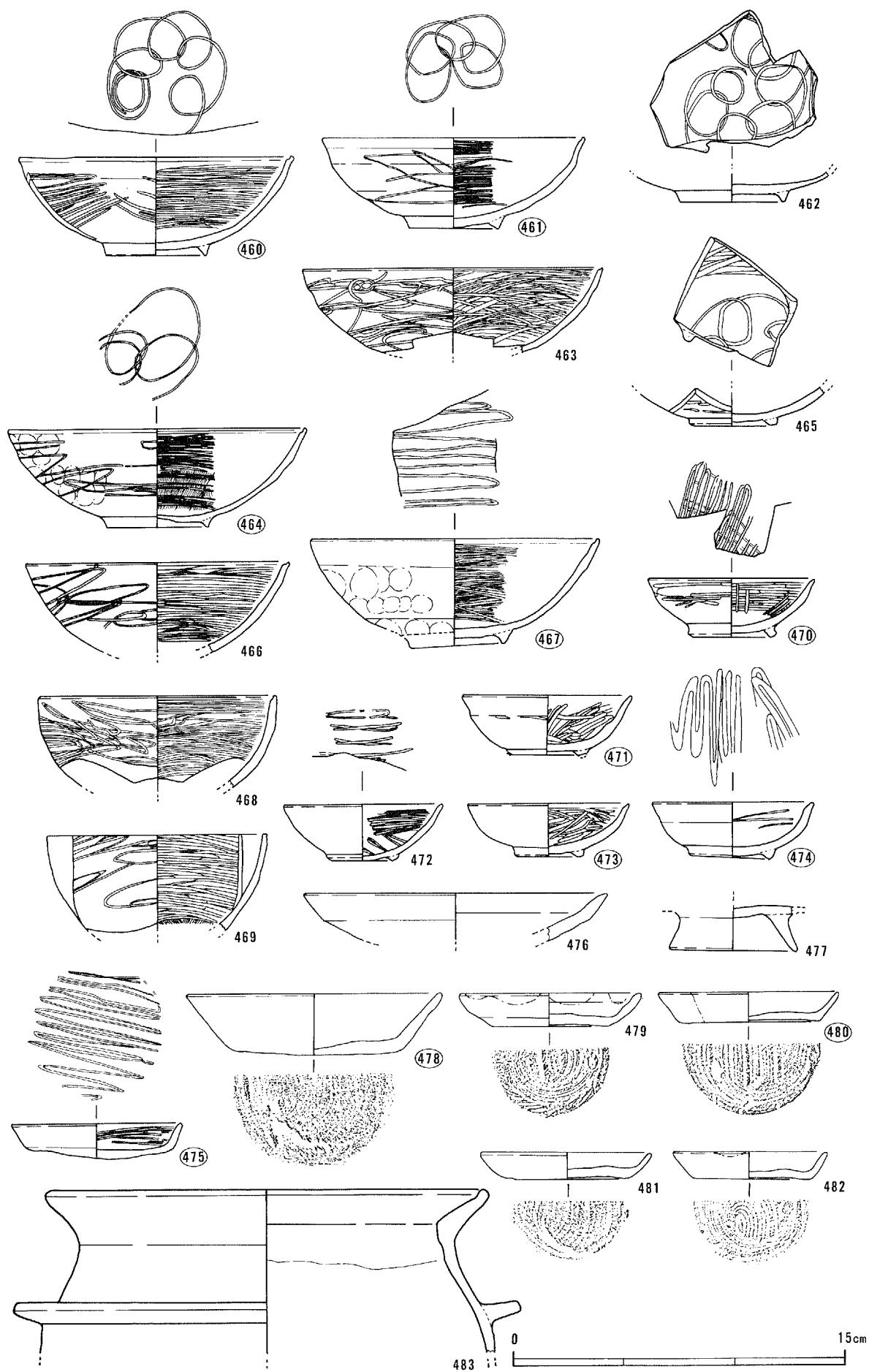
調査区北西隅で検出した方形の土坑である。検出面は第7層除去後の地山面で検出した。概ね北方向を軸とする。平面の規模は南北長3.20m、東西長3.55mを測る。深さは中央部の最も深い箇所で約1.4mを測る。この土坑は2段に掘り込まれているもので、検出面から92~95cm下がった地点で一辺約1.92mの方形状の掘り込みを設ける。上段の掘り込みの西壁は斜め上方に立ち上がり、他の壁の立ち上がりはほぼ垂直である。下段の壁の立ち上がりも四方ほぼ垂直である。また、上段・下段の底も水平に掘られ、その断面の形状は長方形を呈する。上段掘り込みの底で舞良戸と呼ばれる引戸が出土した。出土状態は殆ど水平で、遺存状況は水分で飽和状態をきたす。下段(註6)掘り込みからも下駄、高下駄の歯、用途不明の木製品、曲物の蓋・底などの木製品が多数出土している。特にこの中でも用途不明の木製品の出土が多く、全て先が焦げている状況下で出土した。何かの修法と関係があるのか。



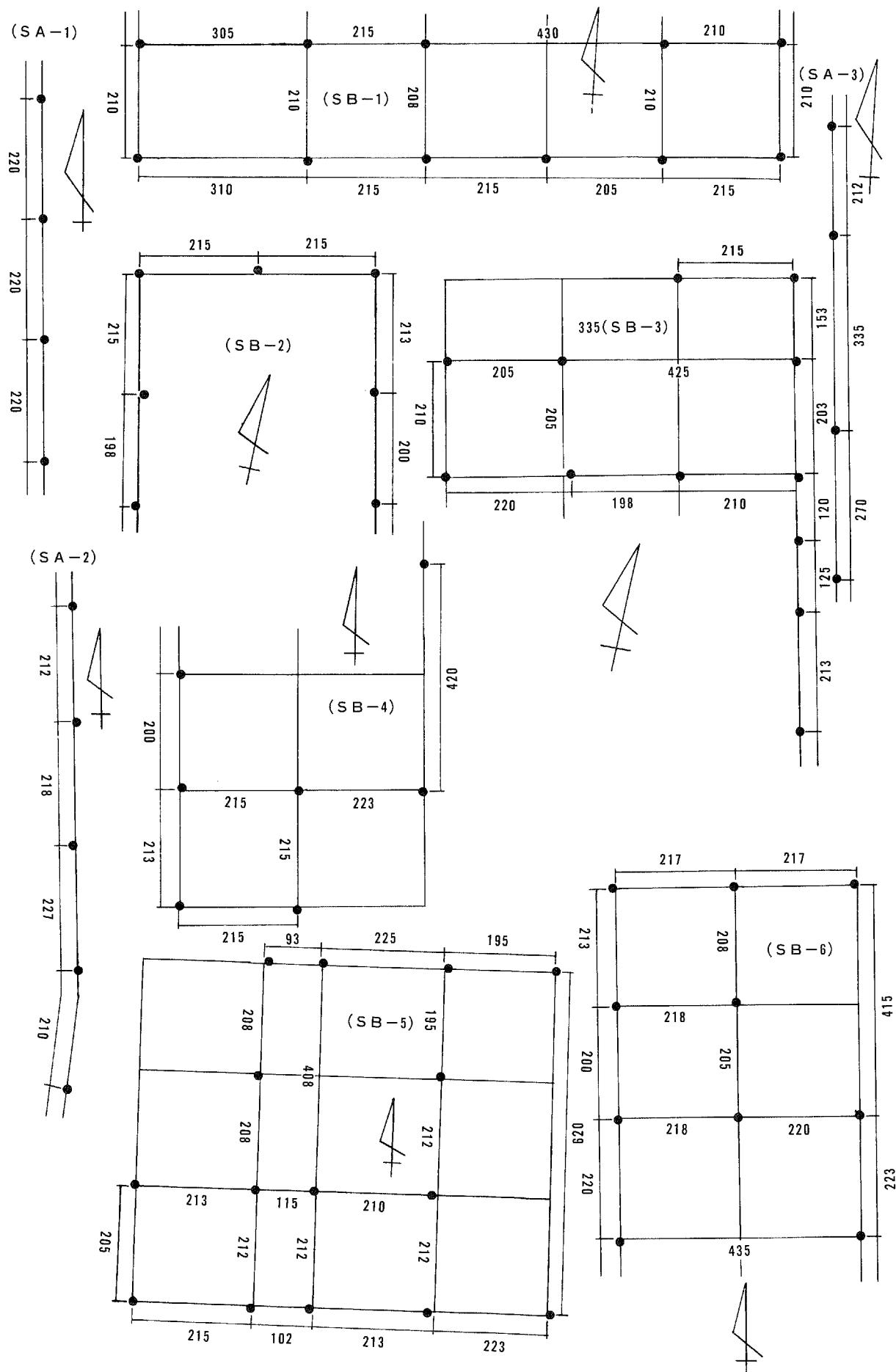
第41図 S K-17実測図

S K-17出土の遺物（460～483）(第42図)

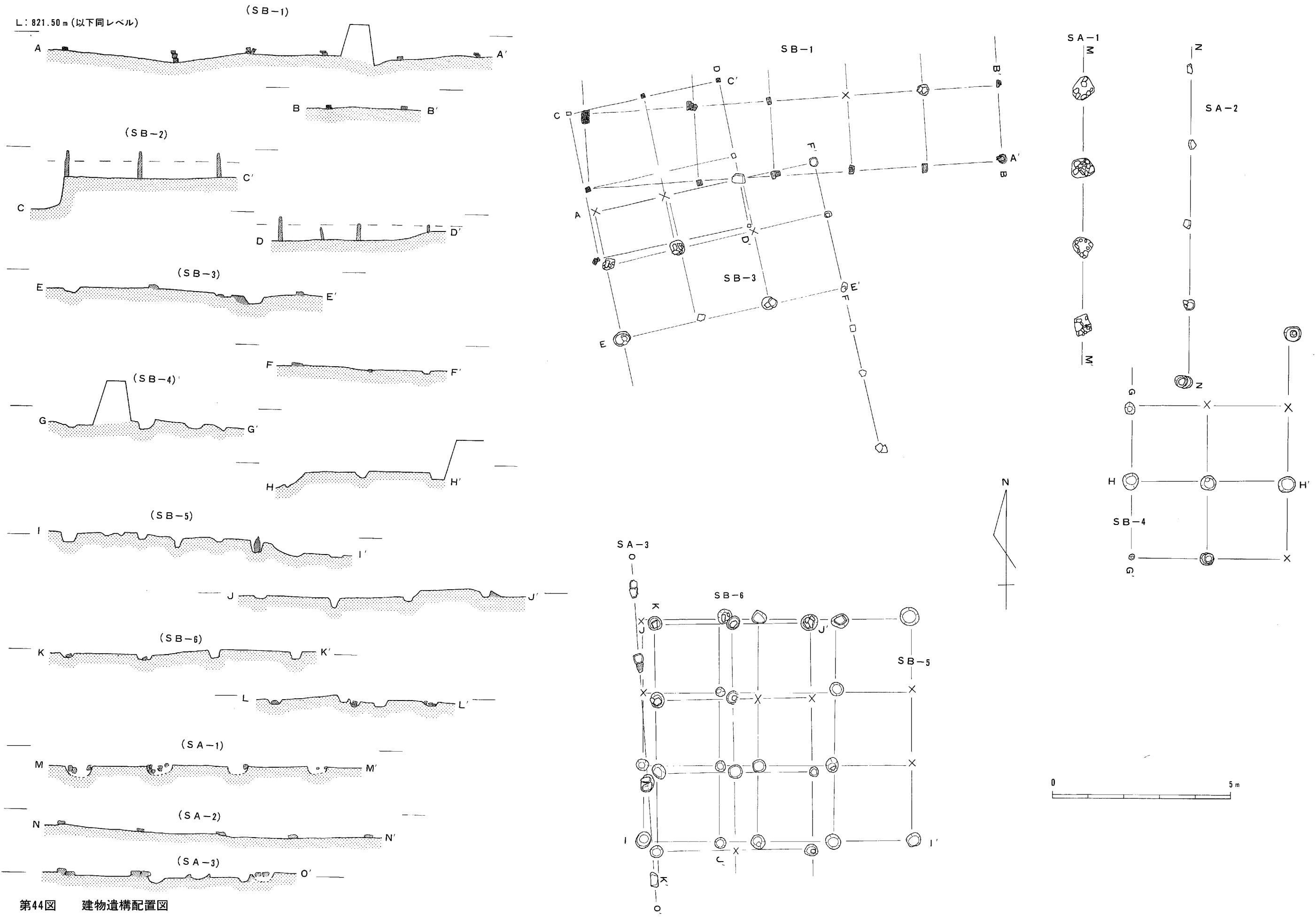
今回の発掘調査において遺構に伴う遺物としては最も古い一括遺物である。460～475は瓦器である。460～469は瓦器椀で、460の体部は緩やかな曲線が外開きに伸びる。口縁端部は緩いナデによりやや外反する。内面のミガキは口縁端部やや下から体部下端まで密に施す。外面は4分割にミガく。口縁端部は明瞭な沈線を施し、暗文は連結輪状である。461の体部は斜めに直線的に伸び、口縁部で強いナデにより直立ぎみに立ち上がる。内面は口縁端部の沈線下から体部下部まで密にミガかれる。外面は弱い指押えで器面を整え、数条の雑なミガキを施す。462の色調は銀灰色を呈する。胎土は灰白色で、良く水簸された良好なものである。463は口縁先端部に沈線を巡らす。内面のミガキは方向性が雑な割に密にミガかれ、外面も指押えによる凸部をミガキ潰す。464の沈線下から体部下端まで細かいミガキが密に施され、銀黒色を呈する。外面のミガキは粗いが分割を意識している。465の高台は断面台形の低い安定感のあるものを付す。胎土は灰白色で、焼成は良好である。466は口縁端部に浅い沈線が巡り、内面は荒いミガキを施す。467は器形的に463と酷似する。内外面銀黒色を呈し、内面は細かいミガキが施される。外面には爪痕の様な筋が多数認められる。外面口縁を緩いナデが一周する。高台の貼付けは雑で、断面三角形を呈する。外面はミガキが認められない。468の体部は内弯ぎみに立ち上がる。外面には口縁端部から左下がりの粘土紐接合痕が認められる。口縁端部にはシャープな沈線が巡る。469も体部が内弯ぎみに立ち上がる。内面のミガキは密で、外面は荒い。口縁端部をミガキにより平滑にしている。470～474は瓦器小椀である。これらはいずれも内面口縁端部と、高台疊付部が著しく擦り減る。その結果、高台疊付の外側は接地していない。先にも記述したが、明らかに意図的なものである。470は内外面荒いミガキを施し、暗文はジグザグのものを交差し、格子状にしている。471の外面体部と見込は摩耗している。内面のミガキは幅3mmと太い。472の暗文はジグザグである。外面体部も斑に摩耗している。473の外面体部も斑に摩耗し、見込部の一部も摩耗する。外面には口縁端部から体部下端まで粘土紐接合痕が認められる。胎土は灰茶色を呈し、砂粒を多く含む。474の器面の摩耗状態もやはり471・473と同様である。内面体部を粗く放射状にミガキ、暗文はジグザグに太く施す。475は瓦器小皿である。色調は灰黒色を呈する。外底面は丁寧な指押えにより粘土紐接合痕を円形状に消している。口縁端部から体部にかけても接合痕が認められる。476は底部未調整の土師器皿である。底部には細かい指頭痕が遺る。胎土には微砂粒が多量に含まれる。477は高台付土師器皿である。「ハ」の字状に開く高い高台が付く。胎土は良く水簸される。478～482は底部糸切りの土師器皿である。478は直線的に斜め上方に挽き上げられる。見込部のふくらみを籠状工具により搔き取る。480の見込も搔き取られる。底部には箕子痕が遺る。479の口縁部内外面数箇所には煤が付着する。483は土師質羽釜である。外面はチョコレート色、内面は濃肌色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。鍔部下には煤が付着する。



第42図 SK-17遺物実測図



第43図 建物柱間模式図



第44図 建物遺構配置図

掘立柱建物（第43・44図）

建物跡を6棟、柵跡を3列検出した。「下面の検出遺構」の項でも記したが、整地土は場所によって厚さや範囲が規則性の無いものであったため、検出し得た面が同一となった。礎板、柱痕などが遺り、礎板の中には墨をひいたものも認められた。第43図にそれぞれの建物の柱間を示した模式図を挿れたが、これによるとだいたい一間7尺を基本としている。SB-1・2の建物は掘形を検出できず、礎板のみが浮き上がった状態(第44図)で検出した。実際はもう少し上面で検出すべきであった。建物の主軸を東西にするもの(SB-1・3・5)、または南北にするもの(SB-2・4・6)で時期差が有るのか。または主軸方向が同一の建物でも、方位において若干のずれのあるものも有り、この中でも当然時期差が生ずると考えられる。これらの建物の柱穴からの出土遺物は皆無に近く、瓦器、土師器皿の細片のみで、時期は概ね中世としか言いようがない。柱穴の重複関係において時期差が明瞭なものはSB-5とSB-6である。そして、これらの建物に付随するものとして柵が有り、方位性からどの建物に伴うものか判断するしかない。

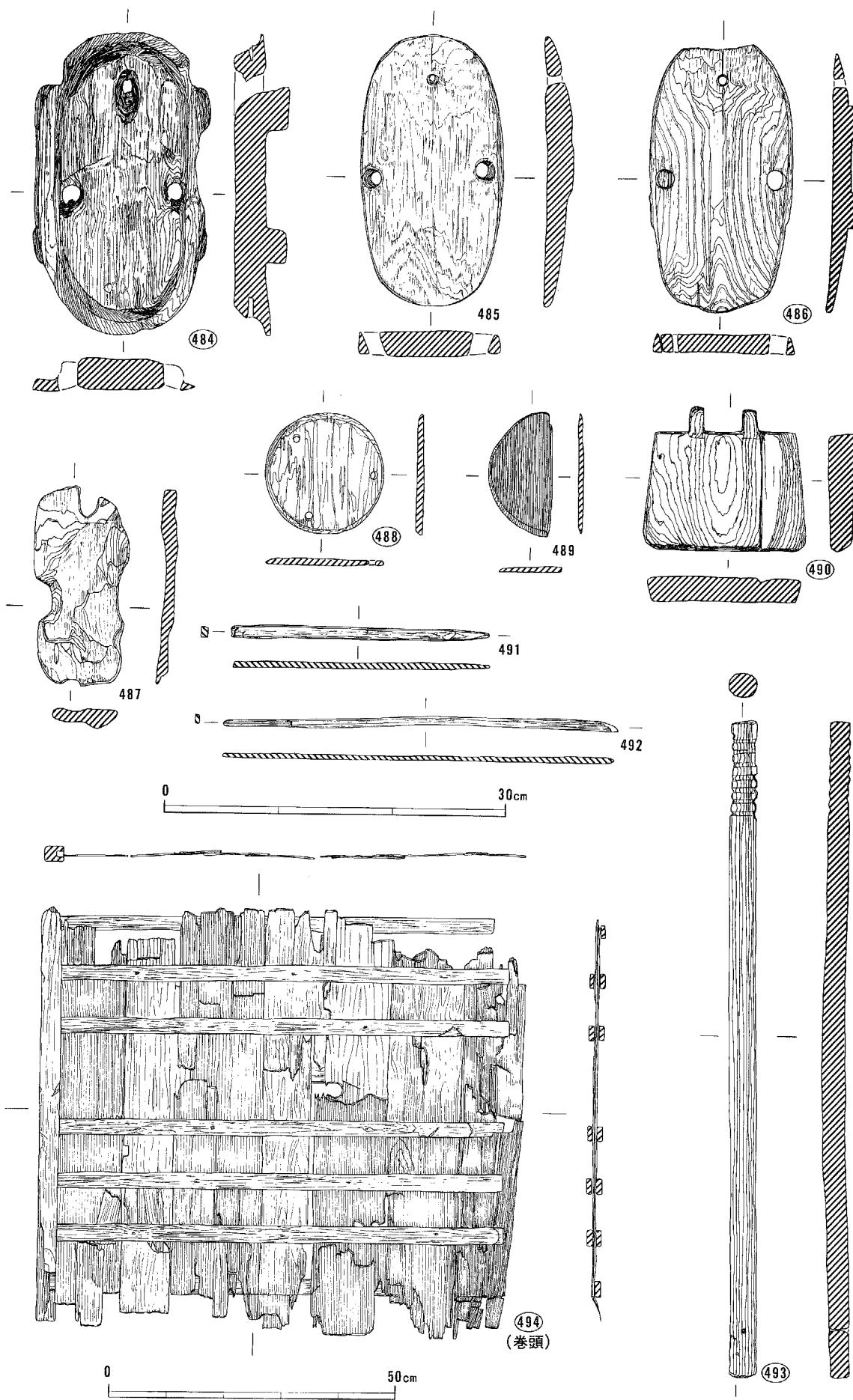
n o	(柱行 × 桁行)	規 模 (m)	方 位	備 考
SB-1	4間×1間以上	11.6×2.10以上	N-96°-E	柱穴彫形の切込面を確認できず、礎板のみの検出。
SB-2	2間以上×2間	4.13×4.30以上	N-3°-W	角柱の柱痕が遺る。柱材の中には意図的に墨されたものもある。
SB-3	5間以上×3間	8.14×6.28以上	N-3°-W	柱穴彫形の切込面を確認できず、礎石のみの検出。
SB-4	3間以上×2間	6.33以上×4.38	N-9°-E	柱穴彫形の底には礎石・礎板が無く、柱とともに転用の可能性あり。
SB-5	4間×3間	7.53×6.20	N-100°-E	SB-4同様に柱・礎板が確認できなかった。
SB-6	3間以上×2間	6.38以上×4.34	N-9°-E	柱穴が割合に整然と並び、一間7尺を意識している建物である。
SA-1	3間以上	6.60以上	N-9°-E	彫形は径60cmの不定形を呈し、10~20cm大のグリ石を使用。
SA-2	4間以上	8.67以上	N-9°-E	礎石は20~25cm大の大きさの焼った滑石を使用。
SA-3	3間以上	8.17以上	N-6°-E	扁平な石と板材を並べ、一つの礎石としている。

第2表 掘立柱建物一覧表

(方位は桁方向を軸とする)

遺構及び包含層出土の木器（第45図）

484~487は下駄である。484は特殊なタイプのものであろうか。普通の下駄より大き目で、厚目のものである。この下駄の呼称は分からぬ。大僧正の使用するものであろうか。材質はコウヤマキである。485・486は同タイプの下駄である。485は使用頻度が激しく、前後の歯が殆ど擦り減っている。486もよく使用されている。後部左側の鼻緒留の孔には詰め木が残存している。487は子供用の下駄である。鼻緒の孔は朽ちたのか、認められない。488は小さい曲物の蓋である。この縁辺部には直径5mm内外の三孔が等分の位置に穿たれている。489は曲物の底であろうか。やや梢円形を呈する。490は高下駄の歯である。高さは約10cmで、厚みは上部から下部に掛けてやや細くなり、2.3cm~1.9cmを測る。また上部には長さ2.0cm、幅1.3cmの差し込み部分が削り出される。491・492は用途不明の木製品である。双方とも先が焦げている。493は用途不明の棒状製品である。先端には7つの刻みがはいる。494は舞良戸である。板材と桟木から構成される。



第45図 遺構及び包含層出土の木器

第4節 金剛峯寺遺跡の樹種鑑定について

(財)元興寺文化財研究所 保存科学センター 井上 美知子

1. 鑑定方法

樹種の鑑定は木材の内部形態的特徴を観察することによって行なう。

そのため、カミソリの刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の三断面の切片を正確に作製した。これらの切片はサフラニンで染色し、エチルアルコール・n-プチルアルコール・キシレンの順に常法に従い脱水した後、非水溶性の樹脂（EUKITT）で封入し永久プレパラートとした。

木口面より針葉樹であることが確認されたため、樹脂道や、樹脂細胞の有無及び配列状態、分野壁孔の形態と数、ラセン肥厚の有無等を顕微鏡で観察し樹種の鑑定を行った。

2. 結果

鑑定の結果は次の通りである。

舞良戸 ヒノキ科（サワラ？）・下駄 コウヤマキ、曲物の蓋 ヒノキ、曲物の底 ヒノキ

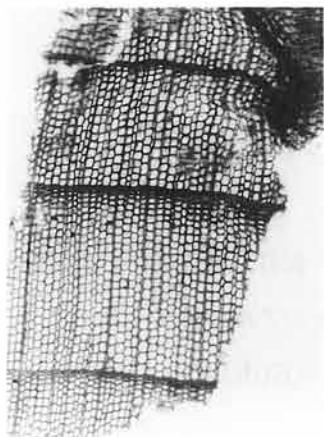
※ ヒノキ科に属する樹種 ヒノキ、アスナロ、サワラ、ネズコ等

3. 考察

舞良戸の桟木と板材の用材の切片は、木口面で晩材への移行が比較的緩やかで、樹脂細胞が晩材部と早材部に分布すること、柾目面で分野壁孔の型は不明瞭であるが4個見える分野があることより、ヒノキ科のサワラと思われた。サワラは岩手県以南の本州と四国、九州の一部に分布し、湿気の多い肥沃地で溪流沿いに多く生じる常緑針葉高木である。割列性が大きく切削性が良好なため桶等の器具や建築、建具等に用いられる。

下駄の用材はコウヤマキであった。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州の海拔600～1200mの山地で、通風、日当たりの良い北尾根などに生する常緑針葉高木である。庭園や寺院、墓地に植栽される。材は耐久性、耐水性、割列性が大きく、切削性が良好なため、木棺、建築、土木に用いられる。下駄の出土例は8世紀以降の遺跡に多い。『日本の遺跡出土木製品総覧』による樹種鑑定の結果ではスギやヒノキが多くコウヤマキは見あたらない。コウヤマキは和歌山県高野山に多いのでこの名がついている。僧坊の防火樹として多く植えられており容易に入手できたものと考えられる。

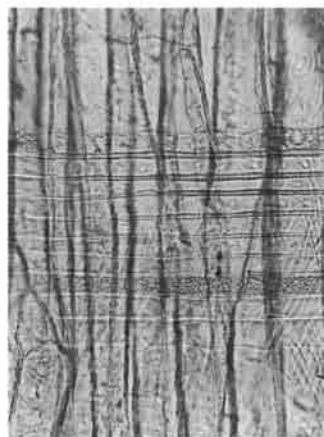
曲物の用材はヒノキであった。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州に分布し、山地、急傾斜地、尾根筋等に自生する常緑針葉高木である。耐久性、割列性が大きく、切削性が良好で寺社建築、高級建築、建具、彫刻、器具、曲物、漆器、桶等に用いられる。遺跡出土の曲物の用材はほとんどが針葉樹であり、その大部分がヒノキである。



1-1 舞良戸（桟木）ヒノキ科(ヤツラ?)

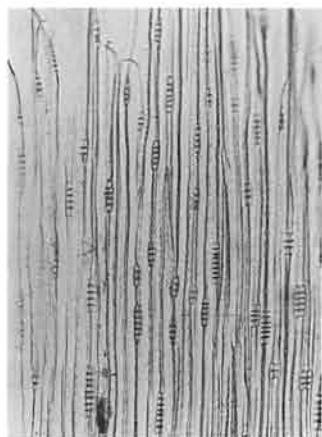
木口

30倍



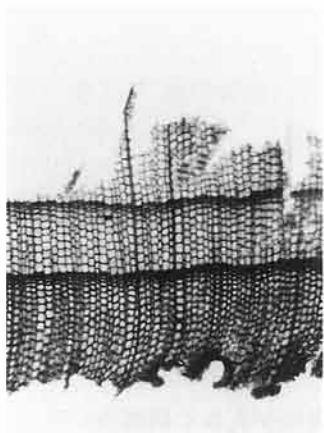
柾目

200倍



板目

50倍



1-2 舞良戸（板材）ヒノキ科(ヤツラ?)

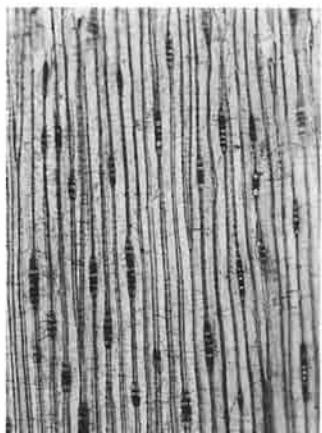
木口

30倍



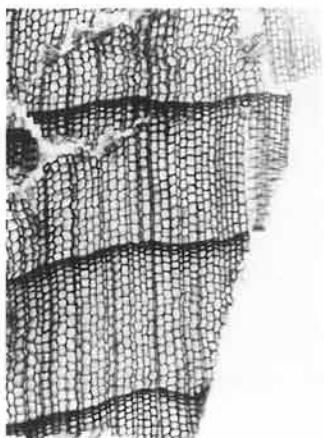
柾目

200倍



板目

50倍



2 下駄 コウヤマキ
木口 30倍



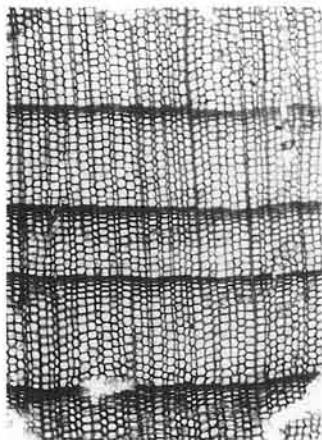
柾目

200倍

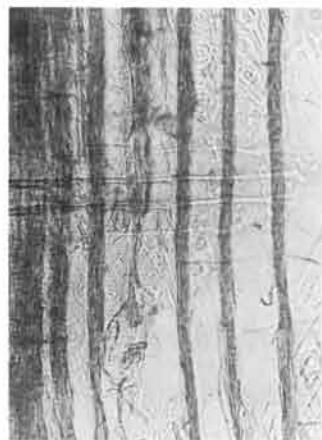


板目

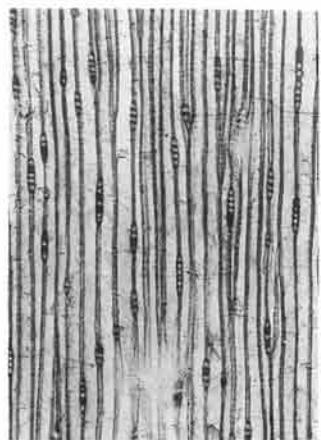
50倍



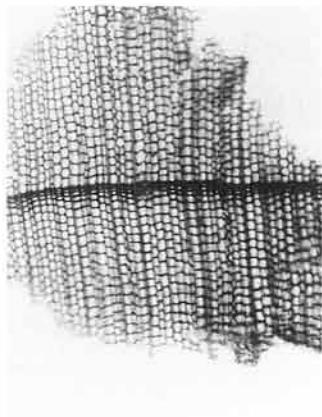
7 曲物の蓋1 ヒノキ
木口 30倍



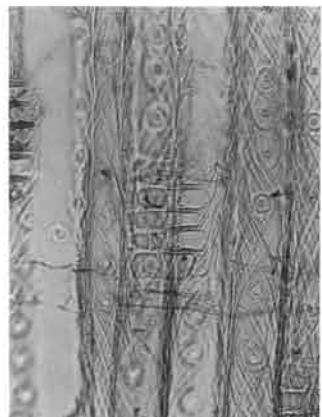
柾目 200倍



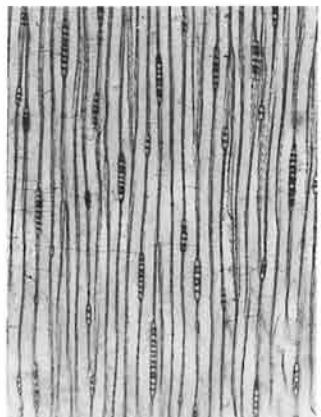
板目 50倍



11 曲物の底2 ヒノキ
木口 30倍



柾目 200倍



板目 50倍

参考文献

- 1) 島地 謙・伊藤隆夫、日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣 1998
- 2) 林 弥栄・古里和夫・中村 恒雄監修、原色樹木大圖鑑、北隆館 1993（3版）
- 3) 平井信二、木の事典〔5〕、かなえ書房 1980

第III章　ま　と　め

〈高野山の発展と出土遺物〉

金剛峯寺遺跡の過去の調査では、奥之院や壇上伽藍周辺といった特別な地域を除いては、創建時やこれよりやや下った時期の遺物が出土しない。このことの要因と成るものには次の2点が挙げられる。第1点として金剛峯寺としては時期的にまだ搖籃期で、範囲が狭小なため。第2点としてこの時期教団内でのいさかい等で山内が無住に近い状況下におかれたことなどである。

本調査対象地区でも他の発掘調査同様に、11世紀から12世紀に掛けての遺物(白磁・瓦器等)が出土遺物の中で最も古いような傾向を示しているように思われる。従って、この時期に高野山が拡大した状況が窺れる。そして、その後の納骨信仰により金剛峯寺の繁栄を促したことと出土の土器をもって証明できる。

〈不可思議な遺物〉

今回調査の出土遺物で目だって多いものは瓦器、土師器皿である。この中でも瓦器小椀の出土の量は多く、他の中世遺跡と様相を異にしている。この瓦器小椀の出土量もそうであるが、これらの口縁内外面と高台畳付部分が異様に摩耗していることがある。土器観察だけの見解ではあるが、意図的に何かで撫でているように思われる。内外面中位に指頭大の摩耗した痕跡を1または2箇所遺すものも見うけられ、片手で持ち他方の手で撫でたことが推測される。このことの意味は寺院遺跡としての性格の中で考えるのが妥当と思われる。真言密教の作法と何らかの関係があるのか、またその用途は何であるのかという点は今後の課題である。

〈東寿院銘の漆椀〉

調査地の建造物名称の手がかりと成るものとして、東寿院銘の漆椀が出土している。果たしてこの調査地点がその院名に相当するかは疑問である。『東寿院』を古絵図に頼っても見当らず、ただ、「紀伊續風土」に『中性院』の財産目録としての記載を見出すだけである。これによると中性院の子院と考えられ、「今は廃亡す」とある。

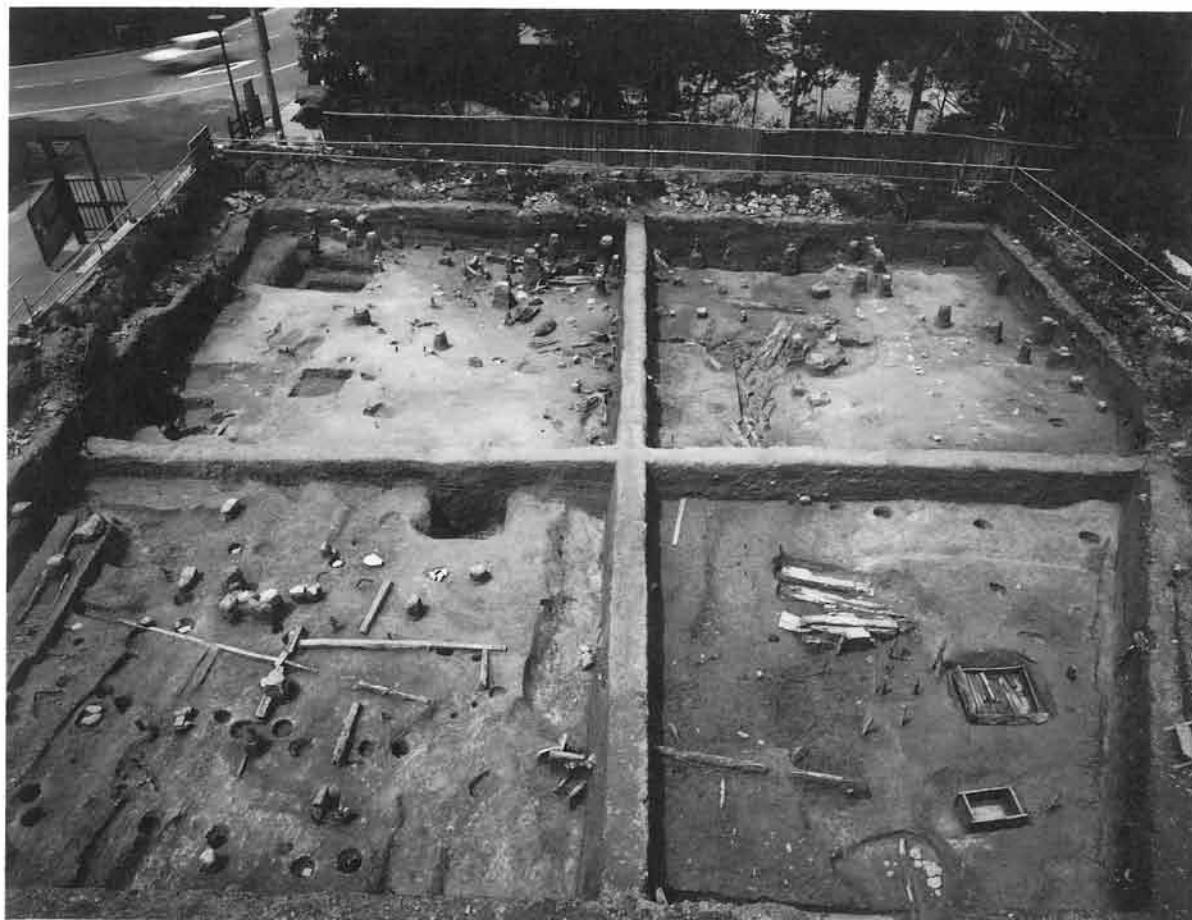
遺構が把握できない状況の発掘調査となつたが、平安時代後期と考えられる舞良戸や瓦器小椀、院名を記した漆椀などが出土し、遺物としては若干の成果を得られた。特に瓦器小椀については、次期からの金剛峯寺遺跡の発掘調査に着目し、その用途解明が望まれる。

- (註 1) 高野山の位置と環境については「靈宝館新収蔵庫及び駐車場建設に伴う発掘調査報告書」に詳しい。
- (註 2) 註 1 と同じ。「新・高野山領ものがたり」1988・8
- (註 3) 根来寺開祖覚鑓については「根来寺展」に詳しい。昭和63年4月根来寺展実行委員会
- (註 4) 詳細は第 1 表の既往の調査報告書及び概報をご覧下さい。
- (註 5) 福建省漳州窯系青花・五彩・瑠璃地の編年
大阪府埋蔵文化財協会研究紀要 3——設立10周年記念論集——1955年3月
- (註 6) 形状は異なるがこれに酷似したものが「高野山発掘調査報告書」
(財)元興寺文化財研究所1982年3月の91ページに記載されている。

図 版



調査前全景（東から）



下面遺構全景（南から）



A区 下面遺構検出状況（南から）



B区 下面遺構検出状況（南から）



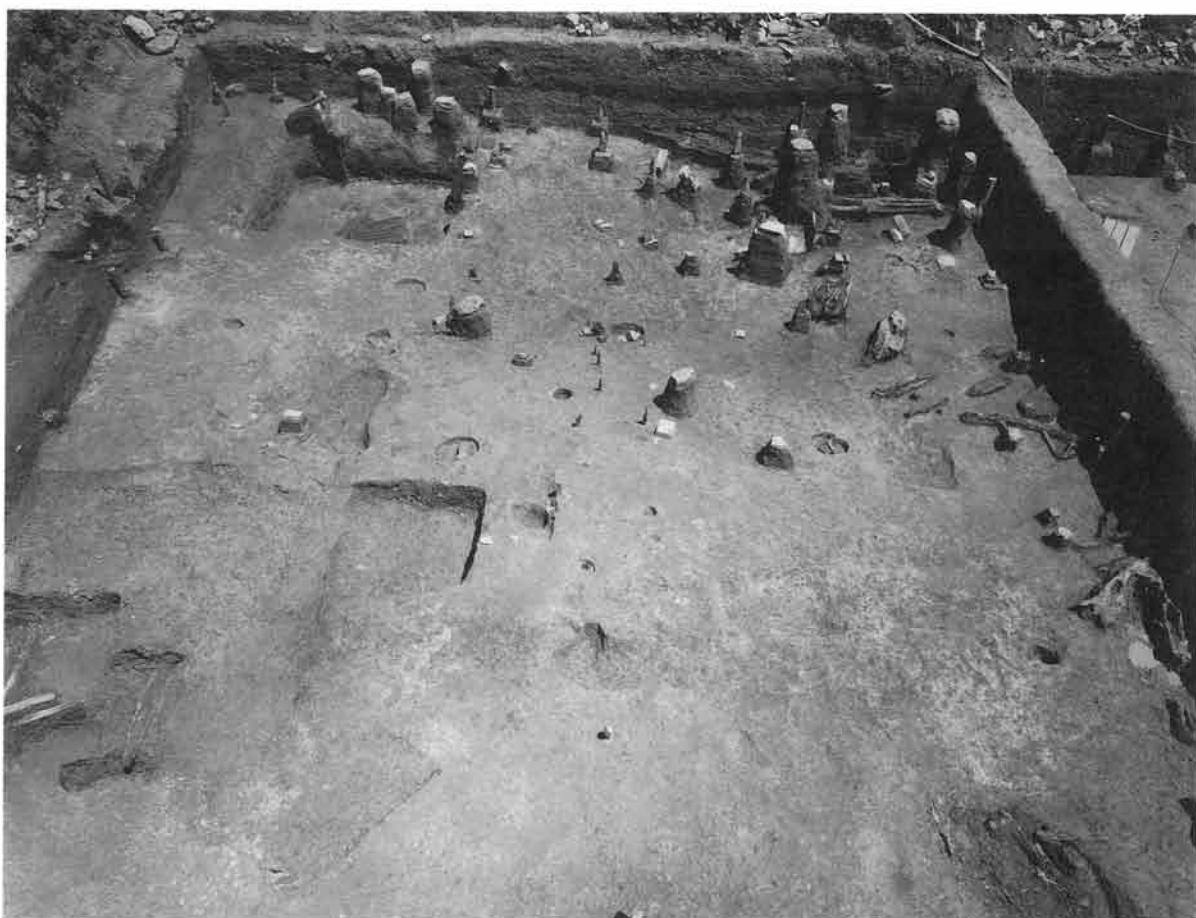
C区 上面遺構検出状況（南から）



C区 下面遺構検出状況（南から）



D区 上面遺構検出状況（南から）



D区 下面遺構検出状況（南から）



左上 SE-2 検出状況及び完掘状況

左中 SK-17内舞良戸出土状況

左・右下 柱根及び礎板検出状況

右上 SE-1 完掘状況

右中 窓検出状況



13



14



17



21



26



27



51



29



42



52

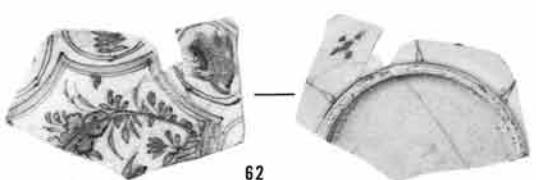


53

54



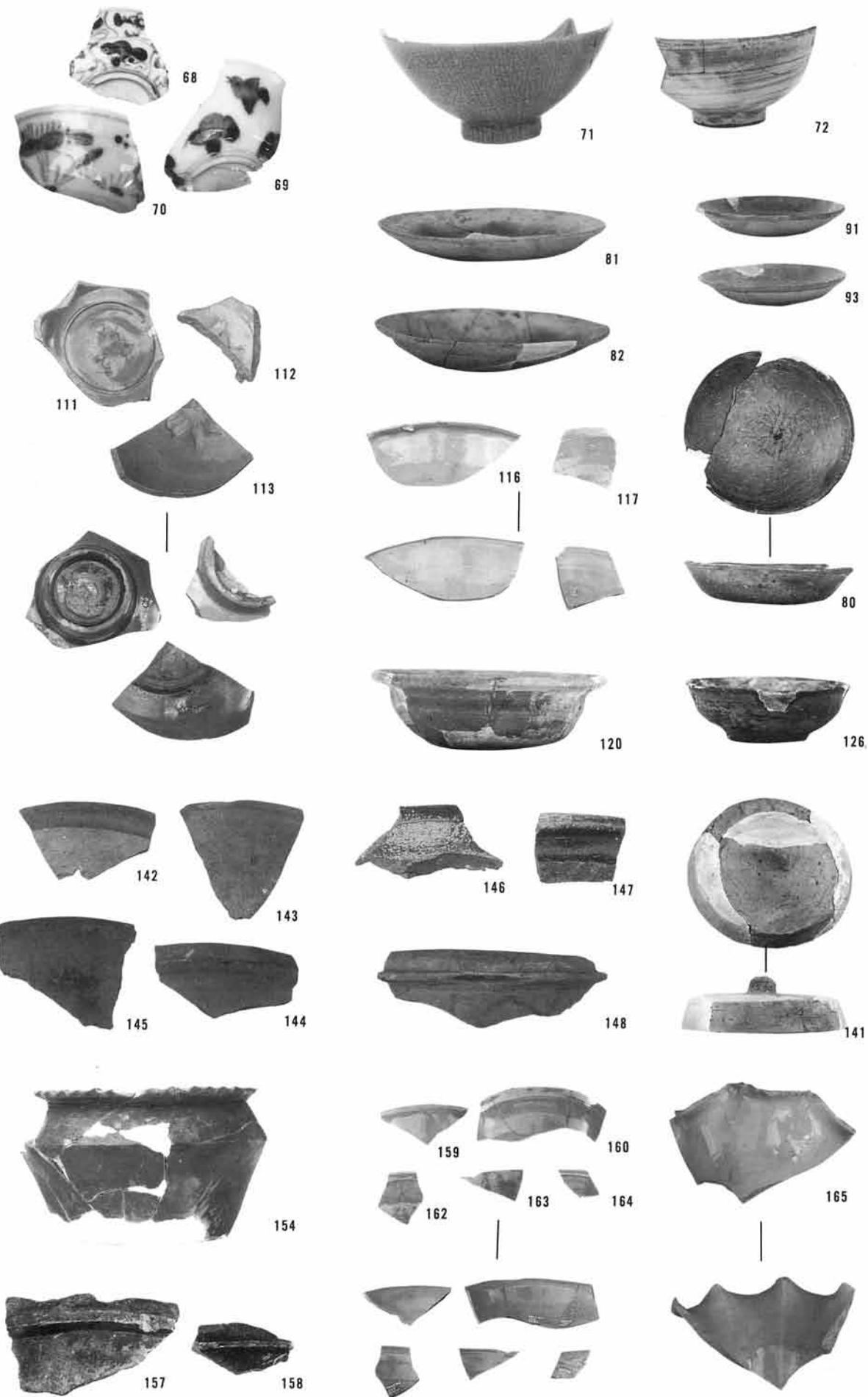
60

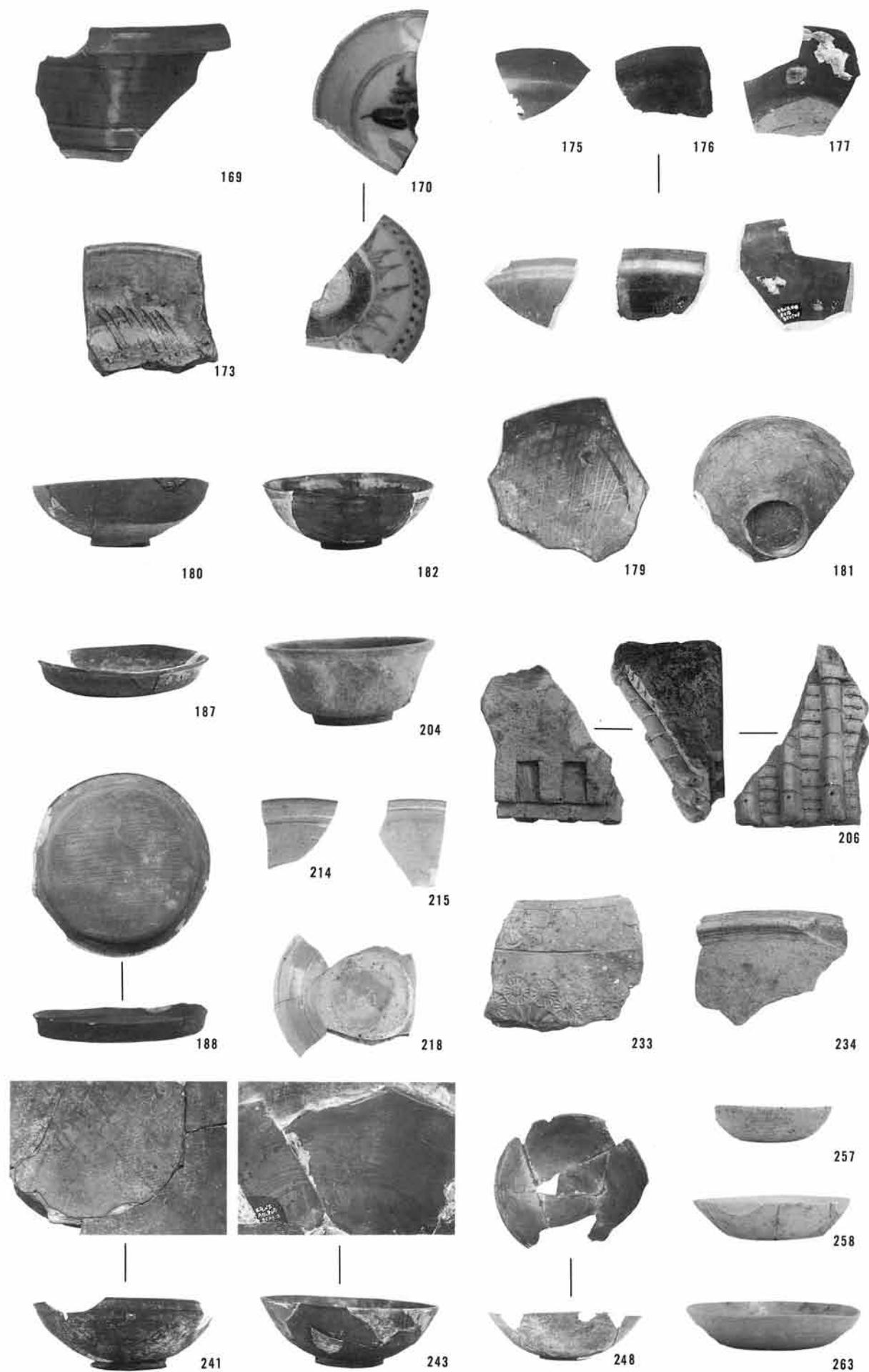


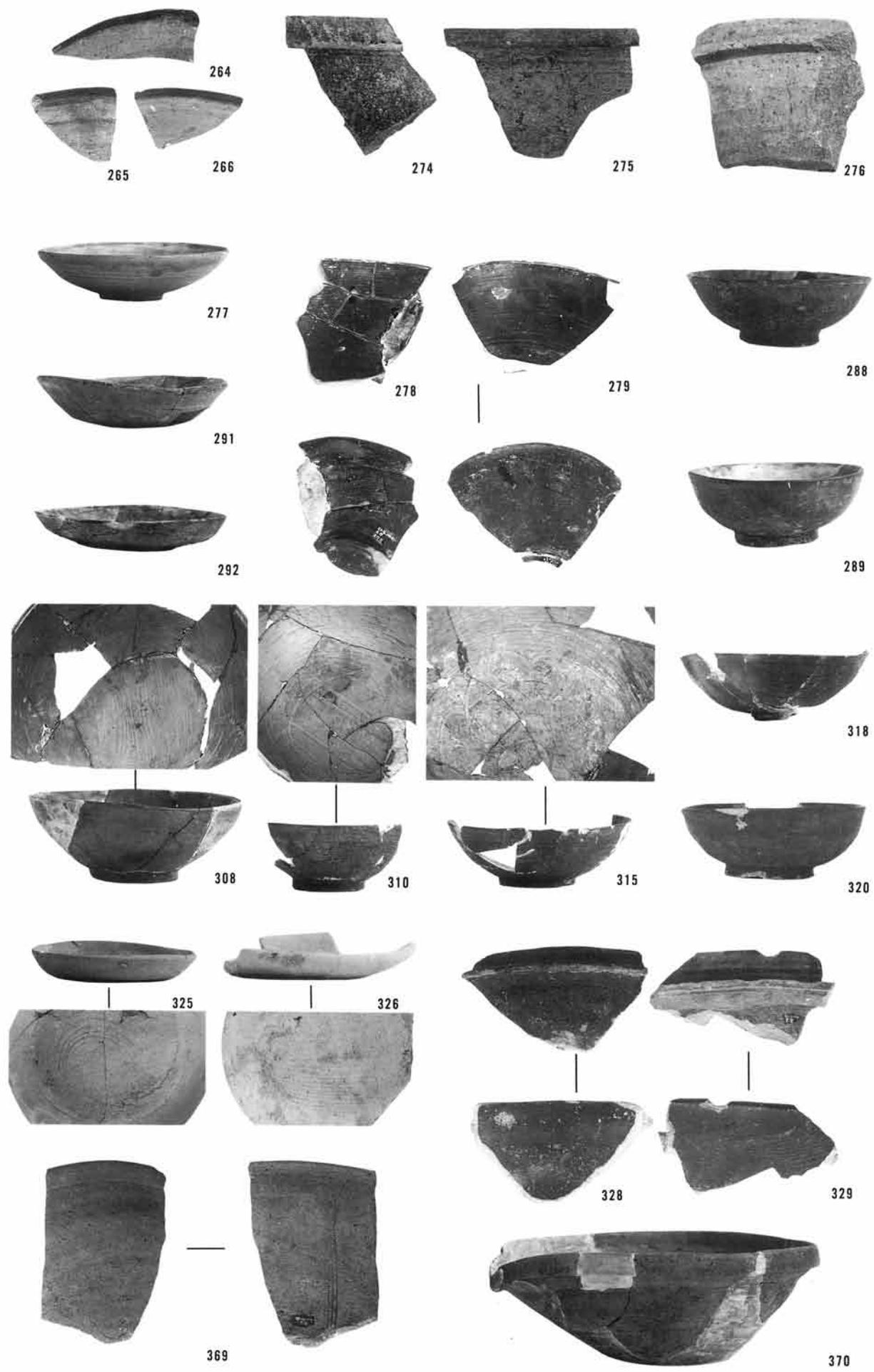
62

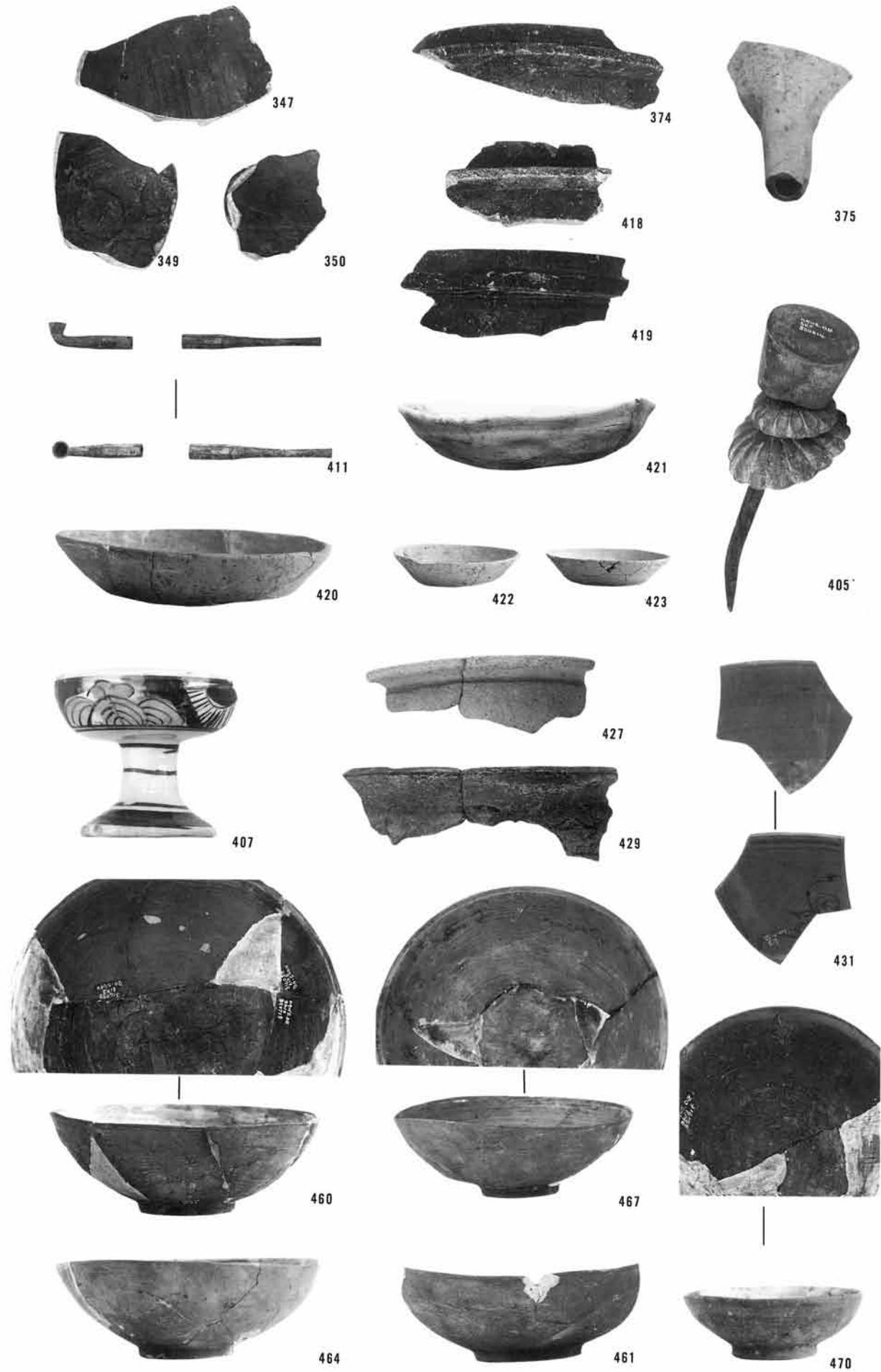


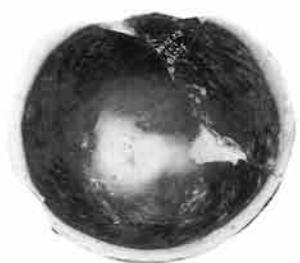
59











471



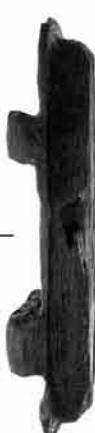
473



474



475



484



493



480



490



486



478



488

報告書抄録

ふりがな	こんごうぶじいせき					
書名	金剛峯寺遺跡					
副書名	尼僧研修道場建設に伴う発掘調査報告書					
編著者名	佐伯 和也					
編集機関	財団法人 和歌山県文化財センター					
所在地	和歌山市広道20番地					
発行年月日	1996年3月					
所収遺跡	所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯 東経	調査 期間	調査面積 (m ²)	調査原因
こんごうぶじいせき 金剛峯寺遺跡	高野町 高野山	3034450 004	34°12'30.7" 135°35'10.2"	1985.5.16 ~ 1985.7.30	480	尼僧研修道場 建設のため
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
金剛峯寺遺跡	寺院跡	中世 ~ 近世	建物跡	土師器皿・ 土師質土器 中国製磁器 ・瓦器 近世磁器・ 木製器	既往の調査からも子院跡と 考えられる遺構が多数検出 されている。中世における 建物配置を検討する上で、 重要である。	

金剛峯寺遺跡

尼僧研修道場建設に伴う発掘調査報告書

1996年3月

編集

(財) 和歌山県文化財センター

発行

印刷 西岡総合印刷株式会社